

福島安正のユーラシア大陸旅行

—— 一八八〇年代から九〇年代を中心として ——

澤田次郎

要旨 本稿は一八八六（明治十九）年から一八九六（明治二十九）年にかけて、陸軍参謀本部の情報将校・福島安正がユーラシア大陸で行った四つの視察旅行を検証した。すなわち、①英領インド調査、②バルカン半島視察、③シベリア単騎横断旅行、④亜欧旅行（とくにベルシヤと中央アジア）である。

これらを通観した上でいえることは、第一に福島の視野の広さである。ベルリン駐在時の福島は任地のドイツ軍や独露国境地帯のロシア軍の兵力を調べるとともに、ロシアの中央アジア鉄道、シベリア鉄道建設に注目してその動きを追うなど、ユーラシア大陸全体に目を配っていた。

第二にヨーロッパ、中近東、中央アジア、インド、新疆、モンゴル、シベリアをめぐるロシアの動向を、東アジア、日本とリンクさせながら地政学的に観察していることである。ユーラシア大陸という大きなチェスボード全体を見渡しながら、福島はロシアの黒海・中近東、アフガニスタン、北東アジアへの南下の動きを総合的、有機的に捉えていた。

第三にインド調査を除く三つの旅行を自分で企画、提案、実行したことである。その際、一つの旅行が次の課題を生み、さらに新たな旅行へとつながっていった。その結果として、第四に福島は、ロシアをその南部周縁部から監視するラインを創造した。すなわちトルコ―ベルシヤ―中央アジア、モンゴル―満洲―シベリアのラインである。その萌芽は遅くともバルカン半島視察時の一八八九（明治二十二）年十二月に見ることができるといえる。

以後、このロシア監視ラインの視点が陸軍情報部の伝統となり、そうした発想が一九三〇年代における昭和陸軍の「防共回廊」構想につながっていくと考えられる。

キーワード：福島安正、陸軍、参謀本部、情報、諜報、インテリジェンス、シベリア鉄道、中央アジア鉄道、カスピ海横断鉄道、防共回廊、ユーラシア、ロシア、ドイツ、バルカン半島、エジプト、オスマン帝国、トルコ、ペルシャ、イラン、イラク、中央アジア、アフガニスタン、インド、チベット、新疆、モンゴル、満洲、シベリア

目次

はじめに

一 イギリス領インド帝国

二 ドイツとバルカン半島

三 シベリア単騎横断旅行

四 ペルシャと中央アジア

おわりに

付録(表1～8)

注

主要参考文献

はじめに

福島安正（一八五二—一九一九年）は明治陸軍の建設者・山県有朋の信頼と庇護を受け、参謀本部の耳目として活躍した情報将校として知られる。とくに一八九二（明治二十五）年から翌年にかけてシベリア単騎横断旅行を成し遂げて帰国した際には、日本人の海外雄飛を象徴する英雄としてもてはやされた^{〔1〕}。さらに一八九九（明治三十二）年より参謀本部第二部長、一九〇六（明治三十九）年からは参謀本部次長を歴任し、陸軍の情報工作の中核を担った。

本稿は一八八六（明治十九）年から一八九六（明治二十九）年にかけて、すなわち福島が三十三歳から四十四歳（大尉から大佐）までの期間にユーラシア大陸で行った四つの視察旅行をとり上げ、これを通観して検証することを目的とする。ここでいう四つの旅行（①英領インド調査、②バルカン半島視察、③シベリア単騎横断、④亜欧旅行）については、すでにいくつかの先行論考が粗上に載せている^{〔2〕}。しかしこの四旅行を一括りにして一度に考察するという研究は、管見の及ぶ限りでは存在しない。そうした中で島貫重節氏のみ『福島安正と単騎シベリア横断』上下巻において、①英領インド調査、②バルカン半島視察、③シベリア単騎横断旅行、『戦略・日露戦争』上巻において、④亜欧旅行（インドシナ半島、ビルマからコーカサス地方までアジア、ヨーロッパにまたがる長期周遊）を検証している。島貫氏の著作は福島家所蔵の各種一次資料を用いるとともに、氏自身の陸軍将校としての経験（満洲とソ連・外モンゴル国境地誌偵察、参謀本部勤務など）を活かしながら福島の情報活動を生き生きと描き出すもので、日本における情報史研究の優れた先駆的業績として高く評価されるべき作品である。

ただし一般向けの読者を想定して細かい脚注が振られていないため、出典が明らかでない箇所が見られるのが惜し

まれる。またごく小さい点ではあるが、第一回目のインド旅行のコースが一部誤って記述されているなど訂正を要する部分が見受けられる。そこで本稿では島貫氏の研究に大きな敬意を払い、そこから学びつつ、四つの旅行を筆者なりに再検証し、整理し直してみたい。そうした作業を通じて、日本陸軍の対外情報活動の一つの原型というべきものを探ることが本論の目的である。

次にこのユーラシア大陸旅行において一貫して見られる福島の情報活動の手法、スタイルについて述べておきたい。第一に指摘しておく必要があるのは、四つの旅行のいずれにおいても身分を偽装した秘密の諜報活動ではなく、「公然手段」を用いていることである。視察に先立ってあらかじめその国の大公使館を通じて紹介状を得た上で入国し、その国の外務省、陸軍省の許可と保護を受けながら旅程を進めている。現地では常時、日本陸軍の制服を着用した。

第二に現場主義である。それ以前に清国でのフィールドワークや駐在武官を経験していた福島は、日本で描いていたイメージと現実の清国とのギャップを実感し、「百聞は一見に如かず」が真理であることを実感した。それ以来彼は、「現場主義」という言葉を用いているわけではないが、自分の目と足を使って現地の生の姿を見ることがとくに重視していた。またそれと関連して、後述するようにボスポラス海峡などの要所を写真撮影している。⁽⁴⁾

第三に物質面と人間面の両方を観察することを主眼に置いていたことである。現地において福島は、使われている兵器、兵営や軍需工場などの施設といった物質面、ハードウェアを仔細に探った。その一方で兵隊が軍紀をどの程度守っているか、演習に見られる練度はどれくらいか、兵士だけでなく国民全体の愛国心や公に奉仕する精神はどうなっているかといった人間面、精神面に着目している。国家の礎となる青少年の学校教育の状況についても目を配っていた。

第四に語学力である。福島は英語、ドイツ語、フランス語、中国語でコミュニケーションをとることができた。英語については、明治維新直後の十六歳から十八歳まで、開成学校、大学南校で学んだ経験があり、同校ではネイティ

プの教員が英語で授業を行っていたことを考えると、早くから生の英語に接していたといえる。そうした素地があったこともあって、福島は英語でかなり自由に会話ができた。また中国語、ドイツ語は在北京、在ベルリン日本公使館付武官の時代に鍛えたものであり、フランス語は武官として各国外交官と交流する際に必要にかられて学んだものであろう。ただしロシア語は、シベリア単騎横断旅行をスタートしたばかりの時はまだうまく話すことができなかった。ロシア軍将校の多くがドイツ語かフランス語を話したため、彼らとのコミュニケーションは円滑にできたが、部隊が駐留していない地方ではロシア語を使わざるを得ず、身振り手振りも交えながら住民との意思疎通をはかった。なお福島によると、現地の言葉を知らなくともその場で単語を覚えていき、二〇〇〜三〇〇語くらいを知れば日常会話ができるようになったという⁶⁾。ロシアの寒村僻地やモンゴル、ペルシャ（一九三五年に国号をイランに改称）ではそうした方法を用いたのではないかと考えられる。

第五に福島の人間性である。明治を生きた日本人として、愛国心と報国の意志が強かったことはいうまでもない。また彼はアジアの行く先々で不衛生な生活風景を描写し、多くの人々が不誠実で約束を守らず、嘘をつき、だまそうとすることを記している。どれほど経験を積もうと、福島は最後までそうしたことを割り切ることができず、怒りを感じ続けていた。そうした点で彼は清潔と誠実を重んじ、アジアの衰退を憂える日本人のままであった。しかし四角四面で面白味の欠けた人物であったわけではなく、エジプトのナイル川流域を回った際には現地の英軍将校との宴会で彼らを爆笑させるといった場面もあり、ユーモアも兼ね備えていたことがわかる。つまり実直であるとともに社交にも長けていた。

ただしアルコールは体質的にまったく受けつけず、これは、いわば「俺の酒が飲めないのか」「酒を飲まなければ友達ではない」といった文化的風土をもつ国や地域で情報を集める上では不利であった。ロシア領であったラトビア

のある町では、晚餐をともした裁判長がウォッカの杯を空けるよう無理強いし、福島が断り続けると、怒って席を立て出て行ってしまおうということがあった。⁽⁸⁾ また同じくロシア領であったポーランドのロシア軍連隊では、文官が福島のコーヒーの中にウォッカを混ぜるといっていたずらをしたため、激しい頭痛に苦しめられるといったこともあった。⁽⁹⁾ しかし別のロシア軍部隊では連隊長がかばってくれ、福島の旅の前途は長いのだからといって部下の将校たちにウォッカの強要を戒めている。⁽¹⁰⁾ ともかく固く断ることによって何とか切り抜けていたようである。

以上あげたようにユーラシア大陸旅行において福島は、基本的に公然手段の形で情報を収集し、現場主義にもとづき物質面と人間面の双方から観察を行い、英独仏中の語学力を活かすとともに、足りない分は現地で即席に身につけた実戦的会話法で補い、日本人としての国民性は無理に変えることなく、その場にに応じて柔軟に社交を行ったわけがある。

最後にそうした情報活動のスタイルの根底にあった福島の基本概念についても言及しておきたい。まず福島は現代の国際政治理論でいうリアリズムの見地に立ち、世界は弱肉強食の状態であって「勢力権衡」によって平和が保たれると考えていた。そのためパワーバランスの観点から国際政治の動向を読み解こうとする姿勢を一貫していた。

次に彼は日本と東アジアに脅威を与える列強、いわば潜在敵国として、ロシア、イギリス、フランスの三国を想定していた。このうちイギリスについては一定の敬意を抱いていたが、同国を甘い目で見ようなどとはなく、亜欧旅行の際にシンガポールに寄港した際はイギリス軍の防備状況を調べている。⁽¹¹⁾ それとともにイギリスの植民地支配に強い憤りをもっており、併合されて間もないビルマに対してはとりわけ同情していた。⁽¹²⁾

右のように福島は勢力均衡の観点をもち、そこから仮想敵国ロシア、イギリス、フランスの行方を見定めようとした。さらにその際、彼は後に触れるように、現代でいう国家戦略とインテリジェンスという観念を明確に持ち合わせ

ていた。国家戦略については「対外規画」、インテリジェンスについては「相手の実力を詳らかにすること、または「諜報」という言葉を用いている。国家戦略を策定するための材料として情報を集めるといのが、その基本姿勢であった。

以上のような情報活動の手法、スタイル、根本認識を備える福島は、ユーラシア大陸を舞台にどういった情報活動を展開したのであるか。以下、順を追って見ていきたい。¹³⁾

一 イギリス領インド帝国

福島安正歩兵大尉は参謀本部陸軍部、内閣の命により、一八八六（明治十九）年三月から九月までの半年間、イギリス領インド帝国の調査を行った。往復の航路を除いてインドに滞在したのは実質四ヶ月である。福島以外に田内三吉工兵中尉、菅谷秀治三等軍医が同行した。一行の目的は英領インド軍の「兵制、輜重法及び医務研究」を行うことであった。¹⁴⁾ 菅谷軍医のみ医務調査が任務であったためシムラーから別行動をとっている。福島大尉はつねに田内中尉と行動をとにしたが、視察チームのリーダーであり、報告書も主として彼が執筆していると考えられるため、以下福島を主体としてその行動を記していくことにする。

当時の英領インド軍は大別して三つの地域を管轄し、北部のベンガル軍、中部のボンベイ軍、南部のマドラス軍から編制されていた。さらに各軍は在印イギリス陸軍（交替で一定期間インドに駐留した上で本国に帰る英軍連隊）とインド陸軍（現地駐在の英人将校指揮下にあるインド人部隊）の二つの軍隊から構成されていた。本稿ではその全体を「英領インド軍」、その構成単位を「イギリス軍」「インド軍」と区別して呼ぶことにする。

福島大尉と田内中尉がたどったルートは以下の通りである。⁽¹⁶⁾

〔一八八六（明治十九）年〕

三月二十七日 横浜出航

四月 三日 香港

六日 香港発

九日 サイゴン（二十四時間碇泊）

十二日 シンガポール

十八日 シンガポール発

二十日 ペナン寄港、同日発

二十四日 ラングーン（現ヤンゴン）

二十六日 ラングーン発

二十九日 アキヤブ

三十日 アキヤブ発

五月 一日 チッタゴン

二日 チッタゴン発

〔英領インド〕

(現インド領)

四日 カルカッタ (現コルカタ)

八日 カルカッタ発 (以下、移動は一部馬車などの例外を除き鉄道による)

十日 ラクナウ

十一日 ラクナウ発

十二日 デリー

十三日 デリー発

十四日 アンバラ

十五日 アンバラ発

十六日 シムラー

六月 七日～十二日 ナルカンダ視察

七月 一日 シムラー発

(現パキスタン領)

二日 ラホール

四日 ラホール発

五日 ラーワルピンディー

六日 ラーワルピンディー発

七日 ペシャーワル

八日 ペシャーワル発

九日 (↓ラーワルピンディー経由↓) コハト

十一日 コハト発 (↓ラーワルピンディー、

十二日 ラホール経由↓)

(現インド領)

アムリトサル

十三日 アムリトサル発

十四日 (↓アンバラ、サハーランプル経由↓) ルールキー

十六日 ルールキー発 (↓サハーランプル経由↓)

十七日 アーグラ (夜タージ・マハル見学)

二十日 アーグラ発、ジャイプル着

二十二日 ジャイプル発、アジュメール着

二十四日 アジュメール発

二十五日 ボンベイ (現ムンバイ)

三十日 ボンベイ発、プーナ (現プネー)

八月 二日 プーナ発

- 三日 (↓ハイデラバード経由↓) セカンデラーバード
九日 セカンデラーバード発
十一日 マドラス(現チェンナイ)
十三日 マドラス発
十四日 バンガロール
十六日 バンガロール発、マイソール着
十七日 マイソール発、バンガロール着
十八日 バンガロール発
十九日 メットウパイヤム (Metpalayam) ↓オータカムンド (Ootacamund, 現ウダガマンガラム
Udhagamandalam) 着
二十三日 オータカムンド発↓メットウパイヤム着
メットウパイヤム発
二十四日 (↓エロード経由↓) トリチノポリ (現ティルチラーパッリ)
二十五日 トリチノポリ発
二十六日 マドウライ
二十七日 マドウライ発、トゥティコリン (現トゥットウツクデイ) 着
トゥティコリン 出航

二十八日 コロンボ

三十日 コロンボ発、キャンデイ着

九月 一日 キャンデイ発、コロンボ着

二日 コロンボ出航

八日 シンガポール着、上陸、シンガポール発

十一日 サイゴン（現ホーチミン）着

十二日 サイゴン発

十五日 香港

十六日 香港発

十八日 澎湖島寄泊

十九日 澎湖島発

二十三日 神戸

二十四日 神戸出航

二十五日 横浜

以上のルートから明らかのように、福島大尉と田内中尉はまずインド帝国の首府カルカッタに到着後、直ちに夏季首都シムラーに移動し、そこで一ヶ月半の調査を実施した。その上でアフガニスタンとの国境に近い北西辺境州のペシャーワール、コハトまで足を延ばし、英領インド軍の国境防備を視察している。以後は南に下りながら軍事施設を回

り、英領インド政庁の統治下で内政権を認められていた藩王国（いわば保護国）のニザーム王国（ハイデラバード王国）やマイソール王国の軍隊も見学した。

この調査はあくまで公式視察の形をとった。出発前、陸軍省から外務省を通じて駐日イギリス公使館に紹介状の依頼を行い、福島一行は日本政府の使節として現地の英領インド軍を訪問した。そのためインド政庁の協力の下、至れり尽くせりの歓待を受けている。カルカッタからシムラーまではダムダム駐屯第五十九歩兵連隊の中隊長ウィリアム・ワイリー大尉 (William Hutt Curzon Wylie)、シムラーからコロンボまではパンジャーブ駐屯第六歩兵連隊のヘンリー・B・アームストン大尉 (Henry Brabazon Urnston) がそれぞれ同行、案内している。ワイリー大尉の手によって、福島はシムラー到着早々にインド副王兼総督の初代ダフアリン＝エヴァ侯爵 (1st Marquess of Dufferin and Ava)、英領インド軍最高司令官のフレデリック・S・ロバーツ中将 (Frederick Sleigh Roberts) に面会することができた⁽¹⁷⁾。またアームストン大尉の連絡によって、至るところできれいな客車が用意され、シムラーからラホールに向かった際には、特別汽車が仕立てられたほどであった。さらにアームストン大尉は移動することに次の訪問先と鉄道駅にコンタクトをとった⁽¹⁸⁾。そのため福島一行が駅に到着するたびに、現地軍の将校や将官が出迎え、馬車で兵営に案内して宿泊所を提供し、夜は将校集会所で晩餐会が開かれた。アークラのマンチェスター連隊やセカンデラーバードのミドルセックス連隊では晩餐に軍楽隊が出演し、BGMに加えて「ミカド」の曲を演奏してみせるといったこともあった⁽¹⁹⁾。このように英領インド軍の兵制調査は同軍の全面的な協力を得て賓客待遇で行われた。

しかし調査旅行自体は決して楽なものではなかった。前記の旅程からもうかがえるように、シムラーでの一ヶ月半の滞在を除いてほとんど休みがなく、連日、夜行列車を乗り継ぐ強行軍であった。また福島がインドに滞在した前半の五月から六月は夏季、後半の七月から八月は雨季にあたり、旅行にもっとも適さない時期である。

最初に上陸したカルカッタは海風があつたためまだしのぎやすかつたが、そこからデリー、シムラーに向けて汽車に乗ると、すぐにインドの猛暑が実感された。日中の気温は摂氏四十七度前後に達し、車内に吹き込む軽風は近くに火事場があるかのように「炎々焦ル」がごとくで、駅の茶店に置かれたイス、テーブル、布巾や仕切りの壁はみな「非常ノ温度」を帯びていた。²⁰⁾ ヒマラヤ山脈の麓、標高二千メートルを超えるシムラーはさすがに涼しかったが、シムラーから下界に降りるとベシヤールは朝から三十五度にのぼり、「太陽ノ光線炎ノ如ク」で、正午には屋内で居場所を探すのに苦しみ、ただ呼吸をしているにすぎないという有様で、その暑さは「実ニ想像ノ及フ所ニ非ルナリ」といったものであつた。²¹⁾ そのため福島と田内は現地イギリス人の習慣に合わせ、早朝に兵営や演習を見学し、夜間に移動した。

このインド旅行は以下の三つの局面に分けることができる。第一にシムラーでのメイン調査、第二にアフガニスタン国境に近い北西辺境州の視察、第三にそれ以外の地域の見学である。

第一のシムラーでの調査であるが、これはデスクワークが主体であつた。シムラーに到着した福島一行は、英領インド軍参謀部に以下のプランを打診する。すなわち、①インド軍の編制・給養（人や馬への衣食供給）・輜重法を研究すること、②そのあとで西部の大都市を二、三見て、ボンベイ、マドラスを経て九月に帰国の途につくこと、③菅谷軍医は陸軍の衛生法・戦時軍医の編制・負傷者の運搬法などを研究し、なるべく早くシムラーを出発してベンガル、ボンベイ、マドラスの三州のうち有名な病院で実地の研究をすること、の三点である。参謀部は協力を約束し、調査に必要な書類はすべて提供するとして、同部のウィルソン大尉（Henry Fuller Matland Wilson か）を対応担当者とした。²²⁾

ウィルソン大尉はまず福島らを経理部運輸局へ連れて行き、輜重輸送に関する一冊の書籍（英領インド軍の運輸に

ついで政府委託の委員が提出した報告書⁽²³⁾を貸与したが、それは輜重の調査には最良の書であった。また福島と田内は経理部課報課長室に案内され、課長から日本全図を見せてもらい、すべてが「注意周到」で「百事頗る整頓」されていることに驚いた。さらにカルカッタから一行を案内してきたワイリー大尉に代わって、参謀部、輜重部での勤務経験があり、インド在留十七年で現地語にも通じるアームストン大尉が彼らの直接の付添役に任命された。アームストンは彼らの世話役であるとともに監視役でもあったといえよう⁽²⁴⁾。

福島一行は陸軍省内に一室を与えられ、そこで調査作業を行うことになった。非常に清潔な部屋で、ペン、インク、紙だけでなく給仕まで置かれた。参考書籍はアームストン大尉の周旋でことごとく準備され、さらに経理部長が十数冊の図書を追加し、その中には「最モ貴重ノ書」も含まれていた⁽²⁵⁾。福島と田内は、編制・輜重・経理につきそれぞれ二週間をあてることにし、毎日午前十一時から午後二時までの三時間をこの部屋でのデスクワークにあてた⁽²⁶⁾。また単に文献に目を通すだけでなく、担当将校からの聞き取りも行っている。たとえば参謀部射的課長ハッチンソン少佐(中D. Hutchinsonか)より、首都カルカッタのあるベンガル州での実弾射撃訓練の方法、ラバー一匹あたりの予備弾薬搭載数などの説明を受けている⁽²⁷⁾。

そうした作業の結果、福島は英領インド軍の兵数、輜重手段をほぼ完全に把握し、本稿の最後に付録として掲げた表1〜4のような数値を明らかにすることができた。また上ビルマに派遣されていた英領インド軍の兵数についても経理部調査の最新データを入手し、表5のような数値を報告している。マンダレーを中心とする上ビルマは清国との国境に接し、イギリスが清に侵入する可能性を探る上でそれは重要な参考資料となったはずである。

以上のように福島は英領インド軍の総兵数と輜重能力をつかむことに成功した。それによればインドに置かれた兵力は英軍、インド軍を合わせて二〇万五、五四八人から二〇万九、〇四二人程度ということになる。これとは別に藩

王国の諸侯がもつ諸兵（計三八万一、〇〇〇人）があるが、これは軍紀、訓練、武器が劣るだけでなく、イギリスの統治に叛旗をひるがえす可能性もあるので、強隣ロシアに対する防衛計画に算入することはできない。そこで最終的に英領インド軍の実数は二〇万二、〇〇〇余人以下で、そのうち六万余人にすぎないイギリス軍が中核となつて内外の防衛にあたっているというのが福島島の結論であつた。⁽²⁸⁾

以上のように英領インド軍の兵数は明らかとなつたが、それでは同軍の兵力はいかなる形でインド帝国内に配置されているのか。福島島の調査によると、英軍が有事の際に兵力、兵站を集中させる地点は以下になるといふ。⁽²⁹⁾

- (1) 三万人以上の大軍を集中させる場所
 - ① 北西国境を越えてアフガニスタンに進軍するためのラーワルピンディー
 - ② 同じくアフガニスタン国境に近く、ラーワルピンディーより南のムルターン、シカルプル
 - ③ 海外出兵のためのボンベイ、カルカッタ
- (2) 五、〇〇〇〜一万人を集中させる場所
 - ④ ネパール国境
 - ⑤ 英領ビルマ国境
- (3) 約五、〇〇〇人の小兵力を集中させる場所
 - ⑥ ハイデラバード付近
 - ⑦ グワーリヤル（グワーリヤル藩王国の首都）付近
 - ⑧ ブータン国境

⑨ アッサム地方ビルマ国境近くのナガランド

⑩ ナガランドより南のカチャルからルシャイ丘陵（ミゾ丘陵）を経てチッタゴンに下るビルマ国境近くのライン

以上が福島の把握した英領インド軍の兵力集中点である。このうちロシアのアフガニスタン南下に対応するという点でインド防衛にもっとも重要であるのは、①のラーワルピンディーとそこを後背地とするアフガニスタン国境近くの北西辺境州であった。福島によると、ロシア、またはロシアの支援を受けたアフガニスタンと交戦する場合、インド側は二軍団（五〜六万人）の最大兵力を導入することが予想された。⁽³⁰⁾

しかし英領インド軍の目的はそうした外敵の侵入を撃退することだけではなかった。もう一つのねらいは藩王国の諸侯を威圧し、その反乱を鎮圧することであった。⁽³¹⁾ 藩王国のうち兵数、編制、軍紀の各面で優れているのはグワールヤル王国、ニザーム王国（ハイデラバード王国）であったが、インド政庁、英領インド軍はグワールヤル王国についてはそれほど問題にしない一方、ニザーム王国を警戒し、その兵数を削減する必要があると考えていた。また諸侯が優秀な武器をもつことを許さず、砲兵も最小限に抑え、諸侯同士が合同演習を行わないようコントロールしていた。⁽³²⁾

以上がシムラーでの一ヶ月半のデスクワークを通じて、福島と田内がおさえた英領インド軍のポイントである。⁽³³⁾ これで総論的な把握は終了したので、次の課題は各論的に要所でフィールドワークを行うことであった。その際、最大のポイントとなるのは、ロシアの侵攻に備えて英領インド軍がもっとも兵力を集中させている北西辺境州である。

そこで福島と田内はシムラーを出発し、まずアフガニスタンとの国境まで二〇〇キロ余りの地点にあるラーワルピンディーを訪れた。ラーワルピンディーは現在もパキスタン陸軍司令部が置かれていることからうかがえるように、

「国境接近ノ要衝」であり、北西辺境州に置かれた防備部隊の後背拠点として見落とすことのできないスポットであった。ラーワルペンデイーに到着した福島と田内はまず輜重局を訪問して「百事著シク整頓セリ」との印象を受けた。次に英軍騎砲兵一中隊、ベンガル騎兵一連隊の練兵を見学したが、国境が近いだけに緊張感があり、「志気訓練共ニ著シキ」状態であった。さらに武器庫を巡覧すると、野砲・騎砲・山砲・城塞砲、スナイドル銃・マルチニー銃、砲車・弾薬車、天幕、馬具・象具・革具などがきちんと準備され、建物ごとに分類されて直ちに使えるようになっており、福島は「保存周到百事頗ル整頓セリ」と感嘆している。³⁴⁾

次にアフガニスタン国境から五〇キロに位置する北西辺境州の州都ペシャーワルを訪れた。ここはロシア領中央アジアからアフガニスタン經由で隊商が集まる場所、雑踏する市街にはアフガン人が多く、ロシア領のコークランド、サマルカンド、ブハラから来たイスラーム教徒の姿も見られた。³⁵⁾ つまりロシア領トルキスタンの存在が間近に感じられる町であったが、ここでとくに注意しなければならないのは、福島がロシアの中央アジア鉄道（別称カスピ海横断鉄道、トランスカスピ海鉄道、ザカスピ鉄道）の建設動向に注目していたことである。彼はラーワルペンデイー、ペシャーワルに向かう直前、中央アジア鉄道がカスピ海東岸を起点に現トルクメニスタンのアシガバートまで到達したこと、また中央アジア駐屯のロシア軍が六万人であるとの情報を得ていた。³⁶⁾ 同一年、同鉄道はさらにメルヴ（現マル）まで延び、二年後には現ウズベキスタンのブハラを経てサマルカンドまで達することになる。ペシャーワルにおいてロシア領トルキスタンからやって来た商人たちに遭遇した福島は、アフガニスタンの彼方にロシア東進の動きを感じ取っていたはずである。

ペシャーワルはインド軍駐屯地の中でとくに不健康の地といわれ、陸軍病院の病室は熱病患者で充満していた。輜重廠では暑気を避けるため兵隊の過半数が山地の兵営に移動していたが、それでも内部の様子は「直ニ変ニ応スルノ

準備ヲ為シ、百事頗ル整頓セリ」といったものであった。⁽³⁷⁾ また同地の軍隊で聞いた話によると、北西辺境州の輜重兵、山砲兵は険しい山岳地帯でも昇り降りができるラバを使用していた。馬は一頭につき一名の輪卒を付ける必要があるが、ラバは三頭につき一名でよく、一師団あたり輪卒二、〇〇〇人を節約することができるため、パンジャーブ州ならびにラージプターナー（現在のラージャスターン州）に大きな牧場が設けられているということであった。⁽³⁸⁾

右のようにラーワルピンディー、ペシャーワルで検分した英領インド軍の輜重体制はしつかりとしたものであった。⁽³⁹⁾ ついで福島と田内はペシャーワルから一旦ラーワルピンディーに戻った後、鉄道でクシャルガー(Kushalgarh, Khushtal Gah)まで行き、そこから馬車に乗ってペシャーワルの南七〇キロ余りのコハトに向かった。

コハトはインド政庁の支配が及ばないトライバルエリアに隣接し、トライブ（部族）の反抗に悩まされる場所で、北西辺境州の最前線というべき地点の一つであった。クシャルガー駅からコハトに至る約五〇キロの間にはパシウトゥーン人のアフリディ族の出没に備えたレンガ製の哨所が設置されていた。コハトはそうしたトライブの反乱に備えるだけでなく、アフガニスタンの首都カーブルへとつながる山道のクラム溪谷(Kurram Valley)を押さえる戦略的要衝である。福島は連隊長の案内でシク「教徒」第四連隊のインド山砲兵の発火準備を見学した上で、コハト砲台を視察した。このあたりの連隊はいずれも「連隊輜重」なるものを準備し、警報が出ると三時間以内に食糧、弾薬をもって行動を起こす手筈となっており、「都テ驚クヘキ整頓ヲ為セリ」といった状態であった。⁽⁴⁰⁾ ここにおいても英領インド軍の輜重体制はしつかりしていた。

以上のように北西辺境州での視察を終えた福島と田内は、コハトからラーワルピンディー、ラホールへと引き返し、そこからボンベイ（現ムンバイ）に南下してセカンデラーバードやマドラス（現チェンナイ）などの南部を回った上でセイロン島に至るルートを通った。⁽⁴¹⁾ その間、福島は兵器生産の現場を見て回っている。たとえばボンベイの兵

器局では五〇〇余名の職工が工場て修理にあたっており、砲車製造局では蒸気機関を動力とする三メートルにも及ぶ最新型のノコギリが稼働していた。さらに馬車鉄道会社の工場では五〇〇余名の人々が車輻馬具いっさいの製造修理を行っており、その様は「百事頗ル整頓セリ」といったものであった。⁽⁴²⁾ またプーナ近くのカルキーの駐留軍に付属する小銃弾薬製造所では約一、〇〇〇名の職工が一日平均四万発を製造していたが、各プロセスでのチェックが厳密で、工程の最後に弾薬を入れた箱を二十四時間水中に漬け、水分がどれくらい入り込むかをテストしていた。⁽⁴³⁾ そのほかにハイデラバードの徴兵団騎兵第三連隊のインド兵やマドラスの輜重兵の演習も見学しているが、いずれも熟練した見事なものであった。⁽⁴⁴⁾ 福島はこのような視察を通じて、英領インド軍が北西辺境州以外でも有事に備えて準備、訓練を怠りなく積んでいることを確認した。

他方、藩王国による反乱の可能性はどうであったか。先に触れたようにインド政庁、英領インド軍はニザーム王国（ハイデラバード王国）をとくに警戒し、その兵数を削減する必要があると考えていた。そこで福島はとくに同軍の現状を見極めようとして交渉した結果、ニザーム軍の野砲兵一中隊、騎兵三連隊、歩兵一連隊の演習を見学することができた。当日、分列式に案内されると「兵卒勇壯、軍服美麗ニシテ、隊列整頓、頗ル有為ノ兵」であり、表向きには好印象を受けた。しかし彼らの所持する武器を見ると、野砲兵は前装式（先込め）の青銅砲、騎兵は小銃なしで剣または長槍のみ、歩兵は前装式の「頗ル粗造」の小銃をもつに過ぎなかった。つまり時代遅れのものばかりで、これでは西洋の近代的軍隊に太刀打ちすることは無理であり、城内の治安を維持する程度のことしかできないことは明らかであった。また指揮官は英軍士官がつとめており、兵隊は定数を充たしておらず、騎兵連隊の一つは定員六〇〇名のうち半分しかいなかった。⁽⁴⁵⁾ 藩王国の中でもっとも充実しているはずのニザーム王国軍ですらイギリス側に抑え込まれていることは明らかであり、これでは反乱は不可能であった。

以上のような視察を終えてインドから帰国した福島は、英領インドの防備体制が相当のものであることを指摘している。イギリス側は要所に兵員を配置するとともに英本国から輸入する大砲、銃身以外はすべてインド各地の製造局で調達できるようにし、とくにアフガニスタン国境近くの北西辺境州の「整頓ハ実ニ驚クベキ」で、防御を厳にし、「魯ノ実力ト出師準備ノ計画」を精査してそれに応じる準備をしている。同州方面の英領インド軍は「一令ノ下、直ニ運動ヲ起スノ用意ヲ為セリ」というのである。また藩王国による反乱の可能性については、イギリスの巧みな分割統治 (divide and rule) や武器の貧弱を考慮すると、とても「覚束ナシ」としている⁽⁴⁶⁾。

しかしそれでも福島が目から見れば、英領インド軍 (二〇万二、〇〇〇余人以下、うち中核の英軍六万余人、ロシアに対して最大五、六万人の動員可能) は中央アジアのロシア軍 (六万人) の南進を阻止する上で万全のものではなかった。英露の兵力はとりあえず均衡しているが、両者の間には「攻守ノ差」があるという。つまりロシアはカスピ海東岸からアシガバートを経てメルヴまで中央アジア鉄道を延長して攻勢をかけ、イギリスは受け身の形となっている。そのため今後、両者の「平均」(パワーバランス) を維持することはできず、近未来にそれは崩れるであろうと福島は予見する。「両雄ノ相衝突スルハ将ニ此十年内外ニアラントス。然ラハ則チ、我東洋ノ運命ヲ決スルモ将ニ是ト同時ナランカ」。このように福島は、ロシアが中央アジア鉄道建設にともなって兵力を拡大増強し、アフガニスタンをめぐるイギリスと衝突するだろう、それは東アジアと日本の運命に決定的な影響をもたらすかもしれないと考えた⁽⁴⁷⁾。

さらに福島は次のように述べる。イギリスはロシアに対抗するため「日清ト連合スル」ことを急務としているが、それは当然であろう。「我國ニ於テモ真ノ文明強国トナルマデハ、魯ニ対シ英ト結フヲ得策トス」というのである⁽⁴⁸⁾。ロシアの中央アジア東進を前にして、日本はイギリスと提携してそれに備えるというのが、この時点での福島の戦略構想であった⁽⁴⁹⁾。彼にとってイギリスは仮想敵国の一つであったが、ロシアというよりさし迫った脅威に対抗するため、

当面は手を結んで利用すべき国とされたのである。

以上、本章では福島島のインド旅行を検証したが、最後にその要点をまとめておきたい。第一に福島は、英領インド軍がよく整備され、兵器生産、訓練を怠りなく行っており、とくにロシアに備えて北西辺境州方面に固い防衛体制を敷いていることを確認した。第二に、たとえ英領インドのディフェンスがしっかりしたものであっても、ロシアの中央アジア鉄道建設にともなう兵力増強を考えると、英露のパワーバランスは十年内外で崩れ、アフガニスタンをめぐって両国は衝突し、ロシアの勢力東進が加速化するだろうと予測した。

中央アジアのグレートゲームでイギリスが敗れるとき、アフガニスタンや新疆（とくにカシユガルを中心とする南部）がロシアに呑み込まれることになる。この中央アジアにおけるパワーバランスの変動、ロシアの勢力拡大は、東アジアにおいてもロシア有利、日英不利の形となって波及してくるであろう。福島はそこまでは明記していないが、当然そうした事態を想定していたと推察される。

二 ドイツとバルカン半島

ベルリンでの調査

一八八六（明治十九）年九月末、インド視察を終えて半年ぶりに帰国した福島大尉は、十月に参謀本部陸軍部の編纂課に復帰し、第二部の主事心得となった。⁽³⁰⁾十一月には参謀総長・有栖川宮熾仁親王の陪席の下、明治天皇に「印度地方ノ要領」について奏上している。⁽³¹⁾

さらに翌一八八七（明治二十）年三月、福島は在ドイツ日本公使館付を命じられ、四月に東京を出発した。インド

洋、ジブラルタル経由でブレイメンに上陸した彼は、五月にベルリンに赴任した⁽⁵²⁾。以後、五年間に及ぶ駐在武官生活が始まるが、通常の任務に加えてドイツに滞在する日本陸軍の将校留学生の「取締」(管理)も命じられ、彼らの世話もしなければならなかった。福島が着任した一八八七年には田村怡与造大尉、川上操六少将、乃木希典少将が留学なしし視察中で、さらに福島と親しい石黒忠憲軍医監も赤十字国際会議出席のためドイツに出張した。また一八八九年に山県有朋中将が欧州視察を行った際、福島はローマで山県を出迎え、ドイツ国内を案内し、皇帝ヴィルヘルム二世(Wilhelm II)への謁見やサンクトペテルブルク訪問にも随行している。一八九一年にはそれ以前からの十二名に加えて新たに児玉源太郎少将を含む十二名がドイツを訪れたため、合計二十四名の面倒を見なければならなくなり、「頗る繁雑ノ勤務」となった⁽⁵⁴⁾。

そうした一方で福島は本来の任務であるドイツ各地での演習見学を行い、また「欧亜ノ実力研究」⁽⁵⁵⁾にいそしみ、ドイツ、オーストリア、ハンガリー以外に後述のバルカン半島旅行を除いて以下のような国・都市を訪問している⁽⁵⁷⁾。

【西欧】

ベルギー(ブリュッセル、アントワープ)、オランダ(ハーグ)、スイス

イタリア(ジェノヴァ、ローマ、ナポリ、ホジヤ〔フォッジャ〕、ヴェネツィア)

【東欧、ロシア、北欧】

ワルシャワ

リトアニア(コヴノ〔カウナス〕、ヴィルナ〔ヴィリニユス〕)

サンクトペテルブルク

コペンハーゲン、ストックホルム、アボー（フィンランドの現トゥルク）

これを見ると、福島はイギリスやフランスは訪れていないことがわかる。そうした西方よりもロシア統治下のポーランド、リトアニアからサンクトペテルブルクといった東方、あるいはスウェーデン、フィンランドといった北方を回っていることが目を引く。すなわちロシアとその周辺地域である。福島の主な関心はロシア帝国に向けられたことがうかがえる。

とくに福島がドイツ、オーストリア＝ハンガリー国境近くのロシア軍の兵力を探ることを重要なテーマの一つとしていたことは、彼の作成と考えられる「奥独疆上魯国配兵略図」（一八八八・明治二十一年二月）と題した資料が残っていることから明らかである。³⁸ この配兵図は、ロシアがワルシャワを中心にドイツ、オーストリアとの国境付近の前線、最前線にどれくらいの部隊を貼り付けているか、歩兵大隊・騎兵連隊・砲兵中隊・工兵大隊の数を図示したもので、ポーランドだけでなくリトアニアのヴィリニユス、ベラルーシのブレスト＝リトフスク、ウクライナのルーツィクまでカバーしている。地名はドイツ語表記でなされており、ドイツ参謀本部から資料、データを提供されたのではないかと推察される。

そうしたベルリンでの調査の結果、福島はポーランド駐屯のロシア軍について、本稿の最後に付録として掲げた表6に示すような兵数を割り出している。その数値は帰国後に報告したものであるが、元のデータはベルリン滞在中に入手整理していたと考えられる。彼の計算によると、ポーランド駐屯のロシア軍の兵数は合計一四万三、八七八人である。ポーランドの面積を考えるとこの数はかなり高密度で、それだけにポーランドの宿駅、村落で兵隊を見ない所はないと福島は述べている。ロシアがいかに独奥国境に対して警戒を厳重にしているかがわかるというのである。³⁹

さらにベルリン時代の福島が成し遂げたものとして注目したいのは、ロシア陸軍全体の兵数をほぼ明らかにし、その全体像をつかんだことである。これについては、やはり付録として掲げた表7-1、7-2を参照されたい。それによると、ロシア陸軍の平時兵力は将校、下士卒を合わせて八六万八、六七二人となっている。この数値も帰国後に報告したものであるが、その原型はベルリン滞在中に調べ上げていたと考えられる。

また福島はその他の欧州主要国の兵力も調べており、政治協定（一八九一年）、軍事協定（九二年）を結んだ露仏両国と、それに対抗する独墺伊三国同盟（一八八二年）の国力や兵力を比較している。たとえば兵数に限っては、付録の表8のような数値を報告しており、露仏同盟と独墺伊三国同盟の兵数が平時で百数十万人、戦時で六百数十万人とほぼ拮抗しており、このようにパワーが均衡している以上、ロシアがドイツに侵攻するのは現実的ではないことがわかる。

また兵数だけでなく鉄道輸送力を見ても、ロシアがドイツを攻撃するのは難しかった。福島の調査によれば、ドイツ、オーストリア両国の鉄道はロシア領ポーランドの三面を囲む形となっており、ポーランド国境までドイツから二十一線、オーストリアから八線の合計二十九線が通じていたが、ロシア本国からは九線が連絡しているにすぎなかった。したがって独墺両国はこの二十九線を利用して十八の軍団を速やかに国境上に動員できるが、ロシアは大軍を急に集合させるのは困難であった。⁽⁹⁾つまりロシアはポーランドに高い密度で部隊を配置してはいるものの、有事の場合は鉄道輸送力の不足からドイツ、オーストリアを上回る兵力集中を行うのは難しいというのである。要するにロシアはドイツに対して安易に開戦できるような状態にはないということである。

そのほかに福島が見学したドイツ軍の演習は見事なもので、フランス、あるいはロシアがたやすく手出しできないことを感じさせたようである。ドイツの演習は「益々勇武の熾んな」もので、欧州の平和は容易に破れないことを知っ

たと彼は記している。ドイツが一つの balanサー ないし防波堤となつて、ロシアの侵攻をブロックしているというわけである。しかし英仏独露はヨーロッパで争わない分、国力に余裕が生じ、西欧以外の地域に出て来るのではないかとくに東洋の時事はいよいよ「切迫」しているというのが福島判断であつた。⁽⁶⁾

それではアジアについて具体的にはどう見ていたのであるか。ドイツ在勤中の彼はヨーロッパの情勢だけでなく、それと合わせてイギリスの新聞雑誌などのオープンソースを利用して中央アジア、東アジアにおけるロシアの動向に注目していた。

まずロシアの中央アジア鉄道建設について次のように報告している。メルヴからブハラを経てサマルカンドまでの完成は数ヶ月以内となるが、サマルカンドに達すれば中央アジアの動員力は数倍になり、ロシアの運動が活発化してアフガニスタン、新疆の辺事が忙しくなる。近年新疆各地を跋渉したロシアの將軍ニコライ・M・プルジェヴァリスキー (Major-General Nikolai Mikhailovich Przheval'skii) は、新疆占領が有益かつ容易であることを復命し、私の心胆を寒からしめた。しかし清国はロシアの計画を知らず、時事の切迫を顧みないようであるという。⁽⁷⁾

次にロシアのシベリア鉄道建設については以下のように状況を伝えている。ロシアは明治十九(一八八六)年にペルミ、エカテリンブルク間を竣工し、いまやチュメニを経てトボリスク、トムスクに向かつて前進した。さらにチュメニより南東のセミパラチンスク〔現カザフスタンのセメイ〕まで汽船の交通を開くことによつて、清国イリの西北国境がすこぶる危うい状況になるだろうという。⁽⁸⁾シベリア鉄道はウラル山脈を越えて延長中であるだけでなく、南方に向かう河川ルートとつながることによつてロシアの新疆進出も許すことになるというのである。新疆は中央アジア鉄道とシベリア鉄道の双方によつて南北からロシアに浸食されるというわけであるが、福島が手に入れた記事によれば、新疆の住民はおおむね「太古の人民」といった存在であり、⁽⁹⁾とてもロシアの進出を阻止できるとは考えられなかつ

た。

右のように福島は、ロシアが中央アジア鉄道を通じてアフガニスタン、新疆南部へ、シベリア鉄道を通じて東アジア、新疆北部へ向けて触手を伸ばしていると認識していたが、さらに次のように指摘する。ロシアの東アジア進出によつて直接被害を受けるのは日本、朝鮮、シナの三国であるが、シナ、朝鮮は長年の弊害が積み重なっており、「ロシアという」虎狼の爪牙を砕こうとするのは日本だけである。今より彼我の実力を詳らにし、十年後のアジアに備える計画を作らなければならないと福島は警告している。⁽⁶⁶⁾ここで福島は将来のロシアとの対決、すなわち日露戦争を想定していることがうかがえる。その後も彼は「西比利亞ノ鉄道、七年ヲ期シテ將ニ竣工セントス。實ニ一日モ猶予ス可ラザルノ秋ナリ」と警鐘を鳴らし続けた。⁽⁶⁶⁾

以上のようにドイツ駐在中の福島は、一方でロシアのドイツ侵攻の可能性を探りつつ、他方でロシアのシベリア、中央アジア進出の状況を注視していた。彼の見たところでは、ロシアはドイツに突進して挫折するよりも、抵抗のほとんどないアジアに向かう見込みの方がはるかに高かったのである。

バルカン半島視察

しかしそれ以外に、ロシアが黒海から東地中海、中近東方面に向けて南下する可能性も残されていた。このロシア南進の見込みについて福島はどのように考えていたのであろうか。当時、ヨーロッパの勢力均衡を崩す重要な問題の一つとしてオスマン帝国の衰退があった。周知のように一八五〇年代、オスマン帝国の弱体化を見たロシアは南下を試みたが、クリミア戦争（一八五三―五六年）で英仏の支援を受けたオスマン帝国に敗れた。しかし二十数年後、ロシアは汎スラブ主義を宣伝しながらバルカン半島への進出を試み、露土戦争（一八七七―七八年）でイギリスの支援

を得られないオスマン帝国を破った。その結果、講和条約（サン・ステファノ条約）によってルーマニア、セルビア、モンテネグロの独立、大ブルガリア公国の自治権が承認され、オスマン帝国の衰弱は一層明らかとなった。ベルリン会議（一八七八年）で列国の干渉を受けたロシアは勢力拡大を抑制されたものの、以後バルカン半島がいわゆる「ヨーロッパの火薬庫」として第一次世界大戦の勃発まで不安定要因であり続けたことはよく知られている通りである。

ベルリンにおいて福島少佐は、こうした「東方問題」、すなわちオスマン帝国の衰退にともなうバルカン半島諸国の独立とそれをめぐる列強の外交関係に関心を抱き、机上でその研究を進めるだけでなく現地視察を計画した。一八八九（明治二十二）年四月付で参謀本部に提出された彼の請願書は以下のようなものである。⁽⁶⁸⁾

欧州強国が（「アジア、アフリカで」）植民地政策を進めるのは、本国での力が余った結果である。もしロシアがバルカン半島で思うままにふるまえなければ、必ずその力の方向をアジア方面に転じて来るだろう。実際、すでに中央アジア鉄道を延長してイリ、新疆をうかがい、その支線をアフガニスタンの北境に延ばして南侵の便をはかり、コーカサスのコサック兵を用いてアルメニアの様子を見ているほか、ペルシャ政府に干渉し、コンスタンティノーブル⁽⁶⁹⁾を領有しようとするなど、ロシアの陰謀、計画は活発である。その中でもっとも注目、戒心すべきはシベリア鉄道の建設である。もし工事が完成し、ヨーロッパロシアの軍団が短期間で沿海州に集中すれば容易ならざる変動が生じ、満洲、朝鮮の要衝はロシアの手に落ちざるを得ない。その結果、ロシアの軍艦が日本近海に出没するようになれば、いかなる惨毒もたらされるか。早晩そうした形勢になるのは明らかなので、今から備えることが急務である。これまでの例からいって、遠きを後にして近きを先にし、難を置いて易を取るの

がロシアの侵略のやり方である。それはバルカン半島の状態に関係して来るのであって、日本の「対外規画」(「

国家戦略」を整えるのに必要な月日を確保できるかどうかもそれにかかっている。したがってバルカン諸国の時事、実力を「詳らかにする」(「情報収集・分析を行う」)ならば、出師動兵の規画(「軍事戦略」)に参考になるであらう。ついでにはバルカン半島を巡回致したく、ご許可を頂きたい。

右のように福島は請願した。ロシアがバルカン半島にスムーズに南進できれば、それだけアジアへの鋭鋒は鈍る。しかしロシアの南進が難しければ、そこでブロックされた同国のエネルギーは方向を転じてアジアに向かって来るだろう。このロシア侵略の方向性と速度を測る上で、バルカン半島は有力な目安となり、その情勢把握は不可欠であるというのである。

請願書は参謀総長・有栖川宮熾仁親王から「至極有益」と認められて許可が下され、福島は以下のようなルートで四ヶ月にわたる現地視察を行った。⁽¹⁹⁾

〔一八八九(明治二十二)年〕

十月 十五日 ベルリン出発

〔オーストリア・ハンガリー帝国〕

十六日 ウイーン

二十日 ブダペスト

二十四日 ブダペスト出航(ドナウ川汽船)

〔ルーマニア〕

二十九日 スリナ（ドナウ川の河口・黒海への出口）

三十一日（ドナウ川を折り返して）ガラツィ

十一月 一日 ブカレスト

〔ブルガリア〕

十三日^カ ルスチュック（ルセ）

十五日 ヴァルナ

十八日 ヴァルナ出航

〔オスマン帝国統治下の現トルコ〕

十九日 コンスタンティノーブル（現イスタンブール）

〔ブルガリア〕

十二月 十一日 ソフィア

〔セルビア〕

二十五日 ベオグラード

【一八九〇（明治二十三）年】

一月 八日 クラグイエヴァツ

十一日 ニシユ

〔オスマン帝国統治下のマケドニア地域〕

十四日 サロニカ（現ギリシヤのテッサロニキ）

十六日 サロニカ出航

〔ギリシヤ〕

十七日 アテネ

二月 四日 アテネ発↓（鉄道）↓パトラ着、同出航

六日^カ コルフ（ケルキラ）

〔オスマン帝国統治下のアルバニア〕

八日 コルフ出航、ヴロラ投錨

九日 サン・ジョヴァンニ・デイ・メデューア（シエンジン）投錨

〔モンテネグロ〕

十日 〔オーストリア＝ハンガリー帝国領〕カタロ（コトル）
十一日 ツエティニエ
二十日 カタロ出航

〔オーストリア＝ハンガリー帝国〕

二十二日 フューメ（リエカ、現クロアチア）
二十四日 ウイーン
二十七日 ベルリン帰着

右のうちオーストリア＝ハンガリー帝国は行きと帰りに立ち寄った程度である。旅行の中心となったのはオスマン帝国の首都コンスタンティノープル、一八七八年のベルリン会議の結果、オスマン帝国からの独立を認められたルーマニア、ブルガリア、セルビア、モンテネグロ、および一八三〇年にオスマン帝国からの独立が国際的に承認されていたギリシャの六ヶ国である。インド調査の際と同様、福島の見察は公式派遣の形をとり、モンテネグロを除く五ヶ国では現地の将校が案内に付いている。

事前準備としてはベルリンで携帯用カメラと付属品（写真板三〇〇枚など）、ウイーンでバルカン半島切図（オーストリア参謀本部作成）、ドナウ川地図、旅行書や会話を購入した。⁽²⁾以下、福島の見た六ヶ国の状況である。

ブダペストからドナウ川汽船に乗り込んだ福島は、まず河口のルーマニアの町スリナで下船して黒海を眺めた。その上で再びドナウ川を折り返してガラツイで降り、そこから汽車でブカレストに向かった。ブカレストでは国王カール一世 (Carol I) に謁見したほか、ルーマニア軍全般の調査を行い、砲騎工兵の兵営、練兵、兵器工場、弾薬製造所、学校、病院、ブカレスト北西近郊のキティラ要塞などを見学している。⁽⁷³⁾

ルーマニアでの福島は、オーストリアハングリーとロシアの狭間にある同国が乏しい歳入の中で防衛力向上のため苦心を払っていることを感じた。とくに着目したのはルーマニア軍が常備軍のほかに地方軍招集システムを採用していたことである。地方軍は大隊ごとに一中隊のみを残してそれ以外の兵員については帰宅を許し、時々招集しては訓練を施すという手段をとっていた。ある日曜日、福島はそうした帰休兵の練兵を見学することができたが、数百人が普段着のまま「軍紀粛々、勇気勃勃、隊伍整々」と運動する光景は「実ニ非常ノ感動ヲ与ヘタ」という。ルーマニアが多くの欠点をもちながらも独立を維持しているのは、こうした国民の「元氣」〔独立の気概〕があるからだというのである。⁽⁷⁴⁾ルーマニアに対する福島の評価は高かった。

ブカレストから汽車でブルガリアの国境の町ルスチュック(ルセ)に入った福島は、旅団長同行の下で市外丘陵の砲台を見学したほか、ドナウ川の海軍本部で造兵局、倉庫、軍艦、水兵の兵営を回った。三五〇名が駐屯するという水兵の兵営は板の上に藁布団を敷き、毛布一枚だけというシンプルな造りであったが、「軍紀ノ嚴肅ナル、兵卒ノ練熟ナル、実ニ驚クニ堪タリ」というものであった。また歩兵連隊も同様の粗末な造りで経済的な困窮がうかがえたが、練兵は「終始軍紀肅然」としていた。ルスチュックの次に訪れた黒海の港町ヴァルナにおいても兵営は老朽化していたが、練兵は「軍紀頗ル嚴ナリ」であった。⁽⁷⁵⁾ブルガリアでの印象は概して好ましいものであった。

ヴァルナから汽船でオスマン帝国の首都コンスタンティノープルに渡った福島は、オスマン帝国軍の編制研究と各

種軍事施設の見学を希望し、外務省、陸軍省に依頼したが、非効率的な官僚主義に阻まれて手続きに手間取り、視察がようやくかなったのは到着してから二週間近く後であった。このとき福島は、人員だけでなく事務処理は「亜細亜ノ古国」というオスマン帝国の外務省に呆れ果てたようである。⁷⁶⁾

陸軍省の許可を得てからの福島は、ボスポラス海峡の写真を撮影したほか、兵營、病院、士官学校、軍艦碇泊場、砲工学校、造兵局などを視察した。兵營、病院ともに甚だ清潔で、士官学校生徒の演習は活発なものであった。しかし役人の間で賄賂、情実が盛んに行われ、亡国の兆しが顕著であるように見えた。毎週金曜日に行われる皇帝のイスラーム教会行幸式では、兵隊は堂々と立派に整列していたが、将校は縁故で採用されるため、一方で年若い貴公子やドイツ留学組で不自然に昇級した者がおり、他方で白髪頭の老いた中小隊長がいた。「嗚呼此ノ如キ、何ヲ以テ軍紀嚴然タルヲ得ン」と福島は嘆いている。また造兵局での小銃生産量は一日平均三〇挺まで下がっており、軍艦碇泊場にある艦船一〇余隻は財政困難のため動かすことができない状態であった。調査の結果、福島はオスマン帝国軍が形の上では七〇万余の大軍をもつことを知ったが、経済的困窮から平時の兵数を大幅に削減しており、戦時にどれくらい**の兵力を動員できるかは定かではなかった。**⁷⁷⁾

こうした「衰運腐敗」の国がどうして独立を維持できるだろうかと福島は問いかける。今は列強間の「実力平均」「パワーバランス」によって支えられているが、「南侵ノ規画」をなすロシアが将来オスマン帝国、とくに後のトルコにあたる地域を「併呑セントスル」状況であるというのである。⁷⁸⁾このようにオスマン朝に対する福島の評価は非常に低く、ロシアの南下を誘発する可能性が高い国とされた。

コンスタンティノープルを出た福島は、汽車でブルガリアに入り、首都ソフィアに到着した。まず彼は在コンスタンティノープルの英国大使からもらった紹介状をもって英国総領事を訪ね、各国の外交使臣を紹介してもらうなどの

便宜をはかってもらった。⁽⁸⁰⁾ 福島の情報活動を考える場合、こうしたイギリス外交官の協力を見逃すことができない。主目的の軍事調査については、外相、陸相の協力を得てスムーズに運び、君主フェルディナンド一世 (Ferdinand I) に拝謁して「十分ニ研究セラレヨ」との言葉をかけられた上で、同公伝令使の中尉の協力を得ながらブルガリア軍の編制を明らかにすることができた。⁽⁸¹⁾

またデスクワークだけでなく軍閥施設も回っており、たとえば歩兵連隊の兵営は二階建の新築であったが、四台のベッドに五人の兵隊を寝かせるなど狭く、経済的な困難が見て取れた。しかし倉庫はよく整頓され、練兵も「軍紀肅然、敬愛ニ堪ザルナリ」といったもので、福島はブルガリア軍を「嚴肅驍勇ノ軍隊」として高く評価し、ブルガリアが独立の基礎を着実に築き上げている様に自分は「腦中ヲ刺撃」されると述べている。⁽⁸²⁾

軍事以外では議會を二度訪れて傍聴し、印刷局や統計局、小中学校も巡覧した。⁽⁸³⁾ 学校を見学するというのは、その国民の精神的な基盤、バックボーンを知るために有用であるという理由からしばしば福島が行っていたことであった。議會傍聴の際はロシアも持っていないマンリッヘル小口径銃一八万挺の購入が決定され、ブルガリアが国防力の養成に尽力していることが印象づけられた。⁽⁸⁴⁾ さらに彼はステファン・N・スタンボロフ首相 (Stefan Nikolov Stambolov) と一時間ほどの談話も交えている。⁽⁸⁵⁾ ロシアと距離を置きつつ兵備と教育に力を入れながらブルガリアの独立をはかるスタンボロフ首相について、福島は「勤王愛國ノ士」「布爾牙利ノ柱石」「巴爾干半嶋ノ俊傑」と絶賛しており、近代国家建設を進める日本とブルガリアを重ね合わせて見ていたことがうかがえる。ブルガリアに対する福島の評価は非常に高く、同国は一つの理想型を提示するものですらあった。

ソフィアを出発した福島はセルビアの首都ベオグラードに向かった。ベオグラードでもまずイギリス公使を訪ねて便宜をはかってもらおうとところからスタートしたため、すみやかに外相、陸相に面会でき、以後視察は円滑に進んだ。

福島は「毎度ナガラ英人ノ大度信誠、身ヲ以テ保護スルハ決シテ他国人ノ及バザル所ナリ」と感謝の気持を記している。⁽⁸⁷⁾ベオグラードでは教導団、騎兵營、士官学校、參謀本部地理局などを見学した。教導団の下士官生徒による練兵は「頗ル能ク整頓」していたが、砲兵營はトルコ時代の遺物で、倉庫は「順序甚タ整頓セス」といった状態であった。⁽⁸⁸⁾

ベオグラードからクラグイエヴァツに移動した福島は、同地の歩騎兵營や造兵局、火薬所を見学した。火薬所は職工二〇〇余名の規模で、砲弾だけでも五、六万発を備蓄していたが、倉庫は「雨露ヲ凌クニ足ルノミ」という簡単なものだった。⁽⁸⁹⁾またクラグイエヴァツからニシュに移動した福島は、要塞砲兵による新兵演習や輜重兵、陸軍病院、工兵大隊營などを視察したが、病院は「甚タ清潔ナラス」、工兵大隊營は新築であるのに「便所ノ臭氣、鼻ヲ穿テリ。其生活不潔ナル又知ルベキナリ」で、營内五〇〇名中、伝染病患者が一七三名に達していた。⁽⁹⁰⁾

右からもわかるように、セルビア軍に対する福島の影響は総じて芳しいものではなかった。ベオグラードの街では士官と下士卒が同じコーヒー店に集まって談笑しており、これによって軍の規律を維持できるのかと疑問を抱いた。⁽⁹¹⁾福島がオーストリア武官の中佐にセルビア軍の軍紀について尋ねたところ、彼はその家の向かい側にあつた王宮の門前に立つ衛兵の交代に注意を促した。中佐と福島が窓からのぞいていると、一人の下士官が二名の兵隊をしたがえて現れた。交代式が終わわり下士官が立ち去ると、任務についたばかりの二名の兵隊は肩に銃を担いながら両手を袖の中に交差して談笑し始めた。「これがその軍紀である」と中佐は述べ、福島は「規律嚴肅ナラス」と納得した。⁽⁹²⁾

セルビア軍は福島に一人の大尉を付けており、その彼は毎日馬車でやって来たが、最後になって公費が当てられているはずなのに福島に馬車代を支払わせた。大尉が役得として料金を着服したと見た福島は、日本の将校から見れば思いも寄らないことで、これによってほかも推量すべきであるという。⁽⁹³⁾このようにバルカン諸国の中でセルビアに対する印象はとくに後味の悪いものとなった。

セルビアのニシュからエーゲ海に面したサロニカ（現テッサロニキ）まで汽車で下った福島は、そこから船でギリシャの首都アテネに入った。アテネでは国王ゲオルギオス一世（George I）、皇后、ゲオルギオス親王（Prince George）に謁見したほか、騎砲工兵営、士官学校、海軍造兵局などの施設を見学した。アテネの外港都市ピレウスにある陸軍中央武器庫は「頗ル整頓」されていたが、担当者に小銃弾、砲弾の数を質問したところ答えなかったので、福島はひそかに目算し、その概数を見積もって報告している。⁽⁹⁴⁾

ギリシャでとくに福島の印象に残ったのは、やはりピレウスにあった海軍病院である。この少し前に軍艦で砲弾を取り扱い中、爆発事故が起こり、三名が負傷した。そのうちもつとも重傷の水兵がこの病院で一手一足を切断する手術を受けたが、本人は自らの希望で麻酔薬を用いず苦痛に耐えた。国王がその勇気を称えて見舞うと当人は、自分は国家の義務に服したのであって傷は患えるに足りない、ただ老母を驚かせたくないので自分の姓名を新聞に載せないで欲しいと願い出たという。病院を訪れた福島はこの水兵に面会して握手を交わし、「其勇其情、実ニ賞賛スルニ余リアリ」と大きな感銘を受けた。⁽⁹⁵⁾

福島のギリシャ軍評価はおおむね良好であった。工兵連隊、陸軍病院の倉庫は整頓され、サラミス島の水雷艇の艦内も清潔であった。⁽⁹⁶⁾ 帰国後の福島は、ギリシャ陸軍が財政困難にありながらも、多くの小銃、弾薬を備蓄し、有事の際は二五万の兵を動員できる体制を整え、海軍も水雷艇と機雷による沿岸防衛に焦点を絞っていることを指摘し、学校教育や電信鉄道の発達と合わせて日本も参考にすべき点がある旨を述べ、敬意を表している。ハリラオス・トリクピス首相（Charilios Trikoupis）についてもバルカン半島「第一ノ豪傑」と称賛しており、ギリシャへの評価はブルガリアに次いで高いものであったといえる。⁽⁹⁷⁾

アテネを出発した福島は汽車と汽船を乗り継いでオーストリア＝ハンガリー帝国領のカタロ（コトル）港で下船し、

そこから馬車で約三〇キロの山道を登り、当時モンテネグロの首都であった高原の町ツェイニエに到着した。首都といっても人口一、二〇〇人程度の山に囲まれた「一小村」にすぎなかったが、各国公使と交流し、君主のニコラ一世 (Nicholas I) に謁見することもできた。陸相は書記官とドイツ語通訳を付けてくれ、その書記官から軍隊の編制について聞き取り調査を行った。⁽⁸⁸⁾

書記官によるとモンテネグロの人口は三〇万人、オーストリア公使館の情報では最大でも二〇万人ということ、その数に比例して軍隊の規模も小さく、将校は六〇〇人、軍医は五、六名という程度であった。しかし福島はモンテネグロが国民皆兵制を敷いていることに注目した。兵役は平時一八歳から五〇歳、戦時一六歳から六〇歳まで課せられ、第一線兵 (一八―四〇歳) は三万五、〇〇〇人、第二線兵 (四〇―六〇歳) は五、〇〇〇ないし六、〇〇〇人であった。新兵が十五日間の訓練を行うのみで、それ以外は日曜日に少人数での演習、場合によっては射撃訓練を行う程度であり、あとはそれぞれ自宅に銃を保管し、動員の命令が下ると大隊に集合する手筈となっていた。⁽⁸⁹⁾

福島はこうした国民皆兵のシステムに強い感銘を受けた。勇敢で狭く険しい土地に慣れたモンテネグロの国民を併呑するのは容易なことではない、モンテネグロ・オスマン戦争 (一八七六―七八年) でオスマン軍をしばしば破ったのも偶然ではないというのである。⁽⁹⁰⁾ モンテネグロの防衛体制によほど感じ入ったためか、福島は日記に以下のような漢詩とその英訳を記している。⁽⁹¹⁾

峻嶺斬岩蒙国地 峻嶺岩を斬る蒙国の地

忠君愛国絶世民 忠君愛国、絶世の民

夫携銃砲婦輜重 夫は銃砲を携え、婦は輜重⁽⁹²⁾

逐破回教数万軍 逐い破る回教数万軍

二拾万口五万兵 二拾万口、五万の兵

国库僅費十萬金 国库僅かに費やす十萬金

好嘗艱苦進死国 好んで艱苦を嘗め、進んで国に死す

硝薬難破鉄腸民 硝薬破り難し、鉄腸の民

Oh! How steep mountains and barren rocks of Montenegro!

Oh! How brave and patriotic people of no parallel!

Men carry arms, women trains,

And defeat an enormous army of Mohammedans.

Two hundred thousand populations, fifty thousand troops.

Only one hundred thousand yens, Government spend.

They like to endure the hardships and are ready to die for their fatherland.

There are no cannon and rifle to resist such an iron minded people. (英)

帰国後の報告書の中で福島は、バルカン半島視察の中でモンテネグロのように自分の「脳裏ヲ刺撃セシ者ナシ」と

記している⁽¹⁶⁾。小国とはいえ国民皆兵で防衛に努力しているという点が彼の心の琴線に触れたようである。ブルガリア、ギリシャと並んで、モンテネグロに対する彼の評価は非常に高いものとなった。あるいは最高の評定を出したといつてよいかもしれない。

モンテネグロの首都ツェティニエでの滞在を終えた福島は、カタロ港から汽船でアドリア海をフューメまで行き、そこから汽車に乗ってウィーン経由でベルリンに帰着した。この視察を通じて福島は、①バルカン半島諸国が独立を維持している理由を考究し、②ロシアの将来の方針を熟察し、③アジアの運命を占い知る新材料を得たと総括している⁽¹⁶⁾。

①のバルカン諸国の独立維持については、ルーマニア、ブルガリア、ギリシャ、モンテネグロの四ヶ国に見るように、物質（軍事力）と精神（独立の気概）の両面から国防努力を行っていることが重要であった。ただしセルビアは軍紀の弛緩という点から強固な国とはいえず、オスマン帝国は衰退しつつあるもつとも脆弱な国とみなされた。

②のロシアの将来方針と③のアジアの運命については、①の結果から、福島は次のように考えたはずである。バルカン諸国は概してロシアの進出を許さない状況になっている。したがって同方面にロシアが南下するのは難しいが、その東方に位置するオスマン帝国は弱体化しており、そこへロシアが進撃する可能性がある⁽¹⁶⁾と彼は判断したのである。またロシアはアジアへの東進をより積極的に進めるだろうと予測したはずである。

一八九〇（明治二十三）年二月、バルカン半島視察を終えてベルリンに戻った福島は、今度はコンスタンティノープルより東方への旅行実施をめざし、翌一八九一年一月、ベルリンでの武官勤務を終えて日本に帰国する際に以下のルートを巡回したい旨を参謀総長・有栖川宮熾仁親王に請願した。

エジプト—小アジア〔トルコ〕—ペルシャ—アフガニスタン—トルキスタン—イリ—新疆—喀爾喀四蒙古—シベリア—滿洲

要はロシアが併呑する可能性のあるトルコ、および建設中の中央アジア鉄道、シベリア鉄道のラインを観察したいということである。これまで見たように福島においては、ユーラシア大陸の北方でシベリア鉄道を通じて北東アジア、新疆北部イリに迫るロシアと、南方で中央アジア鉄道を通じてアフガニスタン、新疆南部に迫るロシアという二種類の脅威認識があった。この二つのラインを中心にとりながら視察を行いたいというのである。また参謀次長の川上操六中將にも、川上のベルリン滞在時に自分が述べていた宿志を實行したいとして、合わせてその許可を懇請した。それから四ヶ月後の五月にウラジオストクでニコライ皇太子がシベリア鉄道起工式を行い、東京より返信が得られない福島は焦慮したが、最終的に参謀本部から「西比利亞及ビ支那ノ跋涉ノミ許可セラレタリ」との電報が届いた。つまり北ルートのみが認められたわけである。他方、トルコからペルシャ、中央アジア、アフガニスタン、新疆南部に至る南ルートが外された理由は、近年経費の繰り合わせが困難をきわめ、請願のうちもっとも緊要な部分だけしか認められないということであった。しかし、こうして福島の有名なシベリア単騎横断旅行の実施が認められることになった。

以上、本章ではドイツ駐在時の福島のベルリンでの調査とバルカン半島視察を検証したが、その要点をまとめておきたい。第一に福島は、ロシアの兵力とドイツの防備を調べた上で、ロシアがドイツに西進することは難しいと考えた。第二に、その一方でロシアによるシベリア鉄道、中央アジア鉄道の建設が進んでいることに注目し、同国の勢力が東進することを強く警戒した。第三に、ロシア南進の可能性については視察の結果、バルカン諸国は概してロシア

の南下を許さない状況になっていたが、オスマン帝国は脆弱であることがわかった。第四に以上の過程で福島は、トルコ以南のロシアの南部国境ラインを監視する必要性を認識するようになり、ユーラシア大陸横断旅行を企画し、そのうち北ルートの部分のみ参謀本部の許可が下りた。

しかし彼は南ルートもあきらめず、多少のルート変更はあったにせよ、そちらも後年実現させる。そこで次章では北ルートのシベリア単騎横断旅行、次々章では南ルートの亜欧旅行（とくにペルシャと中央アジア）をそれぞれ見ていくことにしたい。

三 シベリア単騎横断旅行

参謀本部の承認を得た福島はルートと日程の調整を行い、ベルリン勤務の任期終了にともない、一八九二（明治二十五年）年二月十一日の紀元節に合わせてベルリンを出発した。有名なシベリア単騎横断旅行のスタートである。

この旅行はそれまでの調査視察と同様に公然手段によるものであった。出発前、ベルリンでの福島は日常業務に追われる中でロシア語を学習する一方、臨時代理公使の井上勝之助とともにロシア大使館を訪れて依頼を行い、旅券申請書と「路線ノ略図」を送付して一ヶ月余り後に特別許可のビザを入手した。またモンゴル、満洲も通過するため東京駐在の大鳥圭介公使に護照（旅券）の発給を依頼し、これも手に入れた。

さらに乗用の馬を購入し、地図、コンパス、望遠鏡、寒暖計や拳銃から独魯会話書、小型辞書に至るまで各種の携帯品をそろえた。こうして準備を整えた福島は、以下のような経路で単騎シベリア横断旅行をスタートした。

【二八九二（明治二十五）年】

二月十一日 ベルリン出発、ミュンヒェベルク着

〔ドイツ領・現ポーランド〕

十二日 ソンネンブルク（スウォンスク）

十三日 シュヴェリーン（スクワイエジナ）

十四日 ピンネ（プニェヴィ）

十五日 ポーゼン（ポズナン）着

十八日 ポーゼン発、ヴレツシエン（ブジェシニヤ）着

十九日 独露国境を越える

〔ロシア領・現ポーランド〕

十九日 コニン

二十日 コウォ

二十一日 クトノ

二十二日 ウオビチ

二十四日 ウオビチ発、ワルシャワ着

二十八日 ワルシャワ発、プウトウスク着

二十九日 オストロウエンカ着

三月 二日 オストロウエンカ発、ウオムジャ着

三日 シュチュチン

四日 アウグストウフ

五日 スバウキ

〔ロシア領・現リトアニア〕

六日 マリヤンボレ

七日 コヴノ（カウナス）着

九日 コヴノ発、ヴィルコムル（ウクメルゲ）着

十日 ウチャニー（ウテナ）

〔ロシア領・現ラトビア〕

十一日 デューナブルク（ダウガピルス）着

十三日 デューナブルク発、ルシャナ（Rūšonaか）着

十四日 リエジツア（レーゼクネ）

十五日 カールサヴァ

〔ロシア〕

十六日 オストロフ

十七日 プスコフ着

十九日 プスコフ発、ナヴァセリヤ（寒村）着

二十日 ゴロデツ（小村）

二十一日 ルーガ

二十二日 ヤスチエラ（寒村）

二十三日 ガツチナ

二十四日 サンクトペテルブルク着

四月 九日 サンクトペテルブルク発

〔以下一部を除き、主要でない小さな町村は省く〕

十二日 ノヴゴロド

二十日 トルジョーク

二十二日 トヴェリ

二十四日 モスクワ着

五月 七日 モスクワ発、ボゴロツク（現ノギンスク）着

八日 ポクロフ

十日 ボルジノ着（愛馬「凱旋」が倒れたため看病のため滞在、新馬「ウラル」購入）

- 十八日 ボルジノ発、ウラジーミル着
二十日 ウラジーミル発
二十五日 ニジニ・ノヴゴロド着
二十九日 ニジニ・ノヴゴロド発
- 六月 一日 ヴァシリスルスク
八日 カザン着
十三日 カザン発（マルムヅユ〔マルミシユカ〕、セルテイ、オハンスク経由）
二十八日 ペルミ着
二日 ペルミ発
- 七月 三日 クンダル着
四日 クンダル発
九日 ウラル山脈を越える、エカテリンブルク着
十四日 エカテリンブルク発
二十二日 チュメニ着
二十五日 チュメニ発
三十一日 イシム着
- 八月 二日 イシム発
五日 チュカリンスク

九日 オムスク着

十二日 オムスク発

〔ロシア領・現カザフスタン〕

二十三日 バヴロダル発

三十日 セミパラチンスク（現セメイ）着

九月 六日 セミパラチンスク発

八日 ウスチ・カメノゴルスク（現オスケメン）着

十二日 ウスチ・カメノゴルスク発

十四日 ウストプフタルミンスカヤ（現オクチャプリスキーか）

十五日 プフタルマ川を渡る

十六日 マロナルムスカヤ（現 Malonarymkaか）

二十日 チンギスタイ

〔ロシア〕

二十二日 ウコク高原

二十四日 露清国境（アルタイ山脈ウランダハ嶺）を越える

〔清国領・外モンゴル〕

十月 二日 コブド（ホブド）着

五日 コブド発、ハル・ウス湖畔の天幕泊

八日 ドルゴン湖南岸を過ぎる

十三日 ウリヤスタイ着

十六日 ウリヤスタイ発

十一月 十二日 クーロン（現ウランバートル）着

十八日 クーロン発

二十五日 清露国境を越える

〔ロシア〕

二十五日 キヤフタ着

二十九日 キヤフタ発

十二月 三日 ムイソーヴァヤ（バイカル湖畔）

六日 クルトユク

八日 イルターツク着

十九日 イルターツク発

二十二日 ウトウリクスカヤ

二十六日 ムイソーヴァヤ

三十一日 ヴェルフネウジンスク（現ウラン・ウデ）着

〔一八九三（明治二十六年）年〕

一月 四日 ヴェルフネウジンスク発、オノホイスカヤ着

六日 タルバガタイ^(世)

九日 ポペレチノエ

十日 ウクル

十一日 ソスノヴォエ湖前を通過してドムナ着

十三日 シヤクシンスコエ湖沿いのベクレミシエヴスカヤ

十四日 ドムノクリユーチエブスカヤ

十五日 チタ着

二十日 チタ発

二十六日 ネルチンスク着

二十八日 ネルチンスク発

二十九日 ストレチンスク（スレテンスク）着

二月 一日 ストレチンスク発、以下シルカ川の氷上を往く

三日 ルジャンキンスカヤ

五日 ゴルビツア着

七日 ゴルビツア発

十一日 氷上に墜落重傷、ウテスナヤで療養

十六日 ウテスナヤ発、パクレブスカヤ（現ポクロフカ）着

十七日 パクレブスカヤ発、以下シルカ川が合流した黒竜江の氷上を往く

二十二日 ロイノヴァ着

二十四日 ロイノヴァ発、ペリミキナ着

二十六日 以下、時折対岸の清国領満洲に入りながら進む

三月 八日 ブラゴヴェシチエンスク着

十九日 ブラゴヴェシチエンスク発

露清国境を越える

〔清国領・満洲〕

二十一日 瑗琿着

二十二日 瑗琿発

四月 三日 チチハル着

五日 チチハル発

十八日 法特哈站着、熱病のため療養

五月 七日 法特哈站発

九日 吉林着

十四日 吉林発

二十五日 寧古塔着

二十七日 寧古塔発

六月 二日 琿春着

五日 琿春発

清露国境を越える

〔ロシア〕

六日 ノヴォキエフスク（現クラスキノ）

七日 リヤザノヴァ（現リヤザノフカ）

九日 バラバシユ

十一日 綏芬河（ラズドリナヤ河）を渡る

十二日 ウラジオストク着

十六日 ウラジオストク発

〔朝鮮から日本へ〕

- 十七日 元山着
- 十八日 元山発
- 二十日 釜山着
- 二十一日 長崎着
- 二十二日 長崎発、門司港着
- 二十三日 門司港発
- 二十四日 神戸着（以後、大阪、名古屋、横浜経由）
- 二十九日 東京着

以上、ベルリンからウラジオストックまでの約一万四、〇〇〇キロ（四百八十八日間）を馬で踏破したわけであるが、通常のペースは一日あたり約四〇キロ、馬上にいる時間は七―九時間であった。⁽¹⁶⁾ ロシアでも夏期は気温が摂氏三十七度まで上ることがあり、⁽¹⁶⁾ ウラル山脈を越えた東側ではそうした猛暑の中、後述するようにコレラが猖獗を極める中で通過しなければならなかった。冬期は東シベリアで零下四十度台の酷寒を経験し、制帽のつばや身に着けている金属が氷結したほか、鼻の中が凍り、まつ毛が氷柱となって垂れ、視線を妨げるほどであったという。⁽¹⁶⁾

食事は都市以外では簡素なもので、現地の人にならって黒パンに塩をつけて主食とし、僻地の寒村では食物が少ないため空腹時には鶏卵を一度に三十個も吞み干したり、⁽¹⁶⁾ 空気が乾燥するため大きなグラスで紅茶を一日少なくとも四十から五十杯飲むというワイルドな食生活となった。⁽¹⁶⁾ またロシア・満洲国境線のシルカ川の氷上でふとした拍子から

落馬して頭部に重傷を負い、チチハルから吉林に向かう途中で熱病を発して二十日近く寝込むこともあった。⁽⁹⁾

右のように苛酷な旅ではあったが、福島はロシア当局からさまざまな便宜を受けた。ある程度の規模の町では、福島が来ることを事前に知らされていた現地部隊が町はずれに出迎えの将校（部隊がない場合は警察官）を出して誘導し、兵営内の官舎や将校の自宅に宿泊させた。各部隊は連隊長以下、福島を手厚くもてなし、施設を見学させ、夜は将校集会所で歓迎の晩餐会を開き、翌日は途中まで将校が道案内をした。また大きな都市では知事や総督に面会することも少なくなかった。⁽¹⁰⁾

したがって彼は事実上ロシア陸軍（ないし警察）の管理下に置かれており、その言動は逐一把握されていたに違いない。ただし広大なロシアにおいては、交通不便の僻遠の地になると集落と集落の間が離れ、当局の案内が及ばないことも多く、そうした際は福島自身が独力で民家（純粹な民間人の私宅以外に官吏が利用する御用宿のようなものもあった）を探して泊めてもらうしかなかった。もつともそのような場所には軍事施設など見るべきものはなく、ロシア側にとって警戒する必要はなかったであろう。もちろん福島自身は自分が監視下にあることを重々承知の上でいただろうが、当局の協力なしでは旅行自体進めようがなく、たとえチェックされていても行く先々でロシア軍の部隊を見学し、司令官や将校と交流することによって同軍の実相に触れることができた。さらに旅の過程で触れあうロシアの庶民との交流も、彼にとってはロシアの国力を測る上で重要な機会であった。

旅行の詳細自体は高貫重節氏の『福島安正と単騎シベリア横断』上下巻に記されているので、本稿ではとくに視察の重点項目となるロシア軍の状況と国境防備の実情に焦点をあてて見ていきたい。

ベルリンを出発してから八日目、国境を越えてロシア領ポーランドの町コニンに近づくと、軽騎兵連隊の将校二〇余名が整列して福島を待ち受け、軍楽隊がマーチを奏でながら町に案内した。将校団で晩餐を提供され、旅舎では兵

僕一名が身の回りの世話をするため付けられるなど、丁寧な待遇を受けた。⁽¹²⁾ 次の町コウオでは、同地駐屯の中隊長夫人による手作りの料理がふるまわれ、下士卒二〇余名がロシアのダンスを踊ってみせ、食後、福島は皆から胴上げされた。また警部長に案内されて観劇もしている。⁽¹³⁾

そうした中で福島はロシア軍の内部をうかがうことができた。たとえばクトノの猟兵連隊では下士官の結婚式に招かれている。連隊長の案内で下士官の建物に設けられた素朴な式場を訪れると、新郎新婦とその親族、友人など農民の男女数十名、礼装の将校などが集合していた。福島が乾杯の音頭をとった後、音楽隊の演奏とともに連隊長が新婦の手をとってダンスを始め、皆がそれに続いて踊り出した。だれもが和気藹々としており、この連隊は厳しい軍紀の半面、「温乎タル愛撫ノ美風」をもち、その「恩威」によって部下の生死を掌握しようとしていると福島は感心した。⁽¹⁴⁾

ワルシャワを出て北東に向かい、ドイツ（東プロイセン）国境にほど近いあたりでは、ドン・コサック騎兵連隊の中隊が前衛搜索勤務の演習を行っているのに遭遇した。遠方の木々の間にドイツの家屋が見えるような最前線であるため、訓練は戦場にあるのと変わらない様子で行われており、「軍紀肅々、勇氣凛々、人ヲシテ実ニ感奮ニ堪ザラシメタリ」との印象を受けた。⁽¹⁵⁾

リトアニアのコヴノ（カウナス）では軽騎兵連隊の案内を受けたが、ここもドイツ国境に近い要衝で、五ヶ所に要塞を築いて多数の砲台が置かれているのを巡覧した。⁽¹⁶⁾ ラトビアのデューナブルク（ダウガピルス）を過ぎると森林地帯となり、サンクトペテルブルクまでの約五五〇キロは中間に歩兵連隊が駐屯するだけで、それ以外は寒村が多かった。そうした旅を続けながら福島は、人情、風俗、教育、宗教、あるいは官尊民卑の真相に接し、ロシアの将来を熟察できるようになったと記している。⁽¹⁷⁾

ラトビアを出てロシアの土地を進む途中、福島にとって忘れられない体験があった。ある村を通りかかった際、馬

草を分けてもらうため農家の戸を叩いた。出て来た少女は身に襦袢をまとい裸足でいかにも貧しく、福島姿を見るや一声叫んで室内に逃げ込んでしまった。仕方なく去ろうとすると主婦が姿を現して用件を聞いたため、馬草を所望したところ快く一束をくれた。福島が御礼に銀貨を渡そうとすると、主婦は「夏に刈り取って保存してきたものなので値段はない」と言つて受け取るうとしなかった。その態度に感銘を受けた福島は、同家の少女に無理に銀貨を握らせて出発した。「嗚呼、身ハ襦袢ヲ纏フト雖トモ心ハ実ニ金玉ナリ。終生林中ニ棲息シテ他ト交通ナキヲ以テ、又自然ノ美性ヲ存ス。農夫ノ朴直、愛スルニ余リアリ」。このエピソードは福島に温かい思い出を残した。⁽⁸⁾

旅の途中ではさまざまな行き違いや不愉快な出来事に遭遇することもあったが、それでもロシア人の親切をくり返し経験している。サンクトペテルブルクに近い村で宿泊所を探そうとして、たまたまある警部の私宅の戸を叩いたところ、新聞を読んで福島を知っていたその警部は自分の家に泊まっていこう勧めた。室内には妻と男の子がおり、夫婦は「同情ヲ以テ頗ル親切ノ待遇」をしてくれた。さらに別の村では、言葉にできないほど「不潔」な貧しい民家に泊めてもらったが、主人夫婦は「朴直」で福島とともに厩の掃除をし、寝蓐を敷いたり燕麦や馬草を用意してくれた。「嗚呼、人ノ最モ貴ブベキ者ハ信義道德ナリ。道德信義ノ人ニ逢フハ此ノ如キ旅行ノ最大愉快ニシテ、不潔不便ノ如キハ固ヨリ論スルニ足ラザルナリ」。かつて清国で旅店や民家に宿泊するたびに不親切やごまかしを体験したと比較して、彼のロシア人に対する印象ははるかに良好であった。⁽⁹⁾

ただし右のような親切を受けることがあっても、ロシア政府を警戒する気持が揺らぐことはなかった。「嗚呼、恐ルベキハ魯ノ方略ナリ」、イギリスやフランスは奪い取った国の人々を「禽獸」とみなして屈服するが、ロシアは威武と利益、すなわちアメとムチを使った巧みな侵略を行うという。そのように考える福島は、雪に包まれたサンクトペテルブルクの街並みを遠望した際、感無量の思いであった。「眼下ニ強魯経綸ノ中心ヲ望ム、焉ゾ無量ノ感慨ヲ起サザラ

ン」^(註)。いよいよ敵地の真中に乗り込むような気持であったのだろう。

一八九二（明治二十五）年三月、出迎えた騎兵将校学校の将校たちに案内された福島は、サンクトペテルブルクの「モスクワ凱旋門」をくぐって市街に入った。以後、彼は騎兵将校学校に滞在するが、初日は日本公使館に宿泊し、ロシア風呂で一ヶ月の垢を洗い流した^(註)。管見の及ぶ限りではサンクトペテルブルクでの十五日間に福島がどのような調査見学を行ったのか、その詳細は明らかではない。わずかに判明しているのは、サンクトペテルブルク近郊の離宮ガツチナ宮殿でロシア皇帝アレクサンドル三世（Aleksandr III）と皇后に謁見したこと、騎兵将校学校付属の蹄鉄学校に日々通い、今後の不便な旅路に備えて蹄鉄の打ち方、馬爪の削り方などの技術を身につけたことである^(註)。

ここで福島がロシア人の生活をどのように観察していたかをまとめておきたい。その主なものを要約すると以下のようになる^(註)。

①暮らし……家屋は木材を横に組んだ簡単な造りで、極貧者を除いて窓ガラスを二重にしている。暖炉のガスの悪臭が鼻につき、ロシア人でなければ耐え難い。ベッドは一つの家に一―二台で、多くの人々は不潔な床上に馬草か木綿の薄い蒲団を敷き、その上に衣服あるいは毛皮の外套をまとうて寝る。

②ウオツカ……ロシア人は焼酎を好み、いかなる僻地でもそれを売る家がある。農民は半年の労働で貯えたわずかな金を半年の冬期に飲み尽くし、赤貧再び洗うがごとしで、焼酎のために生まれ、苦しみ、死す者というべく、貧民が泥酔して道端に寝込んだり、よろよろ歩くのをかなり見かけた。

③教育……全国の小学校に在籍するのは一〇〇人中二人の割合で、一八八八年の徴兵中、書を読み字を解する者は一〇〇人中二〇人に足りなかつたという。小学校に通う者は村の秀才で卒業証書は大変な名誉であり、室内の壁にその扁額を掲げているのをしばしば見た。「教育ノ幼稚ナル事、推シテ知ルベキナリ」。

④メディア……大国でありながら新聞雑誌の数はわずか七〇〇余種で、それらは厳格な条例の下にあり、外国から郵送するものは国境で厳重な検査を受けるため、たとえ新聞雑誌を読む者でも時勢に暗い憾みがある。ましてや僻村に暮らす者の「無智盲昧」は推して知るべしである。

⑤宗教……室内の隅には必ずキリストを描いた額面（イコン）を掲げ、燈明皿を置いて朝夕と食事の前後に拝礼しながら右手の指頭で十字を切る。またいかなる僻村にも寺院があり、その前を通り過ぎる者は必ず脱帽して十字を切つて拝礼する。「一般人民ノ宗教ヲ頑信スル、魯国ノ如キハ欧洲各国未ダ曾テ見ザル所ナリ」。

⑥絵画……ロシア人は絵画を愛し、寒村の小さな家でも数枚ないし数十枚の宗教や歴史を題材にした拙劣な錦画を壁に貼っている。またどのような貧家でも皇帝、皇后、皇太子の錦画を掲げている。壁に絵を貼り付けるのは、ロシアの風景が広野や森林ばかりで雅趣がないからであろう。

以上が福島の主な観察であるが、要するに一般のロシア人は貧しく、教育水準が低くて世の中の移り変わりに知識が乏しいとともに、ロシア正教や皇帝を盲目的に信仰しているというのである。表向きは強大国であるが、その内情

は後進国だというわけで、それは明らかにロシアの弱みであった。ところが福島はそのマイナス面をプラスに転化し、ロシア政府が民衆を単純素朴な精神状態に落としているからこそ、思い切った「蚕食侵略」の経緯を断行することができる⁽¹⁸⁾と報告している。つまりロシアの「後進性」は対外膨張政策を支える強みになっていると解釈してみせたのである。

約二週間の滞在を終えてサンクトペテルブルクを出発した福島は、ノヴゴロドを経てモスクワに向かった。モスクワに近づくにしたがって身に襤褸をまとった窮民が食を求めてさまよう姿を多く見かけるようになり、飢饉が広まっていることがわかった。モスクワでは軽騎兵の兵営に宿泊し、約二週間滞在したが、その間彼がどのような情報活動を行ったのか、管見の及ぶ限りでは不明である⁽¹⁹⁾。

モスクワを出立した福島は、ウラジーミルで歩兵連隊の野営地と消防隊の演習を見学し、ニジニ・ノヴゴロドでは県知事のニコライ・バラノフ海軍少将 (Nikolai Mikhailovich Baranov) と将校たちの晩餐会に招待されたほか、警部長の案内により警察の小蒸気船に乗ってヴォルガ川の夕景を楽しんだ。しかしカザン付近に来ると、凶作、飢饉のため路上に餓死者の遺体が横たわり、窮民が群れをなして食物を求める「惨状名状すべからず」状態となった。肉類はまったく見あたらず、福島も黒パンと鶏卵だけで食をつなぐしかなかった⁽²⁰⁾。

右のように大都市には豊かな暮らしがあるが、そこから少し離れただけで人々が生死の境をさまようという両極端な光景が展開した。カザンに入ると河川の貿易で「頗る繁盛」しており、劇場や大学、博物館など文化施設がそろっていた。工場も「盛大」で、とくに石鹼製造所では一、五〇〇人の職工が働いていた。しかしカザンを出ると再び飢饉の状況があらわになり、荒れ果てた村落の住民は青白い顔でぼろぼろの衣服をつけ、「哀を訴ふる頻なり」といった状態であった⁽²¹⁾。ところがマルムヅ (マルミシュカ) に入ると地方裁判官らが酒や肉を用意して福島をもてなし、連日

黒パンと鶏卵の粗食続きであった福島は「その美味甘味名状すべからず」と感じ入ったほどであった。⁽¹⁰⁾

このように福島はロシアのさまざまな面を見ていった。表面的には壮大な帝国で都市の富裕層は贅沢な料理や社交を楽しむことができたが、一步そこから離れた農村の暮らしはひどく困窮し、教育や娯楽などのゆとりは望むべくもなかった。すなわちそれは二極分化の社会であった。

ペルミからウラル山脈に入った彼は、七月にヨーロッパとアジアを分けるウラル山頂を越えてエカテリンブルクに着いた。⁽¹¹⁾ さらにチュメニに進むと、飢饉に苦しむ人々が荷車を引きながら続々と西シベリアに移住して行く姿が見られた。野宿を重ねながら進む彼らの髪は乱れ、顔は垢だらけで「骨立ちて鬼の如し」であり、「実に悲惨」、哀憐の情を禁ずることができないと福島は記している。また汽船でシベリアの奥地に行こうとする人々が川岸の埠頭に集まり、土砂の上に抱き合って寝ている光景も、「その惨状筆舌の尽す所にあらず」であった。⁽¹²⁾

七月末、気温は三十四度に達し、しかも難民の間でコレラがはやり始めていた。患者と死者の数は着実に増え続け、福島が通り過ぎる村々では医者、薬、衛生観念のいずれもなく、ロシア正教の神父がキリストを描いた旗をもって家々を巡回し、祈りの言葉を捧げ、神水を与えるだけであった。とくに感染のひどい村の入口には黒旗が立てられ、夜もかがり火を焚いて番人が村内への立ち入りを禁じた。棺を載せた車が送り出され、家族がその棺を撫でながら慟哭する姿も見られ、福島はロシア農民の悲惨な姿をより一層実感することになった。⁽¹³⁾

そうした中で福島はコレラ感染を避けるため間道を進むように助言されたが、「死生共に天に任じて本道を行かん」と腹を括り、そのまま予定のルートを進めることにした。一応コレラ用にと薬（アヘン剤）の小壘を携帯していたが、過度の運動を避け、消化しやすいものを食べ、できるだけ睡眠をとることを心がけ、あとは万事天運に任せるしかなかった。⁽¹⁴⁾

オムスクに着くと、ステップ総督の陸軍大将マクシム・A・タウベ男爵 (Baron Maksim Antonovich Taube) が福島のために各地方長官やコサックの村長などに協力を要請する書簡を送るなど、さまざまな便宜をはかった。ステップ総督府は西部シベリア一万人の将兵を管轄しており、タウベ総督のはからいで福島は予備歩兵大隊と陸軍地方初年〔幼年〕学校の野営地をそれぞれ見学した。⁽¹⁶⁾

オムスクからはそのまま東のノヴォシビルスクに進むのではなく、南東に進路を変えてセミパラチンスク (現カザフスタンのセメイ) を目指した。これはサンクトペテルブルク駐在の西徳二郎公使のアドバイスによるもので、そのコースはシベリア鉄道の建設予定ルートから南に大きくされることになるが、中央アジアの露清国境の方が見どころがあり、かつロシアの外蒙工作の実態を確認する必要があると考えたためであった。⁽¹⁶⁾ オムスクからセミパラチンスクまでの約八〇〇キロは果てしないステップ (草原) 地帯で、遊牧民の天幕以外に人家がなかったが、イルティシ川に沿って二〇―三〇里⁽¹⁶⁾ごとにコサックの兵営が置かれていた。これはコサック村といわれ、一五、六戸から三、四〇戸より成り、国境防備のために屯田、駐牧をしているもので、それぞれ公選の村長がいた。ステップ総督から連絡があったため、村々では制服に着替えた村長一同が福島を出迎えて優待した。⁽¹⁶⁾

さらに福島はセミパラチンスクから引き続きステップ地帯を通って露清国境をなすアルタイ山脈に向かった。国境近くでは山間の小さな村アルタイにコサック騎兵の中隊、さらにその先のキルギス人遊牧地であるチンギスタイに小隊が置かれており、福島は双方の世話を受け、とくに後者の小隊は人家のない山の中に四、五ヶ月駐屯しているにもかかわらず、「士気凛然、勇壮の色、営外に溢る」と彼を感じさせた。加えて国境最前線のウコクには税関を準備する騎兵下士一名と兵卒一〇名が置かれ、彼らが一層厳しい条件の中で一年交代の勤務についていることを知った。このように福島は、ロシアが清国との国境線にコサック騎兵を重層的に配置することによって防衛体制を敷いていること

を確認した。その上でアルタイ山脈上の国境（海拔二、八一八メートル）を越え、一八九二年九月末、清国領の外モンゴルに入った。⁽¹⁸⁾

ところが対照的なことにモンゴル側には何らの防備も施しておらず、通過する集落に一人も兵隊がいなかった。加えて人々が道理に暗い印象を受けた。清国人官吏の駐在するゲルに行き、宿泊の斡旋や飲食の提供を頼んだところ、官吏は福島の提示した護照にそのようなことは書かれていないと拒絶し、その場にいたモンゴル人の訳官は福島が制服につけた勲章を見て「これは洋鬼子のものだ」と罵った。さらに宿泊したゲルの主人である台吉（タイジ、モンゴル貴族の称号、部落長）から珠玉をだまし取られた。そうした二連の有様に福島は「嗚呼、此の愚官昧民を以て、精錬勇壮なる露軍と咫尺（すぐ近くに）相対す、知らず兩國の将来果して如何」と嘆いた。⁽¹⁹⁾ これではロシア軍が攻め入ればひとたまりもないではないかというわけである。

旅を進めると、ロシア人商人の進出が進んでいることがわかった。福島がゲルに宿泊させてもらったあるロシア商人は、アルタイ山脈の入口に近いヴィスクからロシア宣教会が派遣したもので、宣教と商業の両方を行っていた。ゲルの中にはモンゴル人が好むブロッタ状に固めた磚茶や嗅ぎタバコ、刻みタバコ、綿布が蓄えられ、ラマ教僧侶の法衣の材料として売れ行きがよい紅黄二色の布も用意されていた。⁽²⁰⁾ またコブド、ウリヤスタイ、クーロン（ウランバートル）といった主要な町には決まってロシア商人が少数ながら来ており、とくにクーロンにはロシア領事館が設置され、在留ロシア人が一〇〇余名に達していた。⁽²¹⁾ 清国領モンゴルは軍事的に無防備であるだけでなく、貿易を通じてロシア人の浸透が着実に進んでいた。

福島のモンゴルに対する印象は総じて芳しいものではなかった。約六十日、二、〇〇〇キロを歩き回った結果、彼が得た結論は以下のようなものである。

……その間蒙古人の天幕に宿泊し、親しく彼等に交はりて、その人情風俗を探りしが、実に人智蒙昧にして、些の徳操信義無く、唯だ喇嘛教に惑溺し、醉生夢死、眼中小利ありて一身を忘る、事あるも、進取大望なく、貧困にして人心萎靡し、人口年々減少して、又昔日欧亜の二州を席捲せし風尚なし。漠北の兵備数千と号するも、到処幕内一兵器を見ず、要するに今日の蒙古は文化に於て昔日と異なるなく、而してその精気勇敢に於ては復た昔日の倂無く到底天下に事を為すに足らざるなり。⁽⁵⁴⁾

ここで福島がラマ教(チベット仏教)に着目している点に注意したい。モンゴル人はラマ教に惑溺して醉生夢死、進取大望のない状態にあるという。彼らは毎日、念仏読経ばかりして武事を怠り、柔弱がならわしとなったため、チングス・ハーンの時代に見られた勇猛の精気が無くなってしまった。今では北兵(ロシア兵)に抵抗するような者はまったくいないという。これはもともと清朝が慄悍なモンゴル人を骨抜きにするためにラマ僧を送り込んだ結果である。しかもラマ廟は、僧侶が女性を連れ込んで売淫所と化しており、「醜汚言語に堪へたり」というのである。⁽⁵⁵⁾

このように福島から見ると、モンゴル人はラマ教によって覇気を失い、ロシアの勢力に抵抗できない脆弱な存在であった。しかしながらここで留意しておきたいのは、同時に彼がラマ教の影響力の強さを実感したことである。モンゴルでは宗教だけでなく文学、教育、医療に至るまでラマ僧が権限を握り、その権勢と威力はすこぶる盛んで「神の如く仏の如し」であるという。たとえばクーロンに滞在中の福島はモンゴル最大のチベット仏教寺院、ガンダン・テクチェンリン寺(通称ガンダン寺)を訪れた。ここでは遠方からやって来た礼拝者がマニ車を回しながら、あるいは地に伏して念仏を唱え、「その声、群蟬の鳴くが如し」であった。ガンダン寺の盛況を見た福島は、チベット仏教がモンゴル人二〇〇余万の心を収攬していると実感した。⁽⁵⁶⁾このようにモンゴルでラマ教とラマ僧の影響力を肌で感じ取っ

たことが、後年のモンゴル工作に生かされることになったと考えられる。

モンゴルの大地を行く福島は、元の時代の栄光を振り返りながら感慨にふけた。当時のモンゴルはチンギス・ハーンをはじめとする名将勇卒を雲のごとく輩出し、騎馬武者の向かうところ敵なく、天下を席捲する勢いであった。それなのに今は一人も奮起する者がいない、それを思うと怒りと嘆きが胸に満ち、思わず鞭をふるって馬を叱咤して走らせたとい⁽¹⁸⁾。

しかしながら福島はモンゴル人に絶望したわけではなく、その長所も見ていた。たとえば暴風と雪が吹き荒れる中でハイルハン部を進んだ際は、臨時に雇った三十八歳と十九歳の女性が男まさりの元気で駄馬を引いてしたがった。また途中で出会ったモンゴル人官吏が馬に乗ってウリヤスタイとの往復約九八〇キロを九日で踏破していることを知り、一日平均一〇〇キロを超えるその「神速」ぶりに驚いた。そうした経験から彼は、モンゴル人が厳しい生活に耐え、馬を自在に乗りこなすことに敬意を抱いた。彼らの祖先がもっていた気骨胆略を取り戻し、新式の訓練と鉄砲を授ければ、どうして昔のように周囲の国々を震動させることがないといえようか、などと思いをめぐらしながら馬を進めたとい⁽¹⁹⁾。

右のように福島はモンゴル人を活用することをまったくあきらめたわけではなく、彼らをうまく誘導することによってロシアへの盾とする可能性を考えていた。それだからこそ、あとでモンゴルを訪れる情報員のためにアドバイスを書き留めている⁽²⁰⁾。ロシアの南進を防ぐために今後もモンゴルの現地情報が必要であることを認識していたのである。

クーロンを後にした福島はそのまま北上して、一八九二年十一月末、再びロシア領に入った。国境の町キャフタではロシアの貿易商の世話になり、彼らが盛んに商業活動を行っていることを確かめた。また同地に駐屯する大隊将校団の夜会に出席し、大隊長と紳商による晩餐会にも招待されている⁽²¹⁾。モンゴル側の国境が無防備である一方、ロシア

側が相応の兵力を置き、モンゴルへの商業進出をはかっているのは明らかであった。

キャプタを出た福島は北のヴェルフネウジンスク（現ウラン・ウデ）に直接向かわず、あえて西側に迂回路を取り、バイカル湖畔の南を通ってシベリア随一の都市イルクーツクを訪れた。シベリア鉄道の建設が予定される重要地点を自分の目で確かめようというわけである。十二月の酷寒期、雨雪の降るイルクーツクはしばしば零下二十五度まで下がったが、福島は十日間滞在してコサツク騎兵および予備歩兵の大隊営、専門器械学校、陸軍病院、士官学校といった軍の施設を見学している。とくに参謀部長（陸軍中将）の世話で騎兵の密集運動を見ることができ、参謀部の門前に召集された騎兵は地面が氷結して滑るにもかかわらず、「頗る熟練」した技術で馬を走らせてみせた。⁽¹⁰⁾

また軍務知事、参謀部長などの饗宴に招かれ、イルクーツク出発前夜には歩兵大隊の立食パーティーに参列し、宴の終了時に歓呼する兵隊が福島と参謀部長をイスに乗せたまま胴上げして見送るといふ一幕もあった。それ以外に小学校や博物館などの教育文化施設も見て回り、とりわけ博物館に展示された鉱物の蒐集品はシベリア開発の将来性を示すものとして目を引いた。⁽¹¹⁾

なおイルクーツク訪問後の福島は、シベリアへの移住者が年々増加していることを指摘し、「一朝鉄道の全通を得ば其便挙げて言ふ可らず、極東魯西亞の地、人増し、地墾け、富今日に数倍せんこと、因より知り難からざる所なり」として、シベリア鉄道開通がバイカル湖から太平洋岸まで極東ロシアの大幅な発展をもたらす可能性があることに注意を促している。⁽¹²⁾

イルクーツクを出発して次に訪れた主要都市はチタである。ここではまる四日滞在し、軍務知事、参謀長、副知事、警部長などを訪問し、警部長の手配によって以後宿駅ごとにコサツク騎兵一名が福島に随伴して道案内をすることになった。またチタでは騎兵連隊を見学しているが、兵員の半分がブリヤート人であることが目についた。福島の見た

ところ、もともと遊牧民である彼らは騎馬に慣れており、軍律も厳しくその精鋭よりはコサック騎兵に劣らなかつた。同じモンゴル系民族でありながら、このプリアート兵と先に見たモンゴル人の差は大きく、それを思うと「感慨無量」である⁽¹⁶⁾と福島は記している。

シベリア全体を通じて福島が注意していたのはロシアの進出ぶりであった。チタからネルチンスクを経て露清国境となるアムール川の氷上を進んだ福島は、一八九三（明治二十六）年三月にブラゴヴェシチェンスクに到達する。その間、アムール川右岸の満洲側には人の住んでいない気配がまれで、ひっそりと寂しい風景が続いた。他方、左岸のロシア側は一八五八年の璦琿条約、一八六〇年の北京条約で領有権を認められた比較的新しい土地であったが、三十九の村駅が設けられていた。しかもその地域は六つのコサック騎兵徴兵区に分けられ、それぞれの本部に大村長、小学校、郵便電信局、汽船定整場が置かれ、コサック村を中心とする植民経営が進んでいた。このように国境線をはさんだ両国の態度は対照的であったが、清国軍がまったく駐留していないわけではなく、二ヶ所で歩兵の兵営を見かけることがあった。ただし兵営内の食糧についてはロシアに便宜を仰ぎ、アムール川の露船を用いなければ満洲内地との行き来もできないことがわかつた⁽¹⁶⁾。そういうわけでロシアの方が国境付近の整備をはるかに積極的に進めていた。

ブラゴヴェシチェンスクではコサック騎兵連隊長の官舎に宿泊し、軍務知事（砲兵少将）の協力を得ることができた。十日余り滞在した後、福島はロシア将校、清国人通訳に案内されてアムール川氷上の露清国境を越え、璦琿城に入った。璦琿には副都統衙門や電信局が置かれ、八旗兵二、三〇〇余名が駐屯していた⁽¹⁶⁾。

ロシアから満洲に入ると習俗が一変したと福島は記している。役所のある璦琿城から外に出ると人家が密集して大変繁盛していたが、「街路狹隘、泥濘汚穢名状すべからず」という状態であった⁽¹⁶⁾。貨幣を交換しようと思っても、銀塊を測る際に商人が天秤でこまかしたり、改鑄ないし偽造された銅銭が使われているため、その「乱雑」は日本人の

想像に及ばないものであったという。⁽¹⁰⁷⁾ 瓊瑋を出て最初に宿泊した駅舎の役人たちは驚くほど無学で、福島が世界二十ヶ国を回ったことを話すと、「小人国、女人国、孔胴国には行かないのか」と聞く有様であった。孔胴国とは人間の胴に穴があいており、金持が外出するときはその穴に棒を通して二人の夫が担ぐという伝説の国である。⁽¹⁰⁸⁾

チチハルの市街も「汚穢臭悪名状す可からず」で、福島が現れると「老幼群集」して罵り、嘲り、衣服を引っ張って指さして笑うなど騒然とした状況になった。「実に露人上下の親切に比して、一般支那人の下素根性驚くに堪へたり」と彼は呆れざるを得なかった。また衙門が用意したにもかかわらず、旅館は不潔で庭に馬糞を積み、悪臭で嘔吐を催すほどであった。福島の一部屋は「汚穢最も甚だしき一小室」で、群集が窓の紙を破って中をのぞきながら罵るのを案内の邏卒は制することができなかった。また將軍衙門の役人は、翌日副都統自らが福島を訪問し、将校と兵隊が道案内をすることを告げたが、次の日になってみるとそうした約束は忘れ去られ、福島は「支那人の人を侮慢し、人を欺き、恬然として恥なき、実に驚くに堪へたり」と再び呆れることになった。⁽¹⁰⁹⁾

清国軍の軍紀の弛緩も明らかであった。福島が馬に乗って進んで行くと、後ろから三人の騎兵がついて来たり遅れたりするので不審に思ったところ、実は福島を護衛する満洲族の士官と兵卒であった。彼らは鞍に高粱酒の入った瓶をつけ、盛んに酒気を漂わせており、兵卒は刀も銃も持たず普段着であった。途中で士官は窮屈になったのか官帽を兵卒の帽子と交換して兵のあとに随って行った。⁽¹¹⁰⁾

吉林は「不潔例の如し」であったが、吉林將軍・長順は礼儀正しく親切で、以後の宿泊や護衛兵の手配など細やかな配慮を示した。しかし実際に福島を誘導した兵隊は休憩時にアヘンを吸い、馬賊の潜伏する山を通過した際には襲撃を受けるのではないかと恐れおののき、彼を嘆かせた。⁽¹¹¹⁾ 結局、匪賊に襲われることはなかったが、このとき満洲における馬賊の存在を身をもって身近に感じたことが、後年日露戦争の際、福島が馬賊を活用することになる起源にな

るのではないかと考えられる。帰国後の彼は、馬賊が勇敢で強い団結力をもち、城市に斥候を放って物資の運輸状況を調べさせるなど組織化されており、単なる泥棒の類ではないことを指摘している⁽¹⁷⁾。清朝軍の將兵よりも、はるかに見どころがあると考えたのではないだろうか。

ただし清朝軍の將兵がすべて墮落していたわけではない。吉林左翼洋装隊は福島をしつかりと護衛し、「その動作、規律ありて能く其任を尽したり。その部下を見て其の將を知る可し」と彼を感心させた。とくに寧古塔から琿春に至るまでの官吏と軍隊はきちんとしており、琿春副都統は広く海外情勢に通じていた。またロシアの沿海地方と国境を接する琿春では郊外に騎兵營を置き、その営内に砲台を築いて防衛体制を敷いていた。しかし福島からすると清国人全体に危機感がないため、それも空しく見えた。琿春ではロシア軍が国境付近で砲撃演習を行う音が遠く響いていた。砲声を聞いた福島は「清民、夢酣たげなにして辺防空し」と詩に歌い、清国側の甘さを憂えている⁽¹⁸⁾。

琿春を出て清露国境を越えた福島は、国境線から八キロ余りに置かれたウスリーコサツク騎兵中隊を訪ね、中隊長の官舎に宿泊した。翌日はロシア軍の砲兵陣地で実弾射撃演習を見てからノヴォキエブスク市内に入り、同地の歩兵大隊長に接待された⁽¹⁹⁾。このように沿海地方の国境付近を实地に見た上で、六月十二日、福島は在留邦人その他の人々の歓迎を受けながらついにウラジオストクに到着し、日本の貿易事務館に入った。ベルリンを出発してから四百八十八日間、約一万四、〇〇〇キロの道のりを踏破してきた福島は、同館の客室に掲げられた天皇皇后の御真影の前に立つと感極まって涙を流した⁽²⁰⁾。

日本に帰国した福島は報告書の中で次のように訴えている。

魯西亜ハ尚ホ此強大ヲ以テ益々四隣ヲ侵略セントシ、刮目シテ機会ノ乘スベキヲ窺ヒ、銳意実力ノ養成ニ汲々

タルハ列国ノ詳悉スル所ナリ。此ヲ以テ独逸、墺地利、英吉利ノ如キ欧洲屈指ノ強國ト雖トモ細心精密、唯タ平
均ヲ失ハザラン事ヲ恐レ、孜々トシテ之ニ対スルノ規画ヲ検討セリ。

本邦ノ如キ、実ニ此強國ト一葦海水ヲ隔ルノ國ナリ。西比利亞ノ鐵道、十年ヲ出ズシテ將ニ竣工セントス。時事
ノ切迫、禍機ノ破裂、亦タ決シテ夢想ニ非ルナリ。嗚呼、一國ノ盛衰興亡ハ固ヨリ人爲ノミ、元氣絳綸斷行ノ如
何ニアルノミ。今ノ時ニ及テ早ク十年後ノ天下ニ応スルノ規画ヲ斷定スル事、最大急務ニシテ、利己儉安、区々
タル論争ニ齟齬スルガ如キ事アラバ、実ニ國家ノ大患ナリ。⁽⁶⁾

右のように福島は強調した。ロシアは十年以内にシベリア鐵道を完成させようとしており、それに備えて規画（國
家戦略）を打ち立てることが急務だといっているのである。彼が帰国した一八九三（明治二十六）年六月を起点として十年
以内とすると、遅くとも一九〇三（明治三十六）年ということになるが、実際にシベリア鐵道が開通したのは一九〇
四年であるから誤差は一年程度であり、その見通しはおおむね当たっていたといつてよいであろう。

以上、本章では福島のシベリア單騎橫斷旅行を検証したが、その要点を整理しておきたい。この旅行を通じて福島
は、第一にロシア軍の生の姿に触れることができた。たとえばドイツ國境附近で演習を行うドン・コサック騎兵は「軍
紀肅々、勇氣凜々、人ヲシテ実ニ感奮ニ堪ザラシメ」るものであった。イルクーツクのコサック騎兵は地面が氷結し
て滑るにもかかわらず、「頗る熟練」した技術で馬を走らせた。チタの騎兵連隊の兵員の半分はプリヤート人である
が、連隊の軍規は嚴肅で、その精銳ぶりはコサック騎兵に劣らなかつた。このように見ると、福島のロシア騎兵に対
する評価はいたって高いものであった。

ただし管見の及ぶ限りでは、シベリア橫斷旅行の報告の中で騎兵以外の兵種の実態や優劣を詳しく述べた箇所は見

当たらない。それはなぜかという点、福島は騎馬で旅を行ったためロシア軍の騎兵部隊に接待されることが多く、どうしても騎兵中心に観察せざるを得なかったからである。しかし騎兵以外に猟兵連隊、歩兵連隊・大隊も訪れ、砲兵の射撃演習も見ているので、それらについても言及してしかるべきである。それなのに詳しいコメントがないのは不自然な印象を与える。

福島は騎兵以外のロシア軍部隊についてどのように考えていたのだろうか。この疑問に関連して次のようなことがあるので指摘しておきたい。^⑩シベリア横断旅行を終えてから三年余り後、福島が亜欧旅行の途中でエジプトから紅海を経由してセイロンのコロンボまで航海した際、船内にあった新聞に目を通したところ、あるイギリス人によるセヴァストポリ訪問の記事を見つけた。それはロシア黒海艦隊の状況を伝えるもので、その英人によるとセヴァストポリに入港する際、遠目から見たロシア艦隊の巨大な艦艙は実に壮観であったが、近づいてみると塗装が落ち、「不潔言フ可ラス」、一見して「軍紀訓練ノ不振」を示すものであったという。

さらにそのイギリス人がセヴァストポリの造船場に雇われた英人技師と話をした際、その技師は次のように述べた。ロシアの技師は不熟練、懶惰、酒好きで仕事に精を出さず、機関、機器が損傷しても修理の要務がわからず、かえって一層の破損を来たすことがある。そのため実際の海戦時に多くの損傷が出れば、彼らはどうしてよいかわからず狼狽するだろう。また将校は薄給であるのに衣食に贅沢をきわめ、酒色にふけり、博奕を好んで起居懶惰、品行不正、実に驚くに堪えない状態である。さらに下士以下は体格が強健ではあるが、動作遅鈍、訓練不熟、かつ不潔懶惰でウォッカを好み、ドイツ海軍よりもはるかに下位にある。黒海の海水は銅に反応する性質があるので、頻繁に船体を塗り替えなければいけないのに、役人の長は塗装の金額を着服して軍艦が腐朽するのを顧みないという。

右のようなロシア海軍の「墮落」を伝える記事を読んだ福島は、以下のように記している。「少シク酷評ニ過ルカ如

クナルモ、能ク其實際ヲ写シ出セシ者ナリ。魯國ノ陸軍ニ於テモ、安正ノ親シク目撃スル所ナリ⁽¹⁰⁾。つまりロシア陸軍もそれと同様の墮落を示していたというのである。実は福島は、ロシア軍が恐らく騎兵も含めて全体的に規律や緻密さに欠ける面、ある種のルーズな部分をもっていることを見抜いていた。しかしそのようなロシア軍の欠点を少くともシベリア横断の報告の中では指摘しなかった。それは一つには、仮想敵国としてロシアの欠点に注目するよりも、その強みを見極めることの方が大事であったからといえないこともない⁽¹¹⁾。しかしもっと重要であるのは、福島がロシア軍の欠点をなるべく目に触れない形にし、逆にその長所を指摘することによって、シベリア鉄道建設がもたらすロシア東進の脅威を日本政府、陸軍上層部により深く認識させ、その準備を急がせることを企図していたのではないかと⁽¹²⁾いうことである。ロシア軍人が懶惰でウオッカに溺れているようであれば、たとえシベリア鉄道が開通しても「ロシア恐るるに足りず」ということになり、彼のロシア脅威論は説得力を失うことになる。

第二に福島はこの旅行を通じて、ロシア国民の生の姿に触れることができた。ロシア農民の生活は都市の富裕層のそれとはかけ離れたもので、モスクワ、カザン、チュメニといった都市や町を一步離れると、飢餓に苦しむ難民の悲惨な姿があった。つまりロシア社会は二極分化の社会であり、そのような状態であっても精強な国民軍を形成できると福島は考えたであろうか。その点は疑問であるが、少なくとも彼は表向きには二極分化をロシア帝国の弱点とはせず、同国政府がロシア正教と皇帝に対する庶民の崇拜をうまく利用しながら対外膨張政策を押し進めている旨を報告した。ここにもロシアの弱みではなく強みを強調する姿勢をうかがうことができる。

第三に福島はこの旅行を通じて、アジアロシアの南部国境の状態を見ることができた。アルタイ山脈の露清国境付近においてロシア側はコサック村とコサック騎兵を重層的に配置して防備を固めていた。しかしモンゴルに入ると兵士の姿は見られず、ディフェンスの欠落は明らかであり、かつさまざまな地域でロシア商人の進出が顕著であっ

た。またアムール川に沿った露清国境においても、ロシアはコサック村とコサック騎兵を中心に植民経営を着実に進めており、一応の国境部隊を置いている満洲側よりも体制の整備は明らかに優勢であった。さらに北満洲における清朝軍の将兵は多少の例外はあったにせよ全体的に軍紀が弛緩し、馬賊の跳梁を抑えることができず、逆に馬賊から襲撃されることを恐れているほどであった。加えて北満洲の社会全体が国際情勢に疎く、ロシアに対して危機感をもつといった雰囲気から程遠かった。

以上の過程から福島は、ロシア軍がその気になればモンゴル、満洲を併呑するのは決して難しいことではなく、むしろたやすいであろうということを具体的かつ明確に認識したと考えられる。

四 ペルシャと中央アジア

福島はロシア勢力東漸の行方を追うため、前章で見たように北ルートでヨーロッパロシア、ステップ（草原）地帯からモンゴル、シベリア、北満洲を経てウラジオストクまでを踏破した。それはシベリア鉄道の建設ルートにやや沿った形で、アジアロシアの南部周縁部をうかがうものであった。

さらに二年後の一八九五（明治二十八）年に日清戦争が終了すると、福島はかねてからの希望であった南ルートの視察を参謀本部に再び請願してこれも実現する。アジアとヨーロッパにまたがるこの長期周遊を福島自身は「亜欧旅行」と呼び、露英仏三国のアジア進出の状況を広範囲にわたって総合的に探ったが、その根幹部分はペルシャ、コーカサス地方からカスピ海を横断してタシケント、コーカンドに至り、そこから再びペルシャに戻る、すなわち中央アジア鉄道の建設ルートに沿った形でロシア領トルキスタンとその周辺をうかがうというものであった。

最終的に福島は、北ルートとのシベリア単騎横断旅行に加えて南ルートの子欧旅行を实行することによって、ロシアの南部国境（コーカサス—中央アジア、シベリア）周縁部の状態を大まかに把握することになる。^(註) 言い換えればユーラシア大陸を横断するロシア南下監視ラインといふべきものをおおむね完結させることになるのがこの子欧旅行であった。子欧旅行は実施期間が一年半にわたり、訪問国・地域もバラエティに富んでいた。その経路は以下の通りである。

〔一八九五（明治二十八）年〕

〔日本からエジプトまで〕

十月 五日 新橋停車場出発

六日 神戸

七日 神戸出航

八日 長崎

九日 長崎出航

十日 上海

十二日 上海出航

十五日 香港

十六日 香港出航

十九日 サイゴン

二十日 サイゴン出航

二十二日 シンガポール

二十三日 シンガポール出航

二十八日 コロンボ（朝到着、夜出航）

十一月 二日 アデン湾に入る

四日 アデン（朝到着、夕方出航）

八日 スエズ

九日 スエズ↓（汽車）↓カイロ

二十一日 カイロ南郊のトーラを半日見学

二十二日 カイロ南方のヘルワンを日帰り見学

〔ナイル川視察〕

二十六日 カイロ出航

二十七日 マガガ

二十九日 アシユート

三十日 アシユート出航

十二月 二日 ルクソール

六日 ルクソール出航

七日 アスワン

十一日 アスワン↓(汽車) ↓アスワン南郊のシエラルより出航

十二日 コロスコ

十三日 コロスコ出航

十四日 ワジ・ハルファ(現スーダン最北部)

十七日 ワジ・ハルファ出航、ルートを折り返す

十八日 コロスコ

十九日 シエラル↓(汽車) ↓アスワンより出航

二十日 ルクソール

二十五日 ルクソール出航

二十六日 アビドス

二十八日 マガガ

二十九日 カイロ着

〔一八九六(明治二十九)年〕

〔エジプトから東地中海を経てオスマン帝国へ〕

一月 四日 カイロ出発↓(汽車) ↓アレクサンドリア

七日 アレクサンドリア出航

八日 ポートサイド

九日 ヤッファに接近するも風波が激しく寄港できず、ベイルート投錨

十日 ベイルート出航

十一日 キプロス島ラルナカ寄港

十二日 ロドス島ロドス寄港

十三日 スミルナ（現イズミル）

十四日 スミルナ出航

〔オスマン帝国統治下の現トルコ〕

十五日 ダーダネルス海峡通過、コンスタンティノープル（現イスタンブール）着

二月 五日 コンスタンティノープル発

〔東地中海からエジプトへ〕

六日 ピレウス（アテネの外港都市）寄港

七日 クレタ島付近通過

八日 アレクサンドリア着↓（汽車）↓イスマイリヤ

十一日 イスマイリヤ出航

十五日 アデン湾に入る

〔セイロン、インド南端、ベンガル湾を經由〕

二十二日 コロンボ

二十三日 コロンボ出航

二十四日 トゥティコリン（現トウーットウツクデイ）

二十五日 トゥティコリン出航

〔ビルマ〕

二十九日 ラングーン

三月 六日 ラングーン↓（汽車、ペグー經由）↓

七日 ヤメーデン（ヤメーティン）

八日 ヤメーデン↓（汽車）↓マングレー

九日 マングレー出航、汽船でイラワジ川（現エーヤワディー川）を遡る

十日 カター投錨

十一日 バーモー（バモー）〔清との国境まで四〇キロ程度〕

十三日 バーモー発、以下汽船でイラワジ川を下る、カター投錨

十四日 カター発

十五日 マンダレー

十八日 マンダレー発

二十日 プローム(現ピイ) ↓(汽車) ↓

二十一日 ランゲーン

熱病のため静養

二十五日 ランゲーン出航

〔英領インド〕

〔現インド地域〕

二十八日 カルカッタ (現コルカタ) (以下、移動は一部馬車などの例外を除き鉄道による)

三十一日 カルカッタ発

四月 一日 ダージリン

八日 ダージリン発

九日 カルカッタ

十一日 カルカッタ発 ↓

十二日 (↓アラーハーバード ↓カウンプル (現カーンプル) ↓

十三日 アンバラ ↓) カルカ

十四日 カルカ ↓(馬車) ↓シムラー

二十三日 シムラー発 (↓カルカ↓アンバラ↓)

(現。パキスタン地域)

二十四日 ラホール早朝着、日没発

二十五日 (↓ムルターン↓バハーワルプル↓ルーク〔現ローリ〕↓

二十六日 ジャコババード↓シビ↓コースト↓ボスタン↓クエッタ

二十九日 クエッタ↓ボスタン↓ガリスタン↓チャマン

三十日 チャマン↓ボスタン↓クエッタ

五月 一日 クエッタ↓ボスタン↓シビ

二日 ↓ジャコババード↓ルーク↓コトリ↓カラチ

五日 カラチ出航

(現インド地域)

七日 ボンベイ(現ムンバイ)着

十七日 ボンベイ出航

(現。パキスタン地域)

十九日 カラチで汽船乗換

〔英領インドからペルシャへ〕

〔オマーン（イギリス保護国）〕

二十一日 マスカット

〔ペルシャ（現イラン）〕

二十二日 ジャースク

二十四日 リンガ（現バンダレ・レンゲ）

〔バーレーン（イギリス保護国）〕

二十五日 バーレーン

二十六日 バーレーン発

〔ペルシャ〕

二十七日 ブーシエフル〔以下、移動は特記のない限り騎馬による〕

六月 四日 ブーシエフル発↓（小舟）↓ジーフ（シーフ）↓急病で倒れ寒村で露宿

五日 ボラジム（ボラジャン）

六日 ダラキー（ダラキ）

七日 コナールタクタ（コナールタフテ）

- 八日 カマラツジ（カマラジ）
九日 カゼルン
十日 カゼルン発
十一日 ダスタルジャン（ダシュト・アルジャン）
十三日 ダスタルジャン発、コナゼリヤン着
十四日 シーラーズ
十九日 シーラーズ発、シーヴァンド着
二十日 デービッド（現サファシャル）
二十一日 アバデー（アバデ）
二十二日 マクスード・ベギー（マクスード・ベイク）
二十三日 イスファアハーン
二十八日 イスファアハーン発、クールード着
二十九日 パサンガン
三十日 クーム（コムまたはゴム）
七月 二日 クーム発↓（郵便駅車）↓
三日 テヘラン着

〔カスピ海、コーカサス旅行〕

八月 二日 テヘラン発↓(馬車) ↓

三日 ↓カズウィーン(ガズヴィーン) ↓(馱馬車) ↓パチナール

四日 クドン

五日 レシト(ラシュト)、ピリバザール↓(小舟) ↓エンゼリー(アンザリー)

六日 エンゼリーよりロシアのカスピ海郵船で出航↓アストラ(アスタラ)

ペルシャ・ロシア国境を越える

↓レンコラン(ランカラン) ↓

(現アゼルバイジャン)

八日 バクー

九日 バクー発↓(汽車) ↓

(現ジョージア)

十日 テイフリス(トビリシ)

十三日 テイフリス発↓(馬車、軍用道路) ↓

(現ロシア連邦)

- 十四日 ウラジカフカス↓(汽車) ↓
十五日 ペトロフスク(現マハチカラ) ↓(汽船) ↓
十六日 デルベント↓(汽船) ↓

(現アゼルバイジャン)

- 十七日 バクー↓(汽船) ↓

(中央アジア旅行)

(現トルクメニスタン)

- 十八日 ウズン・アダ (Uzun-Ada 現トルクメンバシ湾沿岸) ↓(軍用汽車で夕方出発、二昼三夜を走行、アシガバート、メルヴ〔現マル〕経由) ↓

(現ウズベキスタン)

- (ブハラ経由) ↓
二十一日 サマルカンド
二十四日 サマルカンド発↓(駅馬車、ジザク〔ジザフ〕経由) ↓
二十六日 タシケント

二十九日 タシケント発↓(駄馬車、タジキスタンのホジェンド経由)↓
三十一日 コーカンド

九月 一日 コーカンド発↓(駄馬車、ホジェンド、ジザク経由) ↓

五日 サマルカンド

六日 サマルカンド発↓(汽車) ↓

七日 ブハラ(新ブハラ、旧ブハラ)

九日 ブハラ発↓(汽車、メルヴ経由) ↓

(現トルクメニスタン)

十日 アシガバート

〔北ペルシャ旅行〕

十二日 アシガバート発↓(以下馬車) ↓

ロシア・ペルシャ国境を越える

バスキル(現バジランカ)

十三日 イマンクレー

十四日 クーチャーオン

十五日 サイダーバード

十六日 マシユハド

二十三日 マシユハド発↓(以下騎馬、サブゼボール経由) ↓

二十八日 シャールード(現エマームルード)

二十九日 ダームガーン

三十日 セムナーン

十月

一日 テヘラン

二十五日 テヘラン発↓(以下馬車) ↓ハサナバード

二十六日 Manzarivoh

二十七日 同右↓(馬車) ↓サーヴェ↓(以下騎馬) ↓ガイタニヤ (Qeytaniyeh ケイタニエ)

二十八日 メレーク駅

二十九日 ノラギラ駅

三十日 ハマダーン

三十一日 アサダーバード

十一月 一日 サニー (Sahneh サフネ)

二日 ケルマーンシャー

五日 ケルマーンシャー発↓一寒村着

六日 ケレンド

七日 サルポール

ペルシャ・オスマン帝国の国境を越える

〔オスマン帝国統治下のアラブ地域旅行〕

〔現イラク〕

八日 ハーナキーン（以下騎馬）

九日 シャラーバーン（ミクダディヤ）

十日 バコバ（バアクーバ）

十一日 バグダード

十三日 バグダード出航↓（汽船でテイグリス川を下る、アマール、クルナ経由）↓

十六日 バスラ

十九日 バスラ出航

〔現イラクからインドシナ半島へ〕

〔ペルシャ〕

二十一日 ブーシエフル

〔バーレーン（イギリス保護国）〕

二十二日 バーレーン

(ペルシャ)

二十三日 リンガ(現バンダレ・レンゲ)

(オマーン(イギリス保護国))

二十六日 マスカット

(英領インド(現パキスタン))

二十八日 グワーダル

三十日 カラチ

(英領インド(現インド))

十二月 三日 ボンベイ

八日 ボンベイ発↓(汽車、ナーグプル経由)↓

十日 カルカッタ

十二日 カルカッタ出航

十六日 ラングーン

二十一日 ペナン

二十三日 シンガポール

〔一八九七（明治三十）年〕

一月 五日 シンガポール発予定

以下訪問地、寄港地のみ判明^⑧

〔シヤム（現タイ）〕

バンコク

アユタヤ

チャンタプリー

〔仏領インドシナ〕

〔現カンボジア〕

ポート・サミット

〔現ベトナム〕

サイゴン（現ホーチミン）

ニヤトラン（ニャチャン）

クイホン（クイニョン）

トゥーラン（現ダナン）

海防（ハイフォン）

河内（ハノイ）

諒山（ランソン）

同登（ドンダン）

康海（ホンゲイ、現ハロン）

丐瓢（現 Hoanh Mo か）

瓊州（現、海口）

香港

三月 二十五日 帰朝

亜欧旅行のルートは以上の通りである。⁽⁸³⁾ まず日本を出発した福島は、各港に立ち寄るごとに新聞などの公開情報に目を通すのはもちろんのこと、西洋および日本の在外使臣に会って話を聞きながらロシアの動きを追っていた。⁽⁸⁴⁾ セイロンのコロンボに寄港するころにはオーブンソースの外電を通じて、ロシアが清国と条約を結び、満洲を横断してウラジオストク、旅順に鉄道を延ばし、かつ旅順に軍艦を滞泊させる権利を得たという情報を入手した。⁽⁸⁵⁾ これらはそれから七ヶ月後の露清密約（一八九六年六月）、二年五ヶ月後の旅順・大連租借に関する露清条約（一八九八年三月）の

調印という形で実際のものとなるが、福島はそうした事態に先駆けてロシアの意図を認識していたことになる。

シベリア鉄道に加えて東清鉄道とその南滿洲支線の建設を予知した福島は紅海を航行中、次のように記している。

彼レ〔ロシアは〕実ニ滿洲〔洲〕ヲ併吞シテ東洋ニ望ムノ陰謀ヲ暴露シタリ。……彼ノ準備全ク整頓スルハ西比利亞鉄道全通ノ時ニシテ、尚ホ早クモ五六年ノ日月ヲ要サン。……魯國ハ元來信義ナク殘忍酷薄ニシテ、國ヲ亡シ地ヲ奪ヒ、己レ境域ヲ広メテ暴威ヲ擅ニセントスル者ナリ。故ニ其言ヲ容レテ一ヲ讓レハ二ト言ヒ、二ヲ讓レハ三ト言ヒ、益々得テ益々飽ク事ナキヲ常トス。

ロシアは鉄道権益を通じて滿洲を縦横に支配しようとしているといっているのである。その準備が整うのはシベリア鉄道が全面開通する早ければ五、六年後〔一九〇〇—〇一年〕であるとして、これに備えた日本の実力養成、兵備拡張が急務であることを強調した。⁽⁸⁸⁾

紅海を北上してカイロに到着した福島は、エジプトをめぐる英仏露の争いが東アジアにおける三国の威権拡張に連動して来るだろうと考え、ヨーロッパ、アジア、アフリカ三大陸の交差点であるカイロに日本の総領事館を設置することを参謀本部に提言した。またとくにスエズ運河を通過する各国の船舶数を調べることによって、たとえばロシアが欧州での難問を避けてアジア東方に企図を向けていることなどがわかるとしてポートサイドに領事館を、同じく大陸の情勢が交わるコンスタンティノープルに公使館を置くことを提案した。⁽⁸⁹⁾ それ以外に彼は、イギリス軍とスーダンのマフディー教徒の戦い（マフディー戦争、スーダン戦役）の行方が英仏露の勢力バランスに反映して来るだろうと考えてナイル川を下り、ワジ・ハルファ（現スーダン最北部）まで視察に出たが、その点は日本と直接の関係がな

いため本稿では省略する。

エジプトから地中海経由でオスマン帝国に移動した福島は、バルカン視察時以来六年ぶりの二度目となる首都コンスタンティノープル滞在を行った。同地では欧米各国の大公使、武官やイギリスの『タイムズ』(Times)通信員などと交流して情報を集めるかたわら、オスマン外務省、陸軍省の斡旋を通じて同陸軍の兵営、学校を見学しようとしたが、両省の反応は前回の訪問時に輪をかけて鈍く、二週間待っても返答がなかったため、予定を変更して英領インドに向かうことにした⁽⁸⁸⁾。ただし成果がまったく無かったわけではなく、中村商店の中村健次郎と山田寅次郎が福島の下を訪れて知り合いになり、彼らの雑貨業が好調のため近日大通りに出て規模を拡張するという喜ばしいニュースを知られた⁽⁸⁹⁾。当地に日本の外交官や武官が駐在していない以上、土地に根を下ろした中村商店の存在は貴重であった。

さらにオスマン帝国軍関係者と十分接触できない一方で、イタリア大使館付武官の助けを借りることによってオスマン軍全体の軍制を明らかにすることができたのは大きな収穫であった⁽⁹⁰⁾。福島はその成果として同軍の組織、編制を詳細に報告したが⁽⁹¹⁾、その際表向きの数字だけでなく、内部の実態についても光を当てている。それによるとオスマン軍は末期症状の様相を呈しており、陸軍は財政困難、給与未払い、弾薬不足、兵数減少に陥り、将校は部下を統御する能力が欠落していた。また海軍は艦艇に石炭がまったく貯蔵されておらず、俸給未払いのため夜間ひそかに機関を売却してしまう者すら出ている。軍隊以外でも官吏や大臣の汚職が横行して国政の腐敗は極度に達しており、このまま行けば反乱が起きて帝国が瓦解するのは時間の問題であるが、英仏独魯伊奥の六ヶ国は甲派(トルコを分割する)と乙派(トルコの存立を維持する)の二つに意見が分かれているという⁽⁹²⁾。

オスマン帝国が崩壊して列強に分割されるならば、当然地続きのロシア帝国がアナトリア半島のトルコに南進することになる。しかしそれは日本にとって好都合であると福島は考えていた。オスマン帝国は今年でなければ数年内で

必ず四分五裂して強国が干渉するだろうが、そうなれば「本邦ノ為メ便利ノ時機」が来るのは疑いないといふのである。⁽⁸⁸⁾要するに欧州列強、ロシアがオスマン問題にかかずりあっている間に日本は軍備拡張を進めることができるというわけである。オスマン弱体化、分裂によるロシア南下は福島にとって不安材料ではなく、むしろ望ましいことであつた。

オスマン帝国を離れた福島は一八九六（明治二十九）年二月末にまずビルマ、ついで三月末よりインドを訪れた。ビルマ旅行はロシアと直接関係がないのでここでは割愛し、インド調査について見ておくこととする。彼にとって第一回目の視察から十年ぶり、二度目のインド訪問となるが、今回も彼がもっとも重点を置いたのはインド・アフガニスタン国境であつた。ただし北西部のペシャーワルからカーブルを望む北西辺境州とその周辺については一回目の旅行で検分済みのため、今度は南西部のクエッタ、チャマンからカンダハールを望む地域が眼目となつた。

シムラーに着いた福島は、まず「輻重運輸」に関する研究を行いたいの希望をインド総督官邸に提出した。⁽⁸⁹⁾許可を得た彼はイギリス側の協力の下、南西部国境地帯における英領インド軍の編制を下調べした。この地域はクエッタが前進基地、チャマンが最前線哨所となつており、いずれも後背地から鉄道でつながっていた。もし中央アジアのロシア軍がアフガニスタンのヘラートに南下すれば、そこから首都カーブルへ東進するだけでなく、南東に向かつて第二の都市カンダハールを占領することが予測されたため、英領インド軍はそうしたロシア軍に備えてクエッタ、チャマンとその周辺十二の地点に、合わせて歩兵八大隊、騎兵三連隊、山砲兵二中隊、重砲兵二中隊、工兵一中隊、ならびにそれらの分遣隊を展開させていることがわかつた。そうした基本事項を確認した上で福島は現地に向けて出発した。⁽⁹⁰⁾

まずクエッタの鉄道駅に着くと、現地司令官の将官、参謀、経理部長らが出迎えて案内した。司令官は福島のため

に部隊を集合させて、敵（ロシア軍）がクエツタの側背を衝いて来たという想定の下で演習を行わせてみせた。部隊が防衛拠点となる険しい峰を占領すると、工兵、歩兵がすぐに道路の建設に取りかかり、大小の石がころがる荒地にわずか二時間で補給用の道路を完成させた。ついで輜重兵が車輻と荷物を積み重ねて四角形の胸壁を作り、そこに歩兵が配置され、重砲兵が周辺を固めることによって陣地が形成された。こうした演習のほかに、経理部長の大佐とともに輜重廠に行つて運搬用のラクダや牛、数十棟の倉庫を見て回つたが、整理が行き届いており福島を感心させた。ただし肝心の要塞については、先年ロシアのスパイが潜入して防衛陣地の見取り図を作成して以来、警戒が嚴重になつたという理由から見せてもらえなかつた。⁽¹⁸⁾

次に最前線のチャマンの鉄道駅に着くと、守備隊長の英人少佐以下が出迎えてもてなした。チャマンには主に現地のパルーチ人歩兵が置かれていたが、いずれも勇壮な顔立ちで体格も良くマルチニー銃を携えていた。ところがアフガン人も募集に応じて兵隊に加わつていたのは意外であつた。福島は彼らを「利のために国王と父親に銃剣を向けた」裏切り者とみなし、アジアの「腐敗」の一例として慨嘆した。

守備隊長に案内された福島は、保塁やその中にある兵舎、貯水場を巡覧し、インド・アフガニスタン国境を示す白い石標から一〇キロほど彼方にあるアフガニスタン側の陣地も遠望した。アフガン人は国境を越えてチャマンの市場に買物に来ており、守備隊長によると彼らは嘘をつくことが多いので信用できないという。またアフガン兵は規律訓練がないためとても精錬の兵とはいえない。しかも軍医がいないので、病気の際はインド側にやつて来て英国軍医の治療を受けるとのことであつた。

チャマンでとくに印象的であつたのは、英領インド軍が一〇〇マイル（一六一キロ）分の鉄道用レール、二〇〇マイル分の電線、およびそれに関連する信号機や電柱などを蓄えており、命令が下れば一〇〇キロ余り先のカンダハー

ルまで三ヶ月以内で鉄道、電線の敷設が可能になっていたことである。⁽⁹⁾

右のようにクエッタ、チャマンのどちらにおいても英領インド軍の用意は周到であった。しかしロシア軍に対して万全かという点、そうではないというのが福島島の結論であった。両国の「勢い」を比較すると、イギリスは大規模な戦いを行う余裕があった一八八五年のパンジエ紛争当時と異なり、有事の際、限られた兵によってロシアに対応しなければならぬが、ロシアは中央アジア鉄道を利用して多数の兵を召集できるため、より活発な行動が可能となる。そのためロシアがアフガニスタンに侵攻すれば、イギリスはカンダハールまでは前進するにしてもロシアと実際に戦端を開くことはできず、アフガニスタンを分割する形でロシアと妥協するだろうというのが彼の予想であった。⁽¹⁰⁾ 要するに南西部国境における英領インド軍はよく整備されているが、ロシアのアフガニスタン侵攻を抑止するほどのものではないというわけである。

高地にあるチャマンから鉄道で下界に降り、シビからジャコバードを抜けて南のカラチに向かった福島は、汽車の中でそれまでの人生のうち最高の気温を体験した。恐らく五十度を超えていたのではないかと推測されるが、車窓から吹き込む熱風は皮膚を裂くようで、車内の窓ガラス、寝台、木の床のすべてが熱く、「火辺二居ルカ如ク」であった。⁽¹¹⁾

カラチは天然の良港をもち、最前線チャマン、前進基地クエッタの後方補給源となる点で見逃すことのできない要地である。福島はここで英領インド軍の輜重力を調査したのち、さらに南のボンベイまで一旦下がり、山田成徳領事の協力を得ながらベルシャ総領事との交際を深め、ベルシャ要路者への紹介状を入手するなど次の旅行の準備を進めた。その上でボンベイを出港した福島は、一八九六（明治二十九）年五月、ベルシャ湾に面したベルシャの海港都市ブーシェフルに上陸した。⁽¹²⁾

税関を通るとすぐにペルシヤ湾州知事に面会し、外交事務官の官邸に宿泊することができたが、プーシエフルの市街は道が狭く、高い建物が両側から迫り、「糞塵死畜及ヒ百般ノ汚物、此狭路ニ狼藉積堆シテ臭気甚シ」といった状態で、ここに住む人々はどうやって呼吸をしているのかと疑うほどであった。このような印象はそれ以外の町村でも同様で、「人煙稠密、街路狹隘、汚穢堆積、糞尿流レテ川ヲ為シ、合シテ飲水ニ入ル。臭気紛々タリ」といった情景を福島はあちこちで書き留めている。またプーシエフルは湾岸の出入口であるのに外国の新聞もなく、文明世界と離れて「全ク暗黒ノ天地」であるというのが第一印象であった。^(註)

従者を雇うなど旅行準備を整えた福島は、プーシエフルから内陸のシーラーズまで（約二七四キロ）は自分で手配した馬に乗り、シーラーズから北上してイスファアハーン経由でテヘランまで（約九六六キロ）は駅馬を利用して旅を進めることにした。一八九六年六月の朝、いよいよプーシエフルを出発したが、予想外に気候は厳しく、午後になると気温は三八・九度に達した。猛暑で全身がただれるようで、砂から反射する光線に目をやられて痛みが苦しみなから馬を進めたが、夕方にはめまいと吐き気を催し、ついに福島は馬に乗っていることができず地面に倒れ伏した。日没後、頭を冷やした結果、ようやく蘇生して翌早朝には出発することができたものの、三日後には再び激しい頭痛とともに卒倒し、従者を持って来させた水を上半身にかけて飲んだりしてようやく持ち直した。よく見ると水の中は紅白異形の有機物だらけで異臭を含んでいたが、そのようなことを気にしている余裕はなかった。^(註)

このように出発早々、猛暑による熱中症の洗礼を受けた福島であったが、以後は体調を崩すことなく旅を続けることができた。しかし彼がペルシヤに到着する直前に国王のナーセロッティーン・シャー(Naser al-Din Shah Qajar)が暗殺されるという事件が起こり、とくにそれ以降ペルシヤ南部の治安は大きく乱れ、マルチニー銃で武装した遊牧民の強盗が頻繁に出没したため隊商の行き来がストップしていた。福島はそうした中に飛び込む形になってしまったの

である。

ブーシエフルを出立してから最初の都市となるシーラーズでは暴民が略奪を行い、現地の総督が騎兵を派遣して鎮圧しようとしたところ、騎兵は逆に暴民に襲われ、身ぐるみをはがされて裸体で逃げ帰ったという話も伝わっていた。福島の見たところ、地方官は拱手傍観して成り行きに任せるだけであり、ベルシャ軍の兵隊は「訓練軍紀ナキ人足同様」であつて、治安の維持すら難しかった。実際、シーラーズで彼の護衛にあつた兵士たちは襤褸の制服を着け、ラバにまたがって前後をまともに進むだけで体裁をなさず、「実ニ驚キ入リタル有様ナリシ」と福島を嘆かせた。⁽²⁶⁾

シーラーズからイスファハーンに向かう途中の六月、アバデーの町で物珍しい光景に出くわした。十数名の人々が互いに抱き合い、胸を打ち、アリーの名を呼びながら「狂奔」していたのである。これはシーア派初代イマーム（宗教指導者）アリー・イブン・アビー・ターリブの殉教を悼む行事ターズイエであつた。同じ時期、ベルシャ全土でそうしたイマーム・アリーへの追悼が行われており、福島はその一齣に遭遇したわけである。⁽²⁷⁾このような場面を目撃した上でイスファハーンに到着した彼は、イスラーム教の学院を見学したようである。この学院は有志者の募金で維持され、地元や地方から来た多数の学生が学んでおり、卒業者は教長（ムラー）になるといふことを彼は報告している。⁽²⁸⁾福島はイスラーム教に深い理解があつたわけではなく、むしろその弊害を指摘してマイナスの評価を下しがちであつたが、少なくともベルシャでイスラーム教の影響力の強さを強く感じ取つたことは間違いない。

イスファハーン以北は南部と違って平穏で隊商も行き来しており、駅馬を利用して一日平均一〇〇キロ程度のペースで進んだ福島は、七月に首都テヘランに到着した。⁽²⁹⁾ 同地では途中で中央アジア視察を行った期間を挟んで前後約一ヶ月ずつ、合計約二ヶ月滞在して調査を行った。移動の多い福島の旅の中では比較的長期の逗留であり、彼がベルシャの帰趨を気にかけていたことがわかる。その間、新国王モザッファロッディーン・シャー (Mozaffar ad-Din

Shah Qajar) に謁見し、総理大臣や外務省関係者と会見したほか、欧米各国の外交使臣、武官と交流しながら情報を集めている。⁽²⁷⁾ テヘランで福島がペルシヤならびにペルシヤ人についての観察を記した報告が残っているが、そのポイントを要約すると以下のようなになる。⁽²⁸⁾

①生活風習……家屋はおおむね土できており、屋根低く、部屋小さく、窓なく、すこぶる暗黒で不潔である。婦人は頭から大きな黒布で全身を覆い、額のあたりから長方形の白布をたらしてその上部の網の部分からのみ世界の光を見る。婦人を束縛すること厳密である。

②宗教……毎日二、三回、呪文を唱え、西南メッカの方向を拝して冥福を祈る。「蒙昧」の人民の常で宗教の迷信が甚だ深く、僧徒を見ること神のごとくである。教長(ムラー)は一方で人民を惑わして私利を営み、他方で人心を煽動して開明の事業を妨害し、政府は僧徒の意思に反する施政を行うことができないう有様である。「国家ヲ毒スル之ヨリ甚シキ者ナシ」、「宗教上ノ障害又実ニ甚シト謂フヘシ」。

③教育……集落にはまれに学校があるが、教えるのは回々教の聖書だけで、天下日常の教科に及ばず「頗ル盲昧」で、ほとんど外国の存在を知らないような状態である。忠君愛国の精神のごときは地を払って消滅している。また全国に一つも新聞がなく、天下の形勢に暗黒で、アジア西方の別世界である。

④上下腐敗……官吏は高官の子弟であるか賄賂によって地位を得る。政府が俸給を与えないため官吏は強徴取賄

によって生活し、上にへつらい、下を抑圧して私利を営むのに汲々としている。人民は政府に財産を横奪される可能性があるのでまじめに働く気にならず、懶惰に流れ、廉恥道德はなく、詐偽盜奪が彼らの常習となっている。西アジアに一つの朝鮮を見る思いである。

⑤軍隊……ペルシャ兵の過半が西部州郡より徴集したトルコ人種〔テュルク系〕でペルシャ人より勇壮であるが、士気訓練がなく、軍服は破れ、銃は錆び、弾薬もなく、「見ルモ憐レノ有様ナリ」。軍紀は地に落ち、兵は將校を見ても敬礼せず、ロバに乗りながら胡瓜を食べ、街頭に坐って水タバコを吸い、城門の番兵は昼寝をしている。政府は数ヶ月、時として一年余り給料を支給しないことが多く、兵卒は日雇いとなって糊口をしのいでいる。このような軍隊が国家の秩序を維持し、強国の大軍に対抗できるであろうか。ペルシャは一〇万六、〇〇〇人の兵をもつというが、実際には騎兵六〇〇名を除いて兵備なしといつてよい。

⑥コサック式騎兵（ペルシャ・コサック）……右の騎兵六〇〇名はテヘラン駐屯の騎兵一旅団（騎兵六中隊、騎砲兵一中隊）を構成する。兵は西部州郡出身のトルコ人種で、旅団長と基幹の三人の大尉はロシア人將校である。編制と服装はロシアのコサックとまったく同じで、ペルシャの騎兵と称するものの「実ハ既ニ魯国ノ掌中ニアリ」。したがってロシアの威望がペルシャ北部に赫々たることは決して偶然ではない。軍紀は嚴肅、訓練は熟練している。

⑦士官学校……ドイツ人將校二名が十数年にわたって教育を行っているが、成果はあがっていない。生徒はおお

むね懶惰で、規律に服することを好まず、学業に堪えられずに口実を設けて退校する。たまたま卒業しても軍隊は種族組織で、族長部長しか将校になれない。また将官の過半は縁故ないし賄賂で地位を得たもので、軍事について無知である。

⑧警察……ペルシャで警察を置いているのはテヘラン城中だけで、先年オーストリア人将校によって編制された。軍服を着け軍刀を帯びてはいるが、襤褸貧賤で、規律がないことは一般の兵卒に変わらない。

福島が観察したペルシャならびにペルシャ人は以上のようなものであった。それによると、ペルシャでは役人も人も私利私欲を追求して「腐敗」がきわまり、宗教がネックとなつて開明政策が進まず、軍隊はロシアが掌握するテヘランのペルシャ・コサック以外に存在しないも同様であった。そうした中で同国は北からロシア、南からイギリスの進出を受け、両国に分割される可能性があつた。福島が確認したところ、テヘランがロシア指導下のペルシャ・コサック一旅団に抑えられているだけでなく、その北西・北東の国境線はコーカサスと中央アジアのロシア軍の圧力を受けていた。またテヘランの真北にあるカスピ海の利権はことごとくロシアの手に落ちていた。⁽²⁰⁾

その一方でペルシャの側にもロシアないしイギリスの浸透を受け入れる傾向が生じていた。イスファハーン滞在中、福島はジョン・R・プリース英領事 (John Richard Preece) から、国王モザッファロッディーン・シャーと北部の人心は親露的であり、他方、前国王の長子でイスファハーン総督のマスード・ミルザ親王 (Massoud Mirza Zelle Soltran) と南部の人心は親英的であることを聞いていた。実際にプリース領事に案内されてマスード・ミルザ親王に謁見したところ、親王自身が自分は親英反露であることを福島にほのめかしている。⁽²¹⁾

さらに福島は、南部のシーラーズの官吏から「ペルシヤは腐敗の極に達しているので、イギリスの統治を望む」という意見を聞かされた。ある英人電信技士にその話をしたところ、そうしたペルシヤ人の声は決して珍しいものではなく、むしろ常に耳にしていると彼は答えた。現地でこのような情報を照らし合わせた福島は、ペルシヤがいわば亡国の危機に瀕していることを実感し、「嗚呼衰運ノ極、遂ニ此ニ至ル。実ニ歎スヘキナリ」と報告している⁽²¹⁾。ペルシヤに実質的な兵力がほとんどないにもかかわらず、かろうじて独立の形をとつていられるのは英露兩國の勢力の中間に位置するためで、ロシアが東方政略に忙しく、イギリスも多方面に問題を抱えて干渉の余裕がないからである。しかし「波斯ノ命運、実ニ危険ナリト謂フヘシ」というのが彼の結論であった⁽²²⁾。

以上のように福島から見たペルシヤは北部をロシア、南部をイギリスによって分割統治される可能性があった。そうした認識をもつ彼はペルシヤの北に隣接し、ロシアが抑えているコーカサス、カスピ海、中央アジアへの旅行を計画した。何よりも中央アジアではかねてから注目してきた中央アジア鉄道（カスピ海横断鉄道）の建設状況を自分の目で確認する必要がある。旅行準備を進めた福島は、すでに入手していた旅行許可の電報をロシア公使に示して旅券の裏書してもらうとともに、宿泊していた英国館（英国ホテル）に荷物を預け、鞍袋二個だけを携帯することにした。一八九六（明治二十九）年八月、あえて軽装身軽となった福島は馬車でテヘランを出発した⁽²³⁾。

まずコーカサス旅行であるが、カスピ海沿岸にあるペルシヤの港町エンゼリー（アンザリー）からロシアの郵便船に乗った福島は、すでに油田開発で知られていたバクーで下船した。バクーからはコーカサス横断鉄道（別称トランスコーカサス鉄道、ザカフカス鉄道）に乗車してティフリス（トビリシ）を訪れ、同地に三泊四日滞在している。ティフリスはロシアのコーカサス支配の中心地で、コーカサス総督府、コーカサス横断鉄道本部が置かれており、福島の旅行の主眼もこのティフリスと黒海―カスピ海をつなぐコーカサス横断鉄道的一端を見ることにあったと考えられる。

ティフリスでの見学を終えた福島は馬車で約二一〇キロにわたる軍用道路を北上し、コーカサス山脈を越えてウラジカフカスに入った。さらにウラジカフカスより鉄道でカスピ海西岸のペトロフスク（現マハチカラ）に出ると、そこから汽船でバクーに戻り、さらにバクーからカスピ海を横断して対岸のウズン・アダに渡っている。以上のように福島のコカサス旅行の日程、経路、交通手段は判明しているが、その間どのような情報活動を行い、何を見たのかについてはほとんど記されておらず不詳である。⁽²¹⁾

次に中央アジア旅行である。カスピ海東岸のウズン・アダからは、彼が十年にわたって注視してきた中央アジア鉄道の旅となった。軍用列車に乗り込んだ福島は、ウズン・アダより二昼三夜（一、四三四キロ）を走ってサマルカンドに到着した。サマルカンドでは軍務知事、副知事を訪問し、一四世紀にティムール帝国を創始したティムール（Timur or Tamerlan）の墓（グーリ・アミール廟）に詣でている。しかしここで大事なことは到着の翌日、サマルカンドよりタシュケントに向かう鉄道工事を見たことである。ただし資料には「鉄道工事を見る」とだけしか記されておらず、それがどのようなものであったかについては触れられていない。⁽²²⁾

サマルカンドから先の鉄道はまだできていないため駅車（駅馬車の一種）に乗り、三〇〇キロ余りを揺られて二日後にタシュケントに着いた。その間、福島は馬車の中から宿駅間ごとの地勢を観察し、「沃野／北方遙望沃野／高原坦々／高原坦々緩下／高原小起伏／山間峡谷／渡河／有草／無樹木／乏水／無木水」といったメモを記している。また途中のジザク（ジザフ）に若干の兵隊が駐屯していること、タシュケント手前にあるシルダリヤ川は幅が狭く渡船のあるところで一〇〇メートルにすぎないが、渡船はわずか一隻で車輛七、八台を載せる程度であり、両岸に船を待つ車馬、ラクダが絶え間なく続いて非効率である様を報告している。⁽²³⁾

しかしここでもとくに重要であるのは、鉄道の建設状況を観察したことである。福島の見たところ、サマルカンドか

らジザクまで（約一〇〇キロ）の基礎的な土木工事はおおむね終わろうとしており、この勢いをもってすればタシケントまでの全通（約三〇〇キロ）は二年後であろうと彼は予測、報告した。⁽²⁷⁾この見込みは的中し、二年後の一八九八（明治三十一年）年に中央アジア鉄道はタシケントに到達することになる。

駅馬車でタシケントに着いた福島はトルキスタン軍務総督を訪問したほか、広い街路をもつ市内を巡覧したが、もともと印象的であったのは公園の記念碑で、それは一人の兵士が敵壘の上に軍旗を立てている銅像であった。これを見た福島はロシアが三十年來、中央アジアの支配を着々と固めてきたことを改めて実感し、サマルカンドからタシケントまで中央アジア鉄道を延長した上で北西のオレンブルク鉄道、北東のシベリア鉄道と連結し、東進にさらなる拍車をかけるであろうことを予想した。⁽²⁸⁾

つづいて福島は中央アジア鉄道がタシケントの手前でどのようなルートをとるのかを実地を探った。先に見たようにサマルカンドからジザクまでの一〇〇キロは基礎土木工事をほぼ終えているので、そのラインは確実である。次の問題はジザクからタシケントまでの二〇〇キロがどのような形で延びていくのかという点であった。福島はタシケントから駅馬車で南東のコーカンドに赴き、そこからホジェンドを経由してジザクに戻るラインを見て回り、この三個所を結ぶ線上で鉄道敷設の基礎土木工事が終わったところが多く見られることを確認した。そこで彼はジザクから出た中央アジア鉄道がホジェンドまで進み、そこを分岐点としてタシケントに向かう線とコーカンドに向かう線の二つに分かれると予想した。⁽²⁹⁾しかしこれは外れ、実際に分岐点となったのはホジェンドではなくジザクであり、ジザクからタシケントに向けて本線、コーカンドに向けて副線が延びることになった。ホジェンドの北方には山地があり、そこを抜けてタシケントに鉄道を通すよりも、ジザクから北東に平地をたどってタシケントに向かう方が工事も楽であったらう。

いずれにしても福島は、中央アジア鉄道が北東のタシケント方面と東方のコーカンド方面に分かれて建設されることを押さえていた。タシケントの延長線上にはイリがあり、コーカンドの延長線上にはカシユガルがある。ロシアの東漸勢力が新疆におけるこの二つの要地の「夢ヲ破ル」のは数年を出ないであろうと彼は予想した。その際、ロシアは新疆に住むドンガン人を利用するだろうと福島は考えていた。清朝に宿怨を抱くムスリムのドンガン人はロシアから兵器弾薬を調達されれば反乱を起こすと言っており、そのドンガン人をロシアは厚遇しているというのである。中央アジア鉄道でタシケントやコーカンドに軍事力を集結させたロシアは、新疆でドンガン人の蜂起を煽動した上で出兵し、新疆を併呑するのではないかというのが彼の読みであったと考えられる。

サマルカンドからも来た鉄路を戻する形で軍用列車に乗った福島は、ブハラで途中下車をした。⁽²⁰⁾ブハラ・ハン国はロシアの保護国であり、汽車を降りた彼はまず新市街（新ブハラ）のロシア公使館を訪れ、公使が案内に付けた下級官吏一人とともに馬車で一三キロほど先にある旧市街（旧ブハラ）に向かった。官吏は現地雇いの人物であったため言葉が通じないため、ホテルに行ってロシア語のできるモンゴル系の人物を雇って市場、寺院、獄舎などを回り、またブハラの兵営⁽²¹⁾および砲廠（火砲の工場）などを見学した。「凡ソ耳目ニ触ル、者、一トシテ慨歎ノ種ナカラサルハナシ」であったというから、ロシアの進出が着実に進んでいる、あるいはブハラの人々にロシアを押し返す力がないことを実感したのではないだろうか。なお二日目の夜はロシア公使の晩餐に招かれ、書記官、訳官、新ブハラの司令官（キルギス人の陸軍中佐）などと会食を行っている。⁽²²⁾

ブハラから再び汽車に乗った福島は、夜間メルヴ（現マル）を通過したが、本来ここは注目すべきスポットであった。メルヴはパンジエ紛争以来、ロシアの軍事拠点として知られるだけでなく、当時そこから南のアフガニスタン国境に接したクシユク（またはクシユカ、現セルヘタバット）まで鉄道支線を通す計画があり、それが実現すればアフ

ガニスタンのヘラートはロシア軍にとつて至近距離となる。実際にこの支線は五年後の一九〇一年に開通するが、そうした状況を警戒する福島にとつて、メルヴは視察対象となつてしかるべき場所であつた。しかもベルリン駐在以来の知己であるロシア陸軍のチェルピツキー少将が同地に赴任しており、「簡単無邪気、友情ニ厚キ一武人」である少将は、福島がメルヴを訪れたら自宅に招待し、部隊の対抗演習を見せることを約束していた。しかし福島は東アジア、中央アジアの雲行きが怪しい現在、自分が訪問すれば少将に板挟みのわずらいを及ぼすことになるという理由からメルヴ滞在は見合わせたといふ。⁽²⁰⁾

メルヴを通り過ぎた福島は再びペルシャに入国するため、国境近くのアシガバートで下車した。アシガバートはザカスピ州の州都で、アレクセイ・N・クロパトキン中将 (Aleksai Nikolavich Kurapatkin) がこの地域の総督兼軍司令官をつとめ、軍用鉄道の本部も置かれていた。福島が訪ねた際、クロパトキン中将は鉄道線巡視のため不在であつたが、参謀部の手配でそこから国境を越えてペルシャのマシユハドに至るまでの馬車を用意することができた。またペルシャ領事より沿道宿駅あての文書を発行してもらつた。⁽²¹⁾

アシガバートを出発した福島は、四五キロほどでロシア領トルキスタンとペルシャの国境にさしかつた。約一ヶ月余り前にテヘランを出発した後、ペルシャ北部の西寄りの国境地帯はすでに見ていたので、今度は東寄りの国境地帯を吟味しようというのである。とくにここは中央アジア鉄道を中心拠点であるアシガバートより至近の距離にあるため、ロシア南侵のルートになる可能性が高く、十分な検証が必要であつた。

福島の見たところ、国境線に通じるロシア側の道路はよく整備されていたが、電線は設置されておらず、騎兵が連絡にあつてた。ロシア領最後の宿駅に郵便局と税関があり、税関には南北二面に関門が設けられていた。また国境警備のため騎兵一小隊が駐屯しており、税関を通過して山を登っていくと右側に兵営、さらに進んで左側に石造りの

小保堡があり、これが国境最前線の陣地であった。そこから二キロ余りでロシア・ペルシャ国境の山頂に着いたが、以上のようにロシア側の防備は相応に固められていた。⁽²⁵⁾

山を下るとペルシャ側の税関があり、税関長は陸軍大佐の官帽をかぶり、少数の歩兵が駐屯していた。税関の真向かいにあった雑貨屋の土間を借りて宿泊したが、翌朝出発する際に見ていると、ロバを曳き、水を汲み、掃除をする者はみな兵卒であった。国境警備の兵隊が民間人の日雇いとなってアルバイトをしていたわけである。⁽²⁶⁾ 兵隊の人数と配置、その士気からいって、ペルシャ側の防備は至って甘いものであったといえる。

ペルシャ第二の都市マシユハドに着くと、英国銀行支店長の下に宿泊し、イギリス総領事から最近のロイター通信社の電報を手に入れ、ロシア領内ではほとんどわからなかった国際情勢を知ることができた。しかし福島到着の前日、マシユハド駐屯のペルシャ兵が給料未払いのため電信局を襲撃するという事件が起きていた。そこで急遽国王から支払いが命じられ、街に出た福島は国王命令に喜ぶ兵隊たちが往来に飛び出して「跳舞」している姿を目の当たりにした。ペルシャは国防どころの状況にはないことを実感した福島は、もしアシガバートのロシア軍旅団がひとたび動けば一週間以内にこのマシユハド市内を囲む城壁に迫るであろうにと嘆いた。しかもその城壁を彼が実際に検分したところ、高さはあるが薄いもので、所々が壊れたまままで修繕されておらず、単に市街の内と外を分けるだけで防御の役に立たないことがわかった。⁽²⁷⁾

マシユハドはホラーサン州の州都であり、州総督を訪問した際、五〇〇から六〇〇人の兵隊が二列になって並んでいるのが見えた。彼らは電信局を破壊した人々で、この日給料を支給され、解散の上帰郷することであった。ところがこの兵士たちは整列どころか「乱雑」に立っているだけで、軍帽をかぶっている者は一〇〇人中二、三名にすぎず、肩章は破れ軍服は裂けて見るに堪えない姿であり、「恰毛乞丐〔乞食の意〕ヲ集合セシニ異ナラス」といった

ものであった。⁽²⁰⁾

ペルシヤのデイフェンスがほとんど機能していない一方で、イギリスの浸透は巧みであった。マシユハドでは英国総領事館のすぐ近くに治療病院を設け、英軍の一等軍医が院長となつてインド人の助手を用いながら診察にあたつてゐた。患者は毎日一〇〇名を下らず、眼病と瘡毒(梅毒)の者が多かつた。無料の治療はどのような人間でも恩恵に感じるため、彼らをなじめせるのにもつとも必要な初期事業の一つであるうと福島は感心した。⁽²¹⁾ イギリスはペルシヤ南部だけでなく、ロシア優勢の北部においても進出のための地道な努力を行つていたわけである。

マシユハドを出発した福島は十日間、約九六〇キロを騎馬で進み、テヘランに帰着した。⁽²²⁾ 再びテヘランに一ヶ月弱滞在した彼がとくに親密にしたのは、オーストリアハハンガリー軍事派遣団のヴァーグナー・フォン・ヴェッターシユテート中将 (Wagner von Westerfädt, Karl Walther) である。ペルシヤ政府は軍隊の近代化をまったく怠つてゐたわけではなく、前に触れたようにロシアよりペルシヤ・コサツクの教官四名、ドイツより士官学校の教官二名を招聘し、そのほかにオーストリアからヴァーグナー中将、フランスから軍楽隊長を招いてゐた。とくにヴァーグナー中将は軍事派遣団の一員としてペルシヤに来てから十数年の経験があり、国王から信頼され、ペルシヤ・コサツクを除いたテヘラン駐屯軍の指導にあつてゐた。⁽²³⁾

福島はヴァーグナー中将より各国武官を紹介されて人脈を広げることができ、「將軍ハ百事非常ノ尽力ヲ為シ、最モ安正ニ便利ヲ与ヘシ人ナリ」と強く感謝してゐた。⁽²⁴⁾ あるときヴァーグナーの好意でペルシヤ軍の訓練を見ることができたが、中将長年の指導にもかかわらず、それは悲惨なものであつた。歩兵は姿勢が整わず隊列は乱雑で、下士、兵卒とも談笑して号令はほとんど耳に入らないという有様で、将校は自分には関係ないという態度であり、その中をヴァーグナー一人が「火ノ如クナリテ奔走叱咤スルノミ」であつた。「全く秩序ナク、軍紀地ヲ払テ去レリ。中将ノ

屢々軍刀ヲ地ニ投シテ慨歎スルヲ見タリ」。砲兵に至つては演習中に馬が倒れ、曳綱が切れ、車輪が壊れて鉄釘が抜け、一層の混乱をきたした。聞くところでは、馬の飼料を司令長官が着服するため砲兵には一馬も存在しない状態であったが、最近やむをえず訓練のために新馬を購入してこの日はじめて演習に用いたところ、このような事態になった⁽²⁸⁾という。

それ以外の機会に見たベルシヤ軍も似たような様子であった。ある練兵での分列式は列や歩調が不ぞろいで「幾ント兎戯ニ類スル」ものであった。また国王が行幸先から帰った際、街路に整列して出迎えた兵士たちは国王が騎馬で通過した後、兵營に帰る段になると「隊列頗ル乱雜ヲ極ム」有様で、将校が注意すると大声で反抗し、中には自分の部隊が雲散して剣を握つたまま呆然とする将校すらいた。また別の練兵でヴァーグナー中將が時間を延長して訓練を行おうとすると、ベルシヤ人の司令長官は不同意を唱えて激しい言い争いになった。司令長官は縁故でその地位に就いたため兵事の理解はなく、時々練兵場に来て傍観するような人物であり、この様を見た福島は暗澹たる気分になった⁽²⁹⁾。ベルシヤ国内で同じような情景をくり返し見てきた福島は、同国がロシアの南進を食い止めるのは不可能であると断定したはずである。

ベルシヤでの調査を終えた福島は、一八九六（明治二十九）年十月末にテヘランを出立して十一月オスマン帝国領アラビア（現イラク）に入り、バグダードから汽船でティグリス川を下ってバスラ経由でベルシヤ湾に出た。その過程で彼が印象づけられたものの一つはベルシヤにおけるのと同様、イスラーム教の影響力の大きさであった。ベルシヤ国境を越えてバグダードに向かう際、福島は多数の巡礼者に出会った。彼らはバグダードの南西にあるイスラーム教シーア派の聖地カルバラに赴く人々で、縁者の遺体を霊地に埋葬しようと各グループが数体の遺骸を運んでいた。夕方、福島が隊商館に宿泊するとあたりに巡礼者も群集したため、馬やラバにつけた鈴の音が鳴り響き、遺体の

悪臭が室内に入って終夜眠ることができなかった。さらに聖地カルバラに近づくにしたがってますます巡礼者の行き来が盛んとなり、彼らは「シユマーシユドワー」（我為メニ冥福ヲ祈レ）と唱えながら男性は男性、女性は女性の手握つては去つて行き、福島も否応なしに何十回となく手握られた。そうした巡礼者の旅行は日本の善光寺参りなどと違って困難や危険をとめない、その数が毎年五、六〇万から一〇〇万に達するというのは実に驚くばかりであると福島は記している。「宗教熱ノ甚シキ、本邦人ノ如キ別ニ奉スル所アル者ノ想像シ能ハサル所ナリ」。ただしそうした宗教熱がトルコ、ペルシャなど回教国の近代化が進まない一大原因であると彼は結論づけている。²⁸⁾

バグダードは軍事的にはオスマン帝国第六軍団の司令部が置かれ、歩騎砲工輜重の各兵が揃つており、ロシアが南侵した場合にトルコ東部を管轄する第四軍団を南から後援する形になっていた。また商業的にはティグリス川の水運を利用できるため貿易の中心地として「頗ル繁盛」していた。欧米各国が領事館を開いていたが、中でもペルシャ湾の利権を抑えるイギリスの商業的勢力が圧倒的に強く、オスマン朝政府が所有する老朽船を尻目に英国企業が汽船を盛んに運行して貨物運搬の利益を独占していた。ペルシャもオスマン帝国領アラビアも、ペルシャ湾に近い南部ではイギリスの影響力を無視することはできなかった。

ティグリス川を下りバスラを経てペルシャ湾に出た福島は、その後シャムに立ち寄り、仏領インドシナでの視察を行った上で、一八九七（明治三十）年三月末に帰国した。こうして一年半にわたる亜欧旅行は終了したが、彼自身その中でもっとも有益であったのはペルシャ、ついでコーカサスおよび中央アジアであったと述べている。また旅行全体を通じて各国の実力を研究するためには、現地の人々に接してその人情風俗を詳しく観察し、内外の有力者と交わつて意見を聞き、談論することがもつとも必要（有用）であったという。²⁹⁾ 福島の調査は身分を偽装してのスパイ活動ではなく公然手段によるものであったが、現地に足を運び、自分の目で見ることによって、その国の国力を肌で感じ取

ることができた。

ただしイギリスやロシアの当局者に対して福島がインテリジェンス・オフィサーであることは隠しようがなく、とくに日清戦争後、日本の世界的地位が向上するにともない、彼がいかなる情報活動をしているかという点はそれまで以上に先方の関心・警戒対象になったであろう。そのためであろうか、中央アジアを旅行中の福島はかねてから知り合いのロシア軍人に不自然な形で遭遇している。

たとえばカスピ海を横断してウズン・アダに上陸するや、ベルリン駐在時代に親しくなったロシア陸軍のチエルピツキー少将に出会った。この少将は先に触れたように、自分が赴任しているメルヴを福島が訪れたら自宅に招待し、部隊の対抗演習を見せることを約束した人物である。福島は東アジア、中央アジア情勢が不穏なときに少将を訪問すれば彼を板挟みにするという理由から、結局メルヴ滞在を見合わせたという。しかし少将との意外なタイミングでの「奇遇」に福島自身、違和感をもち、警戒心を抱いたということはなかったであろうか。ちなみに少将は福島のウズン・アダ到着をブハラ(20)のロシア公使に伝え、公使は福島がやって来るのを待っていた。

さらに福島がブハラを出発する際、新ブハラ(20)の停車場で旧知の騎兵大尉に出会った。彼は以前サンクトペテルブルクで知り合った人物で、このときはブハラから約三〇〇キロ南にあるアフガニスタン国境近くのケルキに中隊長として赴任していた。福島はこの大尉と一緒に汽車に乗って短い話をしたが、その内容は福島に便宜を与えたものが少なくなかったという。以上のチエルピツキー少将と騎兵大尉は福島と本当に偶然に出会ったのか、それとも意図的にかつたのかは不明であるが、ロシア軍当局が彼らを通じて福島の情報活動を探ろうとした可能性があることは一言しておきたい。

以上、本章では福島の亜欧旅行を検証したが、その要点を整理しておきたい。第一にエジプトを訪れた福島は、ヨー

ロツパ、アジア、アフリカ三大陸の外交政略の交差点となるカイロに日本の総領事館、スエズ運河を監視するためにポートサイドに領事館、同様にヨーロッパ、アジアの勢力が交差するコンスタンティノープルに公使館を置くことを提案した。

第二にオスマン帝国の首都コンスタンティノープルを再訪した彼は、政府と軍部が前回にも増して腐敗していると観察し、帝国が崩壊するのは時間の問題であると判断した。その際、ロシアがトルコに南進する可能性が予想されたが、欧州列強やロシアがトルコ問題に専心すればそれだけ東アジアに余裕が生まれるため、ロシア南下は日本にとって不安材料ではなく、むしろ望ましいこととされた。

第三に英領インドを再訪した福島は、前回見る事ができなかった南西部のアフガニスタンとの国境沿いにおける英領インド軍の防備状況を視察した。前進基地のクエッタ、最前線哨所のチャマンのどちらにおいても英領インド軍はよく整備され、用意は周到であった。しかし福島は、アフガニスタンをめぐる英露危機が生じた場合、ロシアの方が中央アジア鉄道を使って多数の兵を動員できるため有利であると判断し、イギリスはロシアのアフガニスタン侵攻を抑止することはできないとの結論に至った。

第四にペルシャを旅行した彼は、官民ともに「腐敗墮落」がきわまっていると観察し、軍隊はロシアが掌握するテヘラン駐屯のペルシャ・コサック以外に存在しないも同様であると考えた。それでもペルシャがかるうじて独立を維持していられるのはイギリス、ロシアの勢力の中間に位置しているからにすぎず、今後状況によってペルシャは英露両国に分割される可能性があり、「波斯ノ命運実ニ危険ナリト謂フヘシ」との結論を下した。

第五にロシア領のコーカサス、カスピ海、中央アジアを視察した福島は、まずロシアのコーカサス支配の中心地ティリスとコーカサス横断鉄道的一端を突見した。次に中央アジア鉄道の開通区間（ウズン・アダからサマルカンド）

に実際に乗車し、さらに駅馬車でタシケント、コーカンドまで赴いて延長予定の地域を踏査した。調査の結果、彼はタシケントまでの全通は二年後であろうと予測し、その見込みは的中した。またジザク―ホジェンド―コーカンド間で鉄道敷設のための基礎土木工事が終了したところが多く見られることも確認し、数年以内にロシアはタシケント、コーカンドを拠点として新疆のイリ、カシユガルに圧力を及ぼすようになるだろうと予想した。

第六に中央アジアから再びペルシヤに入った彼は、ロシア領トルキスタンとペルシヤ北部東寄りの国境地帯においてロシア側の防備が相応に固められている一方で、ペルシヤ側の防備が至って甘いことを確かめた。さらにマシユハドでは給料未払いによる兵士の暴動が起き、テヘランで見学した教練においてもペルシヤ軍は軍隊としての体をなしておらず、ロシアの南進を食い止めるのは不可能な状況であった。

このように福島は、ロシアが中央アジア鉄道を通じてペルシヤ、アフガニスタンに南侵し、新疆にも東進する可能性があることを想定した。いずれの場合も中央アジア鉄道がロシアのパワーを東方に伝える伝導線であり、これらの危機が現実のものとなればロシアの勢力東漸の波動はさらに東アジアにも伝わるであろうと福島は見ていたと考えられる。ペルシヤ、ロシア領中央アジア、アフガニスタン、新疆は、やがてロシアのパワーを東アジアに及ぼすことになる危機の前線と捉えられたのである。

おわりに

本稿は一八八六（明治十九）年から一八九六（明治二十九）年にかけて、福島がユーラシア大陸で行った四つの視察旅行を検証した。すなわち、①英領インド調査、②バルカン半島視察、③シベリア単騎横断旅行、④亜欧旅行（と

くにペルシャと中央アジア)である。これらを通観した上で以下の結論を指摘したい。

第一に福島の視野の広さである。たとえばベルリンに駐在したときは、任地のドイツ軍や独露国境地帯のロシア軍の兵力を調べるとともに、ロシアの中央アジア鉄道、シベリア鉄道建設に注目してその動きを追うなど、彼はユーラシア大陸全体に目を配っていた。

第二にヨーロッパ、中近東、中央アジア、インド、新疆、モンゴル、シベリアをめぐるロシアの動向を、東アジア、日本とリンクさせながら地政学的に観察していることである。地域ごとの動きを単体で見るとはなく、ユーラシア大陸という大きなチェスボード全体を見渡しながら、ロシアの黒海・中近東、アフガニスタン、北東アジアへの南下の動きを総合的、有機的に捉えていたということである。

第三にインド調査を除く三つの旅行を自分で企画・提案し、実行したことである。その際、一つの旅行が次の課題を生み、さらに新たな旅行へとつながっていった。最初のインド調査では、北西辺境州における英領インド軍の防備はきちんとなされているが、中央アジア鉄道建設で攻勢をかけるロシアのアフガニスタン南下を阻止するには万全のものとはいえないと判断した。次にベルリン駐在時代は、西欧、中欧でドイツ、オーストリア・ハンガリーの防備が固いためロシアは西進できないが、その分バルカン半島方面に南進するのではないかと考え、実際にバルカン半島を視察した。その結果、バルカン諸国のデیفュンス体制はおおむね機能しているが、オスマン帝国(とくに現トルコ)のみが脆弱であることがわかった。さらにロシアのシベリア鉄道、中央アジア鉄道建設に危惧を抱く福島は、シベリア単騎横断でシベリア鉄道付近を踏破し、またモンゴル、北滿洲の脆弱性も確認した。さらに亜欧旅行で英領インドの南西部国境地帯を検分し、英領インド軍の防備はきちんとなされているが、やはり中央アジア鉄道建設を進めるロシアの南下を阻止する上では万全ではないと判断した。加えて同鉄道の建設現場を踏査し、将来タシケントやコー

カンドに軍事力を集結させたロシアが新疆に圧力をかけるようになる予測した。

第四にこのようにして福島は、ロシアをその南部周縁部から監視するラインを創造していった。すなわちトルコ―ベルシャ―中央アジア、モンゴル―満洲―シベリアのラインである。この監視線は福島が自発的にビジョンを描き、自らの足を使いながらクリエイトしたものであった。その萌芽は遅くともバルカン半島視察の際、ソフィア滞在時の一八八九（明治二十二）年十二月に見ることができ、そのとき彼は次のように地名を列挙したメモを残している。⁽⁴¹⁾

小亜細亞　波斯　亜富汗　中央亜細亞　新疆　伊犁　西比利亞　滿洲　蒙古　支那

右の地名は明らかにロシア南下のターゲットとなる国・地域であり、そうしたロシアの動きを警戒する側からいえば、逆にロシアの膨張をその南部外縁地域からチェックする監視線を形成するものである。このチェーンに沿ってロシアの動向を観察し、場合によっては勢力拡大を阻止しなければならないという主旨のメモであろう。

以後、このロシア監視ラインの視点が陸軍情報部の伝統になったのではないかと考えられる。たとえば一九二三（大正十二）年、インド駐在武官をつとめ、日本人初のアフガニスタン訪問を終えて帰国した後の谷寿夫中佐が、コーカサス―トルコ―ベルシャ―アフガニスタン―チベット―新疆のラインに「南部露国方面ノ情況諜知」拠点を構築することを提案している。⁽⁴²⁾このような発想が一九三〇年代に昭和陸軍の「防共回廊」構想へとつながっていくことになる。⁽⁴³⁾

以上の結論をふまえた上で、最後に二つの点に言及しておきたい。第一はインテリジェンス・サイクルの問題である。本稿で扱った福島のユーラシア大陸旅行は、政策決定者からの要求にもとづき情報を収集し、それを評価、分析して配布するというインテリジェンス・サイクルにはあてはまらないものであった。先に述べたように、四つの旅行

のうち三つは彼自身が企画、提案、実行したもので、その報告書に見られるように情報収集、評価分析も福島自身の手によってなされた。当時の陸軍参謀本部では少なくとも福島の情報活動に関する限り、現代でいうインテリジェンス・サイクルというものは機能していなかった。

またそれと合わせて述べておきたいのは、福島の情報活動の成果がどこまで陸軍上層部や日本政府に取り上げられ、政策決定に生かされたかという問題である。資料的な制約からこれを検証するのは難しいが、一八九〇年代に福島がロシアをその南部外縁地域から監視するラインを創造したにもかかわらず、一九二三年に谷寿夫が同様のものを提案しているということは、その間三十年近くにわたってそうした対露監視網が制度化されていなかったということである。福島が各地で集めた情報はそれなりに生かされたのかもしれないが、彼が創り出したグローバルな監視ネットワークのイメージを十分実現、確立するところまでには至らなかったわけである。比較的早くから将校を派遣した新疆やコンスタンティノーブルなどは別として、ペルシャやアフガニスタンにまで公使館を設けて武官を置くのは、福島が退役してからずっと後のことになった。

第二は日英同盟の問題である。福島は一九〇二（明治三十五）年の日英同盟協約締結後、そこから派生して日英軍事協商が成立したとき日本陸軍の代表をつとめた。その際、彼はイギリス陸軍情報機関のトップに会って強い信頼関係を結び、この日英軍事協商が日本陸軍にとって対露決戦に踏み切る最大のバックボーンとなった。⁽⁴⁴⁾ こうした後年の福島の仕事を考える場合、その前段階としてユーラシア大陸旅行時に日英同盟に向けての心理的準備が進んでいたことは見逃せない。

第一回目の英領インド調査を終えた直後、一八八六（明治十九）年に福島が「我国ニ於テモ真ノ文明強國トナルマデハ、魯ニ対シ英ト結フヲ得策トス」として、日英同盟構想の萌芽を示したことはすでに記したとおりである。ただ

し彼がそこからストレートに日英同盟推進論者になったというわけではない。一八九三（明治二十六年）年六月末にシベリア単騎横断旅行から帰国して間もないころの福島は、イギリスは難を捨てて易を取り己れを利するのが得意な国なので、東洋で戦争が起きてロシアと戦うことはなく、逆にロシアが占領した地域との間に「平均」「パワーバランス」を取ると称して別の地域を蚕食するであろう、したがって日本が「魯ト兵端ヲ啓クノ日ハ英モ亦タ敵ナリ」としている⁽²⁶⁾。つまりイギリスはロシアよりも脅威度が低いだけで、あくまで仮想敵国の一つであった。

しかしその一方で、英領インドはもとよりヨーロッパ、バルカン半島、エジプト、オスマン帝国、ベルシヤなどを回る中で福島がもつとも親しく交際したのはイギリスの外交官（公使、領事）、武官、軍人、あるいは銀行支店長、通信員、電信技士などの民間人であった。イギリス帝国が世界中に人材を派遣して情報拠点をもつ以上、そこにつてを求めるのは自然な成り行きであり、イギリス側も後の時代ほど日本を警戒していなかったこともあって、比較的オーブンに彼を迎え入れた。

また一八九五（明治二十八年）年の日清戦争終了後、亜欧旅行の途上で香港に寄港した福島は、同地の石炭が概して日本からの輸入に依存しており、それをコントロールすることによってロシア艦隊の石炭補給に打撃を与え得ることに気がついた。日本以外の石炭産地はオーストラリアであるため、「仮令英カ我ニ同盟セサルマテモ厳正中立ヲ為サハ、我ニ益スル所ハ実ニ巨大ナルヘシ」と彼は記している⁽²⁶⁾。ウラジオストクをめざして北上するロシア艦隊が香港で石炭を搭載する際、イギリスの動きを利用してより効果的な妨害を行うという発想である。

同じく亜欧旅行中の福島は、日清戦争後のイギリスが日本に友好的になったことに気がついた。エジプトのカイロで彼は、独露仏の要人が日清戦争に触れない一方で、「英国軍人等ハ到ル処、非常ノ好意ヲ表シ、談話将来ノ佳境ニ入ル事多シ」と述べている⁽²⁶⁾。戦勝による日本の地位向上にともない、イギリス側に日本接近のムードが生じ始めたこと

がうかがえる。さらにコンスタンティノーブルでの彼は次のようにいう。

……日本ト連合スルノ他日最モ必要ナルヲ感スルハ英国官民一般ノ傾向ナリ。我帝国ニシテ此感情ヲ利用シ、最モ親密ノ情勢ヲ表示スル時ハ、魯仏ノ暴ト雖トモ容易ニ東洋ニ向テ其慾ヲ逞フスル事能ハサルヘシ。今ヤ陸海軍ヲ拡張シ、益々国威ヲ伸発スルノ時ニ当テ最モ顧慮スヘキハ、他国ノ加ントスル妨害ナリ。英伊ノ両国ト好意ヲ結フハ、少クモ此妨害ヲ避ルニ於テ非常ノ便利ヲ得ル事ト確信ス。⁽²⁸⁾

イギリス官民は将来日本と連合するの必要を感じており、日本もその感情を利用してイギリスと親密であることをアピールすれば、東アジアにおけるロシア、フランスの野心を抑制できるというのである。イギリスを利用してロシアを抑えるという発想がより明確に表れていることがわかる。国家の運命を決定する一大事にあたってイギリスの好意を当てにすることはできないが、同国を「出来得ル限り味方ニ引付け置ク事、是又実ニ今日ノ急務ナラン」と福島は強調している⁽²⁹⁾。実際のところ彼はインドやビルマを植民地化したイギリスを心の底では信用しておらず、先述のように日本の仮想敵国の一つに想定していたが、第一の脅威であるロシアに対処するために当面イギリスを利用することが必要だと考えたのである。

以上のように一八八六年から九六年にかけてのユーラシア大陸旅行、中でも一八九五年の日清戦争終了後の亜欧旅行を通じて、福島はロシア抑止のための日英提携（正確にはイギリス利用）を考えていた。そういう意味で四度にわたる調査視察は、彼が日英同盟協約、日英軍事協商に向かつて行く道筋を形成するものでもあったわけである。

付 録

【表1 英領インド軍兵種】

| 騎 砲 兵 | 野 砲 兵 | 城塞砲兵 | インド軍 山 砲 兵 | 工 兵 | 英軍騎兵 | インド軍 騎 兵 | 英軍歩兵 | インド軍 歩 兵 |
|-------|-------|-------|---------------|-------|------|---------------|-------|-------------|
| 11 中隊 | 54 中隊 | 17 中隊 | 11 中隊 | 24 中隊 | 9 連隊 | 44 連隊 八分の一 | 52 連隊 | 129 連隊 |

註：「印度報告」第12号（西摩拉第八報告1886年6月28日）『印度紀行』所収、95-96頁より作成。

インド軍騎兵「44連隊」の下に「八分の一」とやや小さい文字で記されている。44連隊+（44連隊×8分の1=5.5連隊）の意味であろうか。

【表2 英軍兵数】

| | 砲 兵 | 工 兵 | 騎 兵 | 歩 兵 | 合 計 |
|---------|---------|------|--------|---------|---------|
| 将 校 | 399人 | 3人 | 168人 | 1,228人 | 1,798人 |
| 下 士 卒 | 11,795人 | 163人 | 4,661人 | 48,940人 | 65,559人 |
| 軍 馬 | 6,648頭 | | 3,744頭 | | 10,392頭 |
| 軍 騾（ラバ） | 817頭 | | | | 817頭 |
| 大 砲 | 394門 | | | | 394門 |

註：「印度報告」第12号（西摩拉第八報告1886年6月28日）『印度紀行』所収、96-97頁より作成。

【表3 インド軍兵数】

| | 砲 兵 | 工 兵 | 騎 兵 | 歩 兵 | 合 計 |
|----------------------|--------|--------|---------|----------|----------|
| 英 人 将 校 | 38人 | 54人 | 378人 | 1,105人 | 1,575人 |
| 英 人 下 士 | | 123人 | | | 123人 |
| イ ン ド 人 将 校・下 士 卒 | 2,071人 | 3,050人 | 25,426人 | 109,440人 | 139,987人 |
| 軍 馬 | 299頭 | | 24,537頭 | | 24,836頭 |
| 軍 騾（ラバ） | 668頭 | | | | 668頭 |
| 大 砲 | 58門 | | | | 58門 |

註：「印度報告」第12号（西摩拉第八報告1886年6月28日）『印度紀行』所収、97-99頁より作成。

表2、表3に示されている数値から計算すると英人将校の合計は3,373人となるが、『印度紀行』99頁、あるいは『印度形勢摘要』上巻には同じ合計が3,316人とする記述もある。同様に英軍の下士卒とインド軍の将校・下士卒の合計は205,669人となるが、前記二つの文献には202,232人とする記述もある。そうした多少の誤差を考慮に入れる必要がある。

【表 4 輜重手段】

| | | | | | | |
|-------|-------|---------|---------|---------|-------|-------|
| 象 | 官有駱駝 | 備役駱駝 | 騾馬 | 駄牛 | 重車 | 軽車 |
| 520 頭 | 627 頭 | 2,429 頭 | 8,412 頭 | 1,160 頭 | 860 輛 | 426 輛 |
| シルダル | | メーツ | | 役夫 | | 小舟 |
| 11 人 | | 22 人 | | 568 人 | | 6 隻 |

註：「印度報告」第 12 号（西摩拉第八報告 1886 年 6 月 28 日）『印度紀行』所収、99-100 頁より作成。

シルダル、メーツ、役夫は、インド東北国境において車馬の運輸に困難な地方に特設した輪卒隊。

なお、ここで示されたのは平時の輜重手段であり、これによって輸送できる物資の重量は 398 万 8,080 ポンドで、有事の際は徴発を行うため、二週間以内にその 11 倍にあたる 4,294 万 4,640 ポンドの物資輸送が可能であった（同上、100-101 頁）。

【表 5 上ビルマ駐留英領インド軍兵数】

| | | | | | |
|----|------|--------|-------|--------|--------|
| 兵種 | 英軍砲兵 | インド軍騎兵 | 英軍歩兵 | インド軍歩兵 | 合計 |
| 現員 | 541 | 320 | 2,317 | 8,646 | 11,824 |
| 疾弱 | 56 | 15 | 307 | 404 | 782 |
| 不在 | | | | 23 | 23 |
| 合計 | 597 | 335 | 2,624 | 9,073 | 12,619 |

出典：「印度報告」第 12 号（西摩拉第八報告 1886 年 6 月 28 日）『印度紀行』所収、102 頁。

【表 6 ポーランド駐屯ロシア軍兵数】

| | | | | | | |
|--------------|---------------------------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|---------------------------------|---------------------------------------|
| 兵種 | 第五軍団 (ワルシャワ) | 第六軍団 (ワルシャワ) | 第十四軍団 (ルブリン) | 第十五軍団 (ワルシャワ) | 軍務総督 直轄諸兵 | 計 |
| 歩兵 | 12 連隊 (48 大隊) 2万 2,656 人 | 8 連隊 (32 大隊) 1万 5,104 人 | 8 連隊 (32 大隊) 1万 5,104 人 | 8 連隊 (32 大隊) 1万 5,104 人 | | 36 連隊 (144 大隊) 6万 7,968 人 |
| 騎兵 | 6 連隊 (36 中隊) 6,390 人 | 4 連隊 (24 中隊) 4,260 人 | 4 連隊 (24 中隊) 4,260 人 | 4 連隊 (24 中隊) 4,260 人 | 4 連隊 1 大隊 (26 中隊) 4,615 人 | 22 連隊 1 大隊 (134 中隊) 2万 3,785 人 |
| 野戦砲兵 (野砲) | 3 旅団 (18 中隊) 3,222 人 (348 門) | 2 旅団 (12 中隊) 2,184 人 (92 門) | 2 旅団 (12 中隊) 2,184 人 (92 門) | 2 旅団 (12 中隊) 2,184 人 (92 門) | | 9 旅団 (54 中隊) 9,774 人 (624 門) |

福島安正のユーラシア大陸旅行

| | | | | | | |
|------------------|-------------------------|-------------------------|-------------------------|-------------------------|-------------------------|----------------------------|
| 騎 砲 兵 (騎 砲) | 3 中隊 516 人 (18 門) | 2 中隊 344 人 (12 門) | 2 中隊 344 人 (12 門) | 2 中隊 344 人 (12 門) | 2 中隊 344 人 (12 門) | 11 中隊 1,892 人 (66 門) |
| 要 塞 砲 兵 | | | | | 20 大隊 2万 6,660 人 | 20 大隊 2万 6,660 人 |
| 狙 兵 | | | | | 16 大隊 9,696 人 | 16 大隊 9,696 人 |
| 銃 兵 | | | | | 3 大隊 1,938 人 | 3 大隊 1,938 人 |
| 軍 橋 兵 | | | | | 2 大隊 786 人 | 2 大隊 786 人 |
| 野戦電信兵 | | | | | 3 大隊 816 人 | 3 大隊 816 人 |
| 輜重幹部兵 | | | | | 1 大隊 390 人 | 1 大隊 390 人 |
| 乗馬憲兵 | | | | | 1 中隊 173 人 | 1 中隊 173 人 |
| 計 | 3万 2,784人 | 2万 1,892人 | 2万 1,892人 | 2万 1,892人 | 4万 5,418人 | 14万 3,878人 |

註：福島安正「単騎遠征報告 第二」『単騎遠征報告 第一 第二』（防研、文庫 - 千代田史料 -221）所収、26-33 頁より作成。

【表 7-1 ロシア陸軍兵数】

| | 平 時 | 戦 時 |
|-----------------|--|--|
| ①野戦軍 | | |
| 歩兵 | | |
| 歩兵 | 192 連隊 (768 大隊) (将校 70 人 × 192 連隊 = 1 万 3,440 人) (下士卒 1,818 人 × 192 連隊 = 34 万 9,056 人) | 192 連隊 (768 大隊) (将校 79 人 × 192 連隊 = 1 万 5,168 人) (下士卒 3,870 人 × 192 連隊 = 74 万 3,040 人) |
| 狙兵(狙撃兵) | 20 連隊 (40 大隊) (将校 33 人 × 20 連隊 = 660 人) (下士卒 1,179 人 × 20 連隊 = 2 万 3,580 人) | 20 連隊 (40 大隊) (将校 35 人 × 20 連隊 = 700 人) (下士卒 1,909 人 × 20 連隊 = 3 万 8,180 人) |
| 狙兵(狙撃兵) 独立大隊 | 42 大隊半 (将校 19 人 × 42 大隊半 = 807 人) (下士卒 448 人 × 42 大隊半 = 1 万 9,040 人) | 43 大隊 4 分の 1 (将校 21 人 × 43 大隊 4 分の 1 = 908 人) (下士卒 961 人 × 43 大隊 4 分の 1 = 4 万 1,563 人) |

福島安正のユーラシア大陸旅行

| | | |
|-------------|--|--|
| 歩兵独立大隊 | 36 大隊 トルキスタン (20 大隊) (将校 21 人×20 大隊=420 人) (下士卒 693 人×20 大隊=1 万 3,860 人) シベリア (16 大隊) (将校 一) (下士卒 一) | 36 大隊 トルキスタン (20 大隊) (将校 21 人×20 大隊=420 人) (下士卒 961 人×20 大隊=1 万 9,220 人) シベリア (16 大隊) (将校 一) (下士卒 一) |
| コサック歩兵大隊 | 6 大隊と 1 中隊 (将校 56 人) (下士卒 1,821 人) | 18 大隊と 6 中隊 (将校 47 人) (下士卒 1,826 人) |
| 小計 | 892 大隊 4 分の 3 | 906 大隊 4 分の 1 |
| 騎兵 | | |
| 騎兵 | 57 連隊半と 6 中隊 (345 中隊) (将校 38 人×57 連隊半と 6 中隊=2,223 人) (下士卒 1,027 人×57 連隊半と 6 中隊=6 万 0,079 人) | 58 連隊と 9 中隊 (349 中隊) (将校 36 人×58 連隊と 9 中隊=2,142 人) (下士卒 920 人×58 連隊と 9 中隊=5 万 4,740 人) |
| コサック騎兵 | 49 連隊半と 8 中隊 (286 中隊) (将校 492 人) (下士卒 1 万 1,266 人) | 145 連隊と 37 中隊 (868 中隊) (将校 360 人) (下士卒 1 万 2,983 人) |
| 小計 | 631 中隊 | 1,217 中隊 |
| 砲兵 | | |
| 野戦砲兵 野戦砲 | 51 旅団と 4 中隊 290 中隊 (将校 12 人×290 中隊=3,480 人) (下士卒 362 人×290 中隊=10 万 4,980 人) | 51 旅団 290 中隊 (将校 12 人×290 中隊=3,480 人) (下士卒 442 人×290 中隊=12 万 8,180 人) |
| 山砲 | 19 中隊 (将校 6 人×19 中隊=114 人) (下士卒 137 人×19 中隊=2,603 人) | 22 中隊 (将校 6 人×22 中隊=132 人) (下士卒 233 人×22 中隊=5,126 人) |
| 騎砲兵中隊 | 31 中隊 (将校 5 人×31 中隊=155 人) (下士卒 167 人×31 中隊=5,177 人) | 31 中隊 (将校 5 人×31 中隊=155 人) (下士卒 180 人×31 中隊=5,580 人) |
| コサック騎砲兵中隊 | 20 中隊 (将校 5 人×20 中隊=100 人) (下士卒 167 人×20 中隊=3,340 人) | 38 中隊 ドン・コサック軍騎砲兵 (将校 5 人×22 中隊=110 人) (下士卒 180 人×22 中隊=3,960 人) オレンブルク・コサック軍騎砲兵 (将校 5 人×6 中隊=30 人) (下士卒 180 人×6 中隊=1,080 人) |

福島安正のユーラシア大陸旅行

| | | |
|-------------|--|--|
| | | *その他のクバン (5 中隊), テレック (2 中隊), トランス・バイカル (3 中隊) の各コサック軍の騎砲兵中隊には, 補充 1 小隊が付くため人員の比率がやや高くなる。 |
| 白砲兵 | 2 連隊 (8 中隊) (将校 25 人 × 2 連隊 = 50 人) (下士卒 689 人 × 2 連隊 = 1,378 人) | 2 連隊 (8 中隊) (将校 25 人 × 2 連隊 = 50 人) (下士卒 862 人 × 2 連隊 = 1,724 人) |
| 小計 | 368 中隊 | 389 中隊 |
| その他 | | |
| 鉞兵大隊 | 17 大隊 (将校 26 人 × 17 大隊 = 442 人) (下士卒 620 人 × 17 大隊 = 1 万 0,540 人) | 17 大隊 (将校 23 人 × 17 大隊 = 391 人) (下士卒 959 人 × 17 大隊 = 1 万 6,303 人) |
| 軍橋兵大隊 | 8 大隊 (将校 12 人 × 8 大隊 = 96 人) (下士卒 250 人 × 8 大隊 = 2,000 人) | 8 大隊 (将校 12 人 × 8 大隊 = 96 人) (下士卒 533 人 × 8 大隊 = 4,264 人) |
| 鉄道兵大隊 | 6 大隊 (将校 25 人 × 6 大隊 = 150 人) (下士卒 596 人 × 6 大隊 = 3,576 人) | 6 大隊 (将校 25 人 × 6 大隊 = 150 人) (下士卒 1,045 人 × 6 大隊 = 6,270 人) |
| 要塞水雷兵中隊 | 8 中隊 (将校 6 人 × 3 中隊 + 5 人 × 5 中隊 = 43 人) (下士卒 160 人 × 3 中隊 + 87 人 × 5 中隊 = 915 人) | 8 中隊 (将校 11 人 × 3 中隊 + 6 人 × 5 中隊 = 63 人) (下士卒 165 人 × 3 中隊 + 88 人 × 5 中隊 = 935 人) |
| 幹部輜重兵大隊 | 5 大隊 (将校 12 人 × 5 大隊 = 60 人) (下士卒 378 人 × 5 大隊 = 1,890 人) | 18 大隊 (将校 16 人 × 18 大隊 = 288 人) (下士卒 65 人 × 18 大隊 = 1,170 人) |
| ②後備軍 | | |
| 歩兵 | 8 連隊と 99 大隊 (115 大隊) ヨーロッパ・ロシア (将校 37 人 × 2 連隊 + 36 人 × 80 大隊 = 2,954 人) (下士卒 1,504 人 × 2 連隊 + 493 人 × 80 大隊 = 4 万 2,448 人) | 105 連隊と 109 大隊 (527 大隊) ヨーロッパ・ロシア (将校 63 人 × 82 連隊 + 16 人 × 82 大隊 = 6,478 人) (下士卒 3,832 人 × 82 連隊 + 958 人 × 82 大隊 = 39 万 2,780 人) |

福島安正のユーラシア大陸旅行

| | | |
|-------------|--|--|
| | <p>コーカサス (将校 36 人 × 6 連隊 + 36 人 × 12 大隊 = 648 人) (下士卒 788 人 × 2 連隊 + 988 人 × 4 連隊 + 795 人 × 6 大隊 + 799 人 × 6 大隊 = 1 万 5,092 人) アジア・ロシア (将校 一) (下士卒 一)</p> | <p>コーカサス (将校 一) (下士卒 一) アジア・ロシア (将校 一) (下士卒 一)</p> |
| 野戦砲兵 | <p>5 旅団 (20 中隊) (将校 11 人 × 20 中隊 = 220 人) (下士卒 重砲中隊 199 人または軽砲中隊 171 人 × 20 中隊)</p> | 20 旅団 (80 中隊) |
| 銃兵中隊 | | <p>34 中隊 (将校 4 人 × 34 中隊 = 136 人) (下士卒 337 人 × 34 中隊 = 1 万 1,458 人)</p> |
| 鉄道兵大隊 | | <p>3 大隊 (将校 25 人 × 3 大隊 = 75 人) (将校 1,045 人 × 3 大隊 = 3,135 人)</p> |
| ③要塞軍 | | |
| 要塞歩兵 | 1 連隊と 23 大隊 (25 大隊) | 24 連隊 (120 大隊) |
| 要塞砲兵 | <p>50 大隊と 7 中隊 (51 大隊半) (将校 13 人 × 51 大隊半 = 669 人) (下士卒 448 人 × 51 大隊半 = 2 万 3,072 人)</p> | <p>50 大隊と 7 中隊 (51 大隊半) (将校 21 人 × 51 大隊半 = 1,081 人) (下士卒 1,308 人 × 51 大隊半 = 6 万 7,362 人)</p> |
| ④補充軍 | | |
| 歩兵 | | <p>199 大隊と 9 中隊 (201 大隊) (将校 19 人 × 201 大隊 = 3,819 人) (下士卒 1,114 人 × 201 大隊 = 22 万 3,914 人)</p> |
| 後備騎兵大隊 | <p>56 大隊 (112 中隊) (将校 10 人 / 3 大隊 × 56 大隊 = 186 人) (下士卒 249 人 / 3 大隊 × 56 大隊 = 4,648 人)</p> | <p>56 大隊と 8 中隊 (120 中隊) (将校 5 人 × 112 中隊 = 560 人) (下士卒 180 人 × 112 中隊 = 2 万 0,160 人) (ドン・コサック軍, ウラル・コサック軍の 8 中隊の人数は未記載)</p> |
| 後備砲兵中隊 | 12 中隊 | 50 中隊 |

福島安正のユーラシア大陸旅行

| | | |
|----------------|---------------|---|
| 後備鍬兵大隊 | | 4 大隊 (将校 24 人 × 4 大隊 =96 人) (下士卒 1,266 人 × 4 大隊 =5,064 人) |
| ⑤将校・下士卒・その他の合計 | | |
| 将校のみ | 3 万 3,529 人 | |
| 下士卒のみ | 83 万 5,143 人 | |
| 将校・下士卒 | | 253 万 2,496 人 |
| 護境兵，地方軍など | 10 万 5,000 余人 | |
| 軍馬 | 15 万 5,478 頭 | 57 万 7,796 頭 |
| 大砲 | | 5,264 門 |

註 1：福島安正浄写稿本『単騎遠征報告 第三』、天理大学附属天理図書館所蔵、081-イ27-8(3)より作成。非戦闘員を除く。

註 2：丸カッコ内に掲げた将校、下士卒の人数は原本には記載されていないが、原本中で指摘されている連隊、大隊、中隊あたりの人数から本稿筆者が算出したものを掲げた。

註 3：①野戦軍の騎兵は 1 連隊あたり 6 中隊として計算した。

註 4：②後備軍のコーカサス歩兵については、第 5、6 独立大隊の将校、下士卒の人数が未記載のため、第 1～4 独立大隊のそれに準じて計算した。

註 5：④補充軍の後備騎兵大隊については、徒歩隊を除外した。

【表 7-2 ロシア陸軍平時配兵】

| 軍 管 | 軍 団 | 師団・旅団・大隊・中隊数 |
|------------|------------------------|---|
| サンクトペテルブルク | 近衛軍団 (サンクトペテルブルク) | 歩兵 2 師団 野戦砲兵 2 旅団 騎兵 2 師団 (5 旅団と 3 中隊) 騎砲兵 5 中隊 |
| | 第 1 軍団 (サンクトペテルブルク) | 歩兵 3 師団 野戦砲兵 3 旅団 |
| | 軍管直轄 | 猟兵 4 大隊 要塞歩兵 2 大隊 要塞砲兵 6 大隊と 1 中隊 鍬兵 3 大隊 軍騎兵 1 大隊 鉄道兵 1 大隊 野戦電信 3 廠 工兵 1 廠 乗馬憲兵 1 中隊 |

福島安正のユーラシア大陸旅行

| | | |
|-------|-----------------|---|
| ヴィルナ | 第2軍団 (ヴィルナ) | 歩兵2師団 野戦砲兵2旅団 騎兵1師団 騎砲兵2中隊 |
| | 第3軍団 (リガ) | 歩兵2師団 野戦砲兵2旅団 騎兵1師団 騎砲兵2中隊 |
| | 第4軍団 (ミンスク) | 歩兵2師団 野戦砲兵2旅団 騎兵1師団 騎砲兵2中隊 |
| | 第16軍団 (ヴィテブスク*) | 歩兵2師団 野戦砲兵2旅団 |
| | 軍管直轄 | 猟兵1旅団 臼砲兵1連隊 要塞歩兵1連隊と3大隊 要塞砲兵7大隊と1中隊 鉄道兵3大隊 鋏兵3大隊 軍橋兵2大隊 野戦電信3廠 工兵1廠 幹部輜重兵2大隊 乗馬憲兵1中隊 |
| ワルシャワ | 第5軍団 (ワルシャワ) | 歩兵3師団 野戦砲兵3旅団 騎兵1師団と1旅団 騎砲兵3中隊 |
| | 第6軍団 (ワルシャワ) | 歩兵2師団 野戦砲兵2旅団 騎兵1師団 騎砲兵2中隊 |
| | 第14軍団 (ルブリン) | 歩兵2師団 野戦砲兵2旅団 騎兵1師団 騎砲兵2中隊 |
| | 第15軍団 (ワルシャワ) | 歩兵2師団 野戦砲兵2旅団 騎兵1師団 騎砲兵2中隊 |

福島安正のユーラシア大陸旅行

| | | |
|-----|-------------------|--|
| | 軍管直轄 | 猟兵 2 旅団 ドン・コサック騎兵 1 師団 コサック騎砲兵 2 中隊 クバン・コサック騎兵 1 大隊 要塞歩兵 13 大隊 要塞砲兵 20 大隊 鋏兵 3 大隊 軍橋兵 2 大隊 野戦電信 3 廠 工兵 1 廠 幹部輜重兵 1 大隊 乗馬憲兵 1 中隊 |
| キエフ | 第 9 軍団 (キエフ) | 歩兵 2 師団 野戦砲兵 2 旅団 騎兵 1 師団 騎砲兵 2 中隊 |
| | 第 10 軍団 (ハリコフ **) | 歩兵 2 師団 野戦砲兵 2 旅団 騎兵 1 師団 騎砲兵 2 中隊 |
| | 第 11 軍団 (ジトーミル) | 歩兵 2 師団 野戦砲兵 2 旅団 騎兵 1 師団 騎砲兵 2 中隊 |
| | 第 12 軍団 (キエフ) | 歩兵 2 師団 野戦砲兵 2 旅団 騎兵 1 師団 騎砲兵 2 中隊 |
| | 軍管直轄 | 猟兵 1 旅団 混成コサック騎兵 1 師団 コサック騎砲兵 1 中隊 白砲兵 1 大隊 要塞砲兵 2 大隊と 1 中隊 鋏兵 3 大隊 軍橋兵 2 大隊 野戦電信 3 廠 工兵 1 廠 幹部輜重兵 1 大隊 乗馬憲兵 1 中隊 |

福島安正のユーラシア大陸旅行

| | | |
|---------------|---------------------|---|
| オデッサ | 第7軍団 (セヴァストポリ) | 歩兵 2 師団 野戦砲兵 2 旅団 騎兵 1 師団 騎砲兵 2 中隊 |
| | 第 8 軍団 (オデッサ) | 歩兵 2 師団 野戦砲兵 2 旅団 騎兵 1 師団 騎砲兵 2 中隊 |
| | 軍管直轄 | 獵兵 1 旅団と 1 中隊 クリミア・タタール騎兵 1 大隊 要塞歩兵 1 大隊 要塞砲兵 5 大隊 銃兵 3 大隊 軍橋兵 1 大隊 野戦電信 3 廠 工兵 1 廠 幹部輜重兵 1 大隊 乗馬憲兵 1 中隊 |
| モスクワ | 選抜兵軍団 (モスクワ) | 歩兵 3 師団 野戦砲兵 3 旅団 |
| | 第 13 軍団 (モスクワ) | 歩兵 2 師団 野戦砲兵 2 旅団 |
| | 第 17 軍団 (ニジニ・ノヴゴロド) | 歩兵 2 師団 野戦砲兵 2 旅団 |
| | 軍管直轄 | 騎兵 1 師団 騎砲兵 2 中隊 |
| フィンランド | | 歩兵 1 師団 野戦砲兵 1 旅団 獵兵 8 大隊 騎兵 1 連隊 要塞歩兵 2 大隊 要塞砲兵 4 大隊 |
| カザン | | 歩兵 1 師団 野戦砲兵 1 旅団 コサック騎兵 2 連隊と 2 中隊 騎砲兵 2 中隊 |
| ドン 〔ドン軍管州〕 | | ドン・コサック騎兵 1 連隊 |

福島安正のユーラシア大陸旅行

| | | |
|------------------|---------------------|---|
| コーカサス | コーカサス軍団 (ティフリス ***) | 歩兵 3 師団 野戦砲兵 3 旅団 騎兵 2 師団 (うち 1 連隊はザカスピ州派遣) 騎砲兵 2 中隊 嚮導歩兵 2 大隊 |
| | 軍管直轄 | 歩兵 2 師団 野戦砲兵 2 旅団 嚮導歩兵 2 大隊 猟兵 1 旅団と 4 大隊 騎兵 1 師団と 2 旅団 騎砲兵 4 中隊 要塞歩兵 3 大隊 要塞砲兵 6 大隊 鋏兵 2 大隊 野戦電信 2 廠 工兵 1 廠 乗馬憲兵 1 中隊 |
| アムール イルクーツク **** | | 歩兵 8 大隊 猟兵 2 旅団 (10 大隊) コサック歩兵 2 大隊半 後備歩兵 3 大隊 コサック騎兵 12 中隊 野戦砲兵 6 中隊 鋏兵 1 中隊 要塞砲兵 2 中隊 (ウラジオストク) |
| オムスク | | 歩兵 1 旅団と 3 大隊 (8 大隊) 後備歩兵 3 大隊 コサック騎兵 22 中隊 野戦砲兵 6 中隊 鋏兵 1 中隊 |
| トルキスタン | | 歩兵 26 大隊 猟兵 3 旅団 (12 大隊) コサック騎兵 24 中隊 野戦砲兵 9 中隊 要塞砲兵 2 中隊 (サマルカンド、タシケントに各 1 中隊) |

註 1：福島安正浄写稿本『単騎遠征報告 第三』、天理大学附属天理図書館所蔵、081-イ27-8(3)より作成。

註 2：* ヴィテブスクは現ベラルーシのヴィーツェブスク。

註 3：** ハリコフは現ウクライナのハルキウ。

註 4：*** ティフリスは現ジョージアの首都トビリシの別名。

註 5：**** アムール軍管とイルクーツク軍管は別の区域である。この 2 つの軍管区がバイカル湖周辺から日本海沿岸までをカバーし、日本にもっとも近い兵力となる。

【表 8 露仏同盟と独墺伊三国同盟の兵数比較】

| | ロシア | フランス | ドイツ | オーストリア | イタリア |
|----|-------------|------------|-------------|------------|-------------|
| 平時 | 86万 8,672人 | 60万 0,672人 | 51万 1,744人 | 36万 5,656人 | 24万 7,809人 |
| | 146万 9,344人 | | 112万 5,209人 | | |
| 戦時 | 253万 2,496人 | 約 375万人 | 最低 300万人 | 約 175万人余 | 137万 8,796人 |
| | 628万 2,496人 | | 612万 8,796人 | | |

註：福島『単騎遠征報告』第一、第三より作成。フランスの平時兵数については1891（明治24）年調と明記されている。

《注》

(1) 福島島のシベリア横断に対する国内メディアの反応は、原山煌「福島安正のシベリア単騎旅行に関する大衆メディアの諸相― 絵図をめぐる―」(平成一三・一四年度科学研究費補助金特定領域(A)2)「東アジアの出版文化」研究成果報告書、二〇〇三年三月)をはじめとする同氏の論考が検証している。また福島島のシベリア横断は欧米各国のメディアでも盛んに取り上げられたとのイメージがあるが、実際にはそれほどもなく、福島への関心は限定的なものであったようである。この点については Sven Sailer, "Fukushima Yasumasa's Travels in Central Asia and Siberia: Silk Road Romanticism, Military Reconnaissance, or Modern Exploration?" in *Japan on the Silk Road: Encounters and Perspectives of Politics and Culture in Eurasia*, ed. Selçuk Esenbel (Leiden and Boston: Brill, 2018) が詳し。

(2) インテリジェンスの観点からとくに重要なものは、鳥貫重節「福島安正と単騎シベリア横断」上下(原書房、一九七九年十一月)、同『戦略・日露戦争』上(原書房、一九八〇年十一月)、関誠「日清開戦前夜における日本のインテリジェンス―明治前期の軍事情報活動と外交政策―」(ミネルヴァ書房、二〇一六年三月)である。どちらも一次資料を駆使して丹念な検証を行っている。そのほかの研究については、本稿の末尾に掲げた「主要参考文献」を参照のこと。

(3) 関「日清開戦前夜における日本のインテリジェンス」一四七―一四八頁を参照のこと。

(4) 例えば亜欧旅行の際、カイロでコダック社製のカメラを購入し、エジプト、小アジア沿岸、コンスタンティノープルで三十余枚の写真を撮影し、ラングーンで現像に出している(福島安正『亜欧日記』第一五号、一八九六年一月十八日、二二〇頁、同第二三号、四月五日、四〇八頁、宮内庁宮内公文書館所蔵)。なお管見の及ぶ限りでは、福島による写真は現在残されていない。

福島島の報告書である『亜欧日記』は、鳥貫重節氏が広瀬栄一氏(終戦時陸軍中佐、戦後陸上自衛隊陸将)所蔵のものを使用紹介したことによってその存在が長らく知られていたが、個人蔵書のためその閲覧は難しい状況にあった(鳥貫『戦略・日露戦争』上、三二頁を参照)。しかし近年、宮城県図書館にも同資料が収蔵されていることが柏木一朗氏の報告によって明らかとなり(柏木「伊藤博文文書」秘書類纂兵政」解題)伊藤博文文書研究会監修、楡山幸夫総編集『伊藤博文文書第九八巻秘書類纂兵政四』ゆまに書房、二〇一三年、巻末所収)、さらに最近、三沢伸生氏が宮内公文書館に保管されていることを発見

- 紹介し、研究者のアクセスが容易となった(三沢「一九世紀末のイスタンブルにおける日本軍の情報活動―福島安正『亜欧日記』の史料価値―」『東洋大学社会学部紀要』五五巻二号、二〇一八年三月)。
- (5) 「慶應元年ヨリ明治四十年ニ至ル履歴」(国立国会図書館憲政資料室所蔵「福島安正関係文書」九二)。福島自筆の履歴書であり、同図書館の許可を得た上での翻刻は、拙稿「資料紹介 福島安正『慶應元年ヨリ明治四十年ニ至ル履歴』」『拓殖大学論集』文・自然・人間科学研究』第四四号、二〇二〇年十月を参照されたい。
- (6) 太田阿山編『中央亜細亜より亜拉比亜へ 福島將軍遺続』(東亜協会、一九四三年十二月)、二八〇頁。同書には大空社、一九九七年の復刻版がある。
- (7) 『亜欧日記』第一四号、一八九六年一月七日、一九一頁。
- (8) 福島安正「単騎遠征報告第二」『単騎遠征報告第一第二』(防衛省防衛研究所戦史研究センター史料室所蔵(以下、防研と略称)、文庫「千代田史料」二二二)所収、六四―六五頁。この『単騎遠征報告第一第二』は関誠氏が発掘し、同著『日清開戦前夜における日本のインテリジェンス』において初めて活用紹介したものである。
- (9) 「単騎遠征報告第二」四七―四八頁。
- (10) 同右、一〇―一二頁。
- (11) 『亜欧日記』第五号、一八九五年十月二十八日、三三頁。
- (12) ラングーンに向かう途中、イギリス客船の中でビルマ滅亡の講話を聞いた福島は、他の英人客が感動する中で一人「切齒」[憤慨]していた。またマンダレーでかつて王妃の謁見所であったというクラブの客室でイギリス軍参謀官と「談笑」した際は、その陰でビルマの亡国を思い、「眼底只涙アリシノミ」であったという(『亜欧日記』第三二号、一八九六年三月五日、三八一―三八二頁、同第三三号、四月五日、四一六―四一七頁)。
- (13) 本稿においては原文を引用する際、読みやすさを考慮して適宜句読点を補った。場合によっては送り仮名を付した箇所もある。変体仮名、合字は現代仮名、現代漢字に直し、漢字はおおむね新字体に改めた。また引用文章を途中で省略する場合は「……」と表示した。
- (14) 一八八六年二月十七日、二月二十四日付・内閣書記官より外務書記官宛、一八八六年十一月四日付・大山巖陸相より井上馨

外相宛、JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B07090446600 帝国陸海軍将校海外派遣雑件 / 陸軍ノ部第一卷 (外務省外交史料館)。

なおここで調査の目的の一つに「輻重法」の研究が掲げられている点に着目しておきたい。インドに限らず福島は、輻重法の調査を目的に掲げて相手側の協力と見学許可を要請することが多かった。これは先方に警戒されないよう比較的抵抗の少ない分野を前面に押し立ててカモフラージュしたものである。たとえば亜欧旅行でエジプトを訪れた際は、カイロのイギリス軍に奇異な印象を持たれないようにするため、「輻重運輸の研究」を第一の目的とすることを伝えている(『亜欧日記』第九号、一八九五年十一月二十五日、七六頁)。

(15) 「印度報告」第一〇号(西摩拉^{シムラ}第六報告一八八六年六月十四日)、第一一号(西摩拉第七報告同年六月二十一日)、福島安正、田内三吉『印度紀行』(一八八七年一月、陸軍文庫)所収、八一、八七頁。福島の前号は「福嶋」と記される場合があり、そのままの形で表記した。

(16) 主に『印度紀行』横浜出航日については、福島安正『印度兵制一斑』『月曜会記事』第一七号、一八八六年十一月印刷(JACAR: C15120183900 合本月曜会記事 第二卷 明治一九〜二一防衛省防衛研究所)では三月二十七日、「慶應元年ヨリ明治四十年ニ至ル履歴」では三月二十六日となっている。執筆時が実際の旅行に近く、記憶がまだ鮮明であったと考えられる前者の日付を掲げた。

(17) 「印度報告」第六号(西摩拉第二報告一八八六年五月二十五日)『印度紀行』所収、四二―四四頁。

(18) 「印度報告」第一四号(比沙瓦爾^{ビシャバル}報告一八八六年七月七日)、第一八号(統報日付記載なし)『印度紀行』所収、一〇八、二二三―二四頁。

(19) 「印度報告」第一五号(孟買^{ボンバイ}報告一八八六年七月二十九日)、第一七号(哥倫坡^{コロンボ}報告一八八六年八月十三日か)『印度紀行』所収、一一九、一六二頁。

(20) 「印度報告」第五号(西摩拉第一報告一八八六年五月二十二日)『印度紀行』所収、二四―二五頁。

(21) 「印度報告」第一四号(比沙瓦爾報告一八八六年七月七日)『印度紀行』所収、一一一頁。

(22) 「印度報告」第六号(西摩拉第二報告一八八六年五月二十五日)『印度紀行』所収、四二―四四頁。

- (23) 「印度報告」第七号（西摩拉第三報告一八八六年五月三十一日）『印度紀行』所収、四七頁。この書籍のタイトルは不明であるが、福島自筆「陸軍改正摘要」（国立国会図書館憲政資料室所蔵、福島安正関係文書九八）の五六頁目に「Return」（返却）
[East India Army System (Army Transport), Ordered by the House of Commons, to be printed 13 July 1885 London. Printed by Henry Hansard and son, printed to the house of commons]とのメモが記されているので、この文献である可能性が考えられる。
- (24) ちなみにアームストロング大尉はそれから約一年後の一八八七年六月、シムラーの北西約七五〇キロのトルガール地区で偵察任務中、インド政庁に抵抗するトライブ（部族）に襲撃されて死亡している。Captain D. M. Lindsey, *Regimental History of the 6th Royal Battalion 13th Frontier Force Rifles (Sinde), 1843-1923* (1925; repr. Uckfield, East Sussex: The Naval & Military Press, 2006), 24-25.
- (25) 後の回想で福島は、シムラーで「機密ノ書籍」も探り得て、「置兵ノ目的、政府ノ方針、亜富汗ニ於ル英魯ノ将来等ヲ略悉」することができたとしている（福島安正「単騎遠征報告総論第一」一〇頁、『単騎遠征報告総論第一』第四』所収、防研、文庫一千代田史料一二二二）。
- この『単騎遠征報告総論第一』第四』も関誠氏が発掘し、『日清開戦前夜における日本のインテリジェンス』において初めて活用紹介したものである。なお『単騎遠征報告総論第一』第四』には執筆年月日が記されていないが、シベリア単騎横断旅行から帰国した一八九三（明治二十六年）年六月末以降にまとめたものと考えられる。リアルタイムで記録されたものではないことに注意する必要がある。
- (26) 「印度報告」第七号（西摩拉第三報告一八八六年五月三十一日）『印度紀行』所収、四七一―五一頁。
- (27) 「印度報告」第八号（西摩拉第四報告一八八六年六月七日）『印度紀行』所収、五三頁。
- (28) 福島安正『印度形勢摘要』上巻、一八八六年十一月、五四丁（拓殖大学文京図書館所蔵）。同文書は参謀本部用箋に手書きで記されており、頁数は記載されていないが、本文最初を第一丁としてそこから換算表示した。巻頭に福島の緒言（一八八六年十一月一日付）が掲げられており、そこで第一丁は端正な筆跡で彼の自筆と考えられるが、それ以外は急いで筆記したせいか文字が乱れており、福島によるものかどうかは判断が難しい。

これまで福島が『印度形勢摘要』上下巻と題する文書を作成したことは知られていたが、実物の存在は確認されていなかった。拓殖大学文京図書館には上巻のみが所蔵されており、それによると同文書は、英領「印度陸軍ノ改正委員ヨリ団隊官解等ノ将領隊長及ヒ主任ニ下問シ、其意見ヲ聚録シテ数大部ト為シ、改正ノ参考トセシ書籍中ニ就テ拔萃セシモノ」であるという。つまり基本的には英領インド軍の図書から要所を抜き書きしたものであるが、その筆致からいって原書からの抜粹ではなく福島自身の意見と判断できる個所も見受けられる。

全体の内容は、英領インド軍の改正委員から出された質問を軍司令官、師団長や連隊長が答える形式になっている。たとえばアフガニスタン、ビルマ、清国に進軍する場合、諸兵に必要なものは何かという質問には、毛布・防水布・天幕・羊皮服・温衣・温手袋などがあげられ、三時間、二十四時間、あるいは四十八時間以内に運動を起こすことが可能といった回答が寄せられている。また編制については、平時より戦時同様の編制にすべきだ、予備弾薬の供給方法が不完全である、インド軍連隊に勤務する英人士官の数が不足しているなどの意見が出ている。こうした記述から福島は、英領インド軍がビルマから清国への侵入を想定していたこと、あるいは同軍が外からはうかがい知れない様々な問題、課題を内部に抱えていることを知ることができた。

(29) 前掲、福島自筆「陸軍改正摘要」三〇―三二頁目。同文書は小型のノートに黒と赤のペンで記されており、頁数は記載されていないが、ここでは表紙の次の頁を一頁目として換算表示した。内容は部分的に福島『印度形勢摘要』上巻と重なるので、同上巻・下巻の元原稿なのではないかと考えられる。

(30) 同右、三四頁目。

(31) 同右。

(32) 同右、三七頁目。

(33) なおシムラー滞在中の福島はチベットについても関心を示しており、それは後年の彼のチベット工作を理解する上で見逃すことのできない点である。この年（一八八六年）、インド政庁はチベットに通商を促すため、コルマン・マコーレー (Colman Patrick Louis Macaulay) の率いる派遣団を国境地帯に送った。しかしチベットが武装抵抗に出たため、ロンドンのイギリス政府は最終段階で派遣を中止する。インド到着後、福島はマコーレー派遣団がダージリンに集まり、護衛兵六〇名を付けてチ

- ベットに向かおうとしていることを知り、ダーズリンからギャンツェ経由でラサに至るまでの路程と各駅間の所要日数をシムラーで調査の上、東京に報告している（『印度報告』第四号 甲谷他第二報告 一八八六年五月八日、同第七号 西摩拉第三報告 五月三十一日、『印度紀行』所収、一三三、四九―五〇頁）。福島のチベットに対する関心の原点は、遅くともこの頃までさかのぼることができる。
- (34) 「印度報告」第一四号（比沙瓦爾報告 一八八六年七月七日）『印度紀行』所収、一〇九―一一〇頁。
同右、一一〇頁。
- (35) 「印度報告」第二三三号（西摩拉第九報告 一八八六年六月二十八日）『印度紀行』所収、一〇七頁。
- (36) 「印度報告」第一五号（孟買報告 一八八六年七月二十九日）『印度紀行』所収、一一二―一三頁。
- (37) 福島安正自筆「隣邦兵備略 第三版」（国立国会図書館憲政資料室所蔵、福島安正関係文書五〇）のうち三番目の綴りの三枚目表・裏。同資料は三点の綴りから成り、最初の二点は福島「隣邦兵備略」第三版・第一卷（參謀本部、一八八九年三月）の元原稿の一部であるが、三番目の綴りはインド調査の報告を断片的に記したものである。
- (38) なお後の回想において彼はこのときアフガニスタンの国境カイバルの隘口を見たことと記している（「單騎遠征報告総論 第一」一〇頁）。ここでいう「カイバルの隘口」が文字通りペシャーワルより四〇キロ余り先にあるアフガニスタン国境附近のカイバル峠なのか、それともペシャーワルのことを象徴的にそのように呼んだのかは定かではない。カイバル峠まで実際に足を運んでいれば「印度報告」にもその旨が記されておかしくないはずであるが、そうした記述は見られないので、実際にカイバル峠まで足を運んでいないのではないかと考えられる。
- (39) 「印度報告」第一五号（孟買報告 一八八六年七月二十九日）『印度紀行』所収、一一三―一四頁。
- (40) シムラー出發後はアームストン大尉が始終案内役をつとめたが、北西辺境州のペシャーワル、コハト視察の際は、同大尉が原隊のパンジャーブ歩兵第六連隊に所用のため一時帰還したため、福島、田内だけで移動している（同右、一一五―一六頁）。
- (41) 「印度報告」第二六号（^{パンガロール}萬牙露報告 一八八六年八月十五日）『印度紀行』所収、一二七、一三二頁。
同右、一三八頁。
- (42) 「印度報告」第一七号（哥倫坡報告 一八八六年八月二十八日推定）『印度紀行』所収、一五七―一五八、一七八頁。

- (45) 同右、一六二―一六三頁。
- (46) 「二八八六年」十一月二十二日付・福島安正より荒尾宛書簡、『視察・調査報告綴』小山秋作旧蔵史料、防研、中央―軍事行政その他―三八八。この福島は荒尾宛書簡は関誠氏が発掘し、同著『日清開戦前夜における日本のインテリジェンス』で初めて活用紹介したものである。なお福島はロシアの略称として「魯」の語を使うことが多いため、引用の場合にはできるだけそれを尊重するが、それ以外については「露」の語を用いることとする。
- (47) 同右、福島より荒尾宛書簡。
- (48) 同右。
- (49) 関『日清開戦前夜における日本のインテリジェンス』一六一頁はこの福島の日英提携論に注目し、それは「陸軍での情報活動に基づいたものでは最も早い時期のものである」との重要な指摘を行っている。
- (50) 福島「慶應元年ヨリ明治四十年ニ至ル履歴」。
- (51) 前掲、「二八八六年」十一月二十二日付・福島より荒尾宛書簡。
- (52) 福島「慶應元年ヨリ明治四十年ニ至ル履歴」。
- (53) 島貫『福島安正と単騎シベリア横断』上、一三八―一三九、一四五頁。
- (54) 「単騎遠征報告総論第四」二頁、『単騎遠征報告総論第一―第四』所収。
- (55) たとえば一八九一年には以下を見学している。八月に近衛軍団(ベルリン)の親閲、九月にバイエルン第一(ミュンヘン)・第二(ヴュルツブルク)軍団の大演習、および第四(マクデブルク)・第十一(カッセル)軍団の大演習である(同右、一二頁)。
- (56) 同右、二頁。
- (57) 福島安正「従明治十三年至同三十年十八年間跋涉略図」防研、文庫―千代田史料―一〇五三。これには次章で述べるシベリア単騎横断旅行時に訪れた都市も含む。なおアントワープ(アントウェルペン)では西園寺公望駐独公使とともにベルギー軍の要塞を見学している(福島安正「白耳義国防略」一八八八年五月、『視察・調査報告綴』)。
- (58) 埃匈独魯情勢第二報告附録「埃独疆上魯国配兵略図」(二八八八年二月)、『視察・調査報告綴』。これは略図ないし下書きで、

参謀本部にはより詳しく清書された配兵図が送られたのではないかと考えられる。

(59) 「単騎遠征報告第二」三三頁。

(60) 「単騎遠征報告第二」單騎遠征報告第一第二所収、六五頁。

(61) 一八八八年〔推定〕十月一日付・福島安正より斎藤〔名前記載なし〕宛書簡、太田阿山編『福島將軍遺蹟』（東亜協会、一九四一年六月）所収、二二八頁。同書には大空社、一九九七年の復刻版がある。

(62) 福島安正「中央亜細亜鉄道」一八八八年三月九日、福島安正「魯国東策一端」一八八八年三月三十一日か、「史料訳文」3より引用、いずれも『視察・調査報告綴』。

『視察・調査報告綴』の巻末には右の「中央亜細亜鉄道」「魯国東策一端」を含めた福島手書きの文書を解説した上でワープロ清書したものが「史料訳文」1と6として収めてある。しかしそれに対応する肝心のオリジナルの文書の頁が所々脱落しており、原文との完全な照合ができない状態となっている。「史料訳文」には誤読や解説不能の空欄、表記の間違いが少なくないので、すべて原文と照らし合わせる必要があるが、現状ではかなわない。

(63) 福島安正「西比利亜鉄道」一八八八年三月九日、『視察・調査報告綴』。

(64) 一八八八年四月六日付・福島安正書簡、綴りの前後関係からいって荒尾精宛か。頁が脱落しているため冒頭部分の読解が不可能、『視察・調査報告綴』。

(65) 福島安正「魯国東策一端」一八八八年三月三十一日か、『視察・調査報告綴』所収。頁脱落のため「史料訳文」3から引用した。

(66) 福島安正「白耳義国防略」一八八八年五月、『視察・調査報告綴』。なおベルリン駐在中の福島はチベットについても注意を払っている。一八八六年、インド調査中の福島がマコーレー派遣団のチベット遠征計画に関心をもち、ダーズリンからラサまでの路程について報告したことはすでに述べた。その後、マコーレーの派遣は中止されたが、遠征隊の存在に危機を感じたチベットはイギリスの保護国であるシッキム王国の領内に軍隊を前進させる。それに対して一八八八年、英印軍がチベット兵の撤退を求めてシッキム遠征を行うと、チベット側は英印軍に攻撃をしかけたものの撃退され、英印軍はチベット領内のチュンビ溪谷まで前進して示威を行った。

福島はその間の状況を三度に分けて報告している。それによると、①イギリスは年来チベットに「流涎」し、機会を利用して首都ラサを「屠ラントスル」つもりでいるのは明らかであるが、②現在はロシアの東漸を抑えるため清国と友好関係を保つ必要がある、できるだけ清朝政府を刺激しないよう配慮している。しかし英印軍のシッキム遠征の結果、③チベットに対して「隙ヲ窺フ」イギリスの望みが増すのは疑いないとしている（福島安正「西幾摩情勢」一八八八年三月九日、「西幾摩情勢第二」同年三月三十一日、「西幾摩情勢第三」日記記載なし、いずれも「視察・調査報告綴」）。加えて、数年内にロシアがモンゴル、イギリスがチベットを分割領有するであろうことも示唆している（前掲、一八八八年〔推定〕十月一日付・福島より斎藤宛書簡、太田編『福島將軍遺續』所収、二二八―二二九頁）。

実際にはこのときもそれ以後もロンドンのイギリス政府にチベット併合の意思はなく、今日から判断すれば福島の対英警戒心は過剰であったといわざるを得ない。ただしマコーレー派遣団計画や英印軍のシッキム遠征、あるいはイギリスのビルマ併合といった相次ぐ事件を見て、イギリスのチベット併合を予想したのは無理からぬことであつたといえよう。ちなみに英領インド、シッキムとチベットの国境線上の衝突は、一八九〇年に英清間でシッキム条約が締結されることで落ち着いていた。

(67) ドイツに赴任して一年後（一八八八年三月）、少佐に進級した。

(68) 「単騎遠征報告総論 第二」一―四頁、『単騎遠征報告総論 第一―第四』所収。申請書の日付は一八八九年四月三十日。読みやすさを考慮して現代的な意訳を交えた。

(69) 福島はオスマン帝国の首都としてイスタンブールの名称を用いず、つねにコンスタンティノープルとしているため、本稿もそれで統一した。

(70) 「単騎遠征報告総論 第二」七―八頁。

(71) ルートについては、福島「巴爾干半島巡回日記」太田編『福島將軍遺續』所収、三四四―三五一頁をもとに、左記の福島自筆の日記で補訂した。いずれも天理大学附属天理図書館所蔵、〇八一―イ二七―六（一）―（五）。

① 「巴爾干半島日記 ブルガリア 土耳其之部」（一八八九年十一月十三日―十二月三日）

② 「巴爾干半島日記 布尔牙利之部」（一八八九年十月二十七日―十二月二十三日）、以下、「巴爾干半島日記 布尔牙利之部」I

とする。

③ 『バル干半嶋日記 布尔牙利之部』(一八八九年十二月十一—十七日)、②と同タイトルであるが内容は別、以下『バル干半嶋日記 布尔牙利之部』Ⅱとする。

④ 『バル干半嶋日記 塞爾維亞 希臘之部』(一八八九年十二月二十四日—一九〇〇年一月三十一日)

⑤ 『バル干半嶋日記 希臘 蒙的尼羅之部』(一八九〇年二月一—十九日)

なお福島自筆のバルカン旅行に関する記録として以下の史料もある。天理図書館所蔵、〇八一—イ二七—七(一)~(二)

⑥ 『バル干巡回日誌』(一八八九年九月三十日~十月二十二日)、ベルリン出発前からブダペストまでの出費細目リスト。

⑦ 『バル干半嶋巡回 決算報告扣』(一八九三年十月二十一日)、帰国後、児玉源太郎軍務局長に提出した決算報告控。

(72) 『バル干巡回日誌』一八八九年九月二十八日、十月七、十六—十八日。

(73) 『単騎遠征報告総論 第二』二二—二三頁、『バル干半嶋日記 布尔牙利之部』Ⅰ、一八八九年十一月四—十一日。ルーマニア旅行については記述が少ないため、詳細を十分明らかにすることはできない。

(74) 福島安正自筆浄写稿本『単騎遠征報告総論 残篇』の「実力平均 其六 羅馬尼」の項、天理大学附属天理図書館所蔵、〇八一—イ二七—九(三)。

(75) 『バル干半嶋日記 布尔牙利 土耳其之部』一八八九年十一月十三、十四、十六日。

(76) 同右、十一月二十一—二十八日。

(77) 船でボスボラス海峡を巡航し、黒海入口の遠景やルメリ要塞など八つの地点を撮影したが、実物の写真は残されていない
(『バル干半嶋日記 布尔牙利 土耳其之部』一八八九年十一月三十日)。

(78) 『バル干半嶋日記 布尔牙利 土耳其之部』一八八九年十一月二十二日、十二月二—三日、「単騎遠征報告総論 第二」一六一—八頁、『単騎遠征報告総論 残篇』の「実力平均 其八 土耳其」の項。

(79) 『単騎遠征報告総論 残篇』の「実力平均 其八 土耳其」ならびに「其九 魯西亞」の項。

(80) 『単騎遠征報告総論 第二』二八頁。

- (81) 『巴尔干半嶋日記 布尔牙利之部』Ⅱ、十二月十三—十五日。
- (82) 同右、十二月十六日、『巴尔干半嶋日記 布尔牙利之部』Ⅰ、十二月十六—二十日、「单騎遠征報告総論 第二」三六一—三七頁。
- (83) 『巴尔干半嶋日記 布尔牙利之部』Ⅱ、十二月十六日、『巴尔干半嶋日記 布尔牙利之部』Ⅰ、十二月二十一日、「单騎遠征報告総論 第二」三五—三六頁。
- (84) 「单騎遠征報告総論 第二」三五—三六頁。
- (85) 『巴尔干半嶋日記 布尔牙利之部』Ⅰ、十二月十八日。
- (86) 「单騎遠征報告総論 第二」三三、三四頁。
- (87) 『巴尔干半嶋日記 塞爾維 希臘之部』一八八九年十二月二十六—二十七日。
- (88) 同右、一八八九年十二月二十八—三十一日、一八九〇年一月七日。
- (89) 同右、一八八九年一月九—十日。
- (90) 同右、一月十一—十三日。
- (91) 同右、一八八九年十二月三十一日、一八九〇年一月十二日。
- (92) 「单騎遠征報告総論 第三」八一—九頁、『单騎遠征報告総論 第一—第四』所収、『巴尔干半嶋日記 塞爾維 希臘之部』一八八九—九〇年十二月二十八日。
- (93) 『巴尔干半嶋日記 塞爾維 希臘之部』一八九〇年一月十三日。
- (94) 『巴尔干半嶋日記 塞爾維 希臘之部』一八九〇年一月十八—二十五、二十八日、『巴尔干半嶋日記 希臘蒙的尼羅之部』一八九〇年二月二日、「单騎遠征報告総論 第三」二七頁。ゲオルギオス親王はその翌年に従兄のニコライ皇太子 (Prince Nikolai) とともに大津事件に遭遇することになる。
- (95) 『巴尔干半嶋日記 塞爾維 希臘之部』一八九〇年一月二十八日、「单騎遠征報告総論 第三」二八頁。
- (96) 『巴尔干半嶋日記 塞爾維 希臘之部』一八九〇年一月二十五、二十九、三十日。
- (97) 「单騎遠征報告総論 第三」二三、三〇—三一頁。
- (98) 『巴尔干半嶋日記 希臘蒙的尼羅之部』一八九〇年二月十一—十九日。

- (99) 同右、二月十五日。
- (100) 同右。
- (101) 同右、二月十六―十七日（書き下し文の後半は「単騎遠征報告総論 第三二五二頁による」）。
- (102) モンテネグロでは、生計を立てるため婦人が六〇キロに及ぶ荷物を背負って険しい山道を往復する習慣があつた。郵便配達も女性が行い、カタロ港から標高六〇〇メートルを超えるツェティニエまでの二十八キロを四時間で登つたという（同右、二月十四、十八日）。
- (103) 福島は以上と同じものと考えられる英訳詩をギリシヤで世話になったフランクジス砲兵中尉に送り、同中尉から「私はモンテネグロに関するあなたの詩がとても気に入った。あなたは勇敢かつ親愛なるその国について、わずかな言葉で多くのことを語っている」との返事を受け取っている。ちなみにフランクジス中尉は書簡で福島にギリシヤの近況（砲兵連隊の操練実施）を知らせ、福島はそれに対してボスボラス海峡の写真を送り、さらにそれに対して中尉は「ドイツの大演習における無煙火薬と連発銃の効果を知りたい」と希望を出している。こうした形での情報交換もなされていたことがわかる。I. Francoudis, Athens to Major [Fukushima], 21 March, 21 March（同じ日付であるが別々の書簡）、25 April 1890. いずれも天理大学附属天理図書館所蔵、〇八一―イ二七―二八（二）。
- (104) 「単騎遠征報告総論 第三」五二頁。
- (105) 「単騎遠征報告総論 第四」二頁。
- (106) 実際、帰国後の福島はロシアのトルコ侵攻をシミュレーションしている。ロシアはバルカン方面からの東ルートを通るのが難しいため、黒海南岸のスイノプに上陸し、コーカサスの軍団と連絡して西ルートからコンスタンティノープルを陥落させるだろうというのがその予想であつた（『単騎遠征報告総論 残篇』の「実力平均 其九 魯西亜」の項）。
- (107) 一八九一年一月一日付・福嶋より参謀総長・有栖川宮熾仁親王宛、「単騎遠征報告総論 第四」所収、二一七頁。喀爾喀（ハルハまたはカルカ）四蒙古とは、外モンゴル（ハルハ）を構成するジャサクト・ハーン部、サイン・ノヤン部、トシエート・ハーン部、チェチェン・ハーン部を指す。
- (108) 一八九一年一月一日付・福嶋安正より川上操六宛書簡、福島安正自筆浄写稿本『単騎遠征報告総論 中』所収、天理大学附属

天理図書館所蔵、〇八一―イ二七―九(二)。この『単騎遠征報告総論中』は防研所蔵の「単騎遠征報告総論」第三、第四に相当するもので両者の内容はほとんど同じであるが、こちらにしかない記述（主に福島と川上の往復書簡）が入っているので注意が必要である。福島は自宅に保管した控え（天理図書館所蔵版）のうち私的書簡の部分を削除したものを公式版（防研所蔵版）として参謀本部に提出したのである。

(109) 一八九一年五月二十一日東京発、二十二日ベルリン着、参謀本部より福嶋宛電報、「単騎遠征報告総論第四」所収、七頁。

(110) 一八九一年六月五日付・川上参謀次長より福嶋宛書簡、「単騎遠征報告総論中」所収。

(111) 一八九二年六月七日付・福島より川上操六宛書簡、「単騎遠征報告総論中」所収。

(112) 「単騎遠征報告総論第四」一七一―一八、二〇頁。「単騎遠征報告第一」七頁。一八九二年六月十一日、八月四日付・福嶋安正より在清国・大島圭介公使宛書簡、「単騎遠征報告総論第四」八一九、二二―一四頁所収。

(113) 「単騎遠征報告第一」八一―一六頁。

(114) タルバガタイ (Turbagatai) の地名はこの周辺地域に少なくとも他に2つ存在するので注意が必要である。福島が滞在したのはヴェルフネウジンスク (ウラン・ウデ) でセレンガ川に合流してバイカル湖に注ぐウダ川流域、ウジンスク南対岸のタルバガタイであると考えられる。

(115) 「単騎遠征報告第二」八五―八七頁。

(116) 福島安正「単騎遠征」太田編『福島將軍遺蹟』所収、四二頁。この「単騎遠征」には第一次世界大戦中の一九一八（大正七）年に福島が加筆した個所があるので注意が必要である。

(117) 同右、一六五頁。

(118) そうした福島の特異な食事方法を聞いたサントペテルブルクのある新聞は、福島が飲酒喫煙をしない代わりに「非常ノ健康家」で、一日あたり卵五十個として四百日の旅行中に二万個を食べることになると報道したという。福島自身は、それは事実に近いかも知れないと記している（「単騎遠征報告第二」七四―七五頁）。

(119) 福島「単騎遠征」太田編『福島將軍遺蹟』所収、一六七―一七〇頁。

(120) 同右、一九四―一九七頁。

- (121) ロシア側が福島を厚遇し彼に援助を与えたのは、まだ日本を重大なライバル、手ごわい敵と考えておらず、その情報活動を過小評価したためであると先行研究は指摘している (Saler, "Fukushima Yasumasa's Travels in Central Asia and Siberia," 『エヴァ・パワシユールトコフスカ、アンジエイ・タデウシユ・ロメル共著、柴理子訳』『増補改訂』日本・ポーランド関係史―一九〇四―一九四五―』彩流社、二〇一九年十二月、四三頁)。
- (122) 「単騎遠征報告第二」五―六頁。
- (123) 同右、七―九頁。
- (124) 同右、一四―一五頁。
- (125) 同右、五〇頁。
- (126) 同右、五五―五七頁。
- (127) 同右、六一―六二頁。
- (128) 同右、六九―七〇頁。福島は漢詩の中でもこの情景を歌っており、馬草の値段を問われた主婦は「天の生ずる所、吾何ぞ与らん」と答えたという (太田阿山編、関根休菴訳『福島將軍大陸征旅詩集』東亜協会、一九三九年九月、一〇―一二頁)。
- (129) 「単騎遠征報告第二」七七―七八頁。
- (130) 拙稿「二八八〇年代における日本陸軍の対清情報活動―福島安正を中心として―」『拓殖大学論集 政治・経済・法律研究』二二卷二号、二〇二〇年三月を参照のこと。
- (131) 「単騎遠征報告第二」八〇―八一頁。
- (132) 同右、八一―八二頁。
- (133) 太田編『福島將軍大陸征旅詩集』一六、一一八頁。
- (134) 福島「単騎遠征」太田編『福島將軍遺績』所収、二〇頁。
- (135) 「単騎遠征報告第二」八八―八九頁。
- (136) 同右、九二―九三頁。
- (137) 福島「単騎遠征」太田編『福島將軍遺績』所収、三一―三二頁。モスクワ到着と出発後について簡単に触れるだけで、同地

で何をしたのかはまったく記されていない。

- (138) 同右、三五―三七、三九頁。
- (139) 太田編『福島將軍大陸征旅詩集』二六―二七頁。
- (140) 福島「單騎遠征」太田編『福島將軍遺績』所収、四四頁。
- (141) 同右、四六、四九―五二頁。
- (142) 同右、五六―五七頁。
- (143) 同右、五八―五九頁。太田編『福島將軍大陸征旅詩集』三三―三四頁。
- (144) 福島「單騎遠征」太田編『福島將軍遺績』所収、六〇―六一頁。
- (145) 同右、六六―六八頁。
- (146) 鳥貫『福島安正と單騎シベリア横断』下、二九三頁。
- (147) 日本の里であれば七八・五―一七・八キロ、ロシアの里(露里≡ヴェルスタ)であれば二一・三―三二キロとなる。
- (148) 福島「單騎遠征」太田編『福島將軍遺績』所収、六八―六九頁。
- (149) 同右、八五―八六、八八―八九、九一―九三頁。
- (150) 同右、九六―九八頁。
- (151) 同右、一〇〇頁。
- (152) 同右、一〇四―一〇五、一二三、一四〇頁。
- (153) 同右、一四三頁。
- (154) 同右、一一四、一三一頁。太田編『福島將軍大陸征旅詩集』六六―六七頁。
- (155) 福島「單騎遠征」太田編『福島將軍遺績』所収、一一八―一一九、一四〇頁。太田編『福島將軍大陸征旅詩集』八一頁。
- (156) 福島「單騎遠征」太田編『福島將軍遺績』所収、九五頁。
- (157) 同右、一三四―一三五頁。
- (158) それによるとモンゴルでは重い銀塊を持ち歩くよりも、モンゴル人の嗜好にかなった軽量の雜貨を物々交換のために用意す

るのがよい。モンゴル語に通じ、モンゴル人の習俗を知る者が二、三人ずつの組をつくって旅行をすることにより、安上がり
で大きな利益を得ることができると福島は提言している（同右、一四一頁）。

(159) 同右、一四四―一四六頁。

(160) 同右、一五〇頁。

(161) 同右、一五〇―一五一頁。

(162) 同右、一五一―一五二頁。なお以上見たようにイルクーツクでの福島はさまざまな現地情報を得ることができた。しかし島
貫『福島安正と単騎シベリア横断』下巻、三五六―三五九頁はそれとは異なる記述をしている。同書によると、イルクーツク
での福島は日々の行動を嚴重に尾行監視されて不審を感じたため、予定を切り上げて不意に退散した。軍事関係の記録として
残っているのは州知事の参謀部長から夕食会に招待を受けたことだけで、軍事調査は不首尾に終わったという。確かに福島はわ
ざわざ遠回りをしてイルクーツクに立ち寄っただけに、ロシア当局の疑惑と警戒を招いて監視を強化され、もつとも肝心な部
分を見せてもらえなかったことは当然あり得ることである。しかしそうした制約の中でも各種の見学を行い、限定的ではあつ
てもそれなりの収穫を得たと見る方が正確なのではないかと考えられる。

(163) 福島『単騎遠征』太田編『福島將軍遺績』所収、一五九―一六〇頁。なおチタでも滞在最後の夜に騎兵砲兵の將校団による
晩餐会に招かれ、イルクーツクのときと同様に宴が終わるとイスに座らされたまま青年士官たちに担がれて門前まで見送られ
ている。

(164) 同右、一七一―一七二頁。

(165) 同右、一七五―一七九頁。

(166) 太田編『福島將軍大陸征旅詩集』一〇六頁、福島『単騎遠征』太田編『福島將軍遺績』所収、一七八―一七九頁。

(167) 福島『単騎遠征』太田編『福島將軍遺績』所収、一八〇―一八一頁。

(168) 同右、一八二―一八三頁。

(169) 同右、一八八―一九〇頁。

(170) 同右、一八五頁。

- (171) 同右、一九九―二〇六頁。
- (172) 同右、二〇五、二二四―二一五頁。
- (173) 同右、二〇六―二〇七、二〇九―二二二、二二八頁、太田編『福島將軍 大陸征旅詩集』一一二頁。
- (174) 福島「單騎遠征」太田編『福島將軍遺續』所収、二二八―二一九頁。ノヴォキエフスクは後にノヴォキーエフスコエとなり、一九三六年よりクラスキノと改称した。
- (175) 同右、二二―二三二頁。
- (176) 福島安正浄写稿本「單騎遠征報告第三」、冒頭の「聖彼得堡」の項。天理大学附属天理図書館所蔵、〇八一―イ二七―八(三)。
- (177) 以下『亜欧日記』第二二号、一八九六年三月五日、三八九―三九〇頁。
- (178) 同右、三九〇頁。
- (179) これに関連して一八七〇年代末に參謀本部が定めた「清国派出將校兵略上偵察心得」は、清国で情報活動を行う將校に「清国の短所を拾うよりも長所に着目せよ」との方針を示し、若き日の福島もそれにしたがってフィールド・インテリジェンスの基礎を養った(前掲、拙稿「一八八〇年代における日本陸軍の対清情報活動」二九―三〇頁)。そうした習慣がロシア旅行時にも残っていたといえないこともない。
- (180) この点は筆者のオリジナルの考えではない。情報史研究会(二〇二〇年十二月十二日、オンラインにて開催)における筆者の報告「福島安正のユーラシア大陸旅行」に対して中西輝政京都大学名誉教授が、福島にそのような計算、意図があったのではないかという旨を指摘された。それを聞いて筆者も福島の言動から総合的に判断する限り、彼が故意に情報を加工して上層部に提供した可能性が十分あると考え、中西教授に賛同した次第である。なおこのような貴重なコメントや質問を下さった中西教授と参加者の方々はこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。
- (181) ただし現在のキルギス、新疆については足を踏み入れなかった。またアフガニスタンも訪れていない。
- (182) 福島「徒明治十三年 至同三十年 十八年間跋涉略図」による。
- (183) ここで一次資料について述べておきたい。亜欧旅行のルートのうち、一八九五(明治二十八年)十月に東京の新橋停車場を出發してから翌九六年七月にベルシヤの首都テヘランに到着するまでの報告書は『亜欧日記』第一―三六号に、また九六年五

月末にペルシヤのブーシェフルに上陸してから同年十二月に帰路シンガポールに寄港するまでの記録は『亜細亜略報』第一四〇号に収録されている。どちらも宮内公文書館所蔵。

なお後者の『亜細亜略報』については天理大学附属天理図書館にも収蔵されている。同第二一四〇号までの内容は、太田編『中央亜細亜より亜拉比亞へ 福島将軍遺稿続』五八一—二七三頁とほぼ同様である。ただし『中央亜細亜より亜拉比亞へ』は一般読者向けのくだけた文体に改めてあり、『亜細亜略報』第三九号（一八九七年一月四日）の分のみ収録していない。第三九号はシンガポールで藤田敏郎領事の好意により日本領事館に滞在したこと、一月五日にシンガポールを出港してシヤムに赴く予定であることの二点を記した程度のごく短いもので省略されたであろう。

『亜欧日記』と『亜細亜略報』の相違であるが、前者『亜欧日記』は内容の充実した詳報である一方、後者『亜細亜略報』はより簡潔で要点を簡条書きに略報したものとなっている。福島自身の説明によると『亜欧日記』は多くの機密事項を含んでおり、郵便を安全に送付できる場所に着くたびに旅の詳細を報告したもので、『亜細亜略報』はそれとは別に紛失しても差し支えない事項のみを略記したものである。もともとペルシヤ国内は強盗が横行して郵便が不正確であるので、途中経過の概要を『亜細亜略報』として記しておくことにしたが、この形式が便利であることがわかったため、そのまま継続して書き続けることにしたという（『亜欧日記』第二八号、一八九六年五月二十八日、五三六頁、太田編『中央亜細亜より亜拉比亞へ』二五八頁—『亜細亜略報』第三八号、一八九六年十二月三十一日）。

右のように報告書は郵便で日本に送られていたことがわかるが、この二つの資料によって亜欧旅行の主要な部分をおおむね知ることができる。ただしコーカサス地方（現アゼルバイジャン、ジョージア）での見聞の実際についてはほとんど記されていない。また両資料がカバーしていない帰路シンガポール出航後のシヤム訪問、仏領インドシナ視察については、恐らく英仏両国による進出状況を探ることが目的であったと推測されるが、調査の実態は不明である。

(184) たえば上海ではオーストリア臨時総領事より、ロシアが吉林省、黒竜江省に工兵を派遣して測量、鉄道建設の準備を行っている旨を聞き、香港の中川恒次郎領事、シンガポールの藤田敏郎領事（あるいは三井物産支店）から、ウラジオストクへ向かうロシア艦隊が香港、シンガポールで補給を行う際、日本産の石炭に依存していることを知らされた。そのほかに香港からシンガポールまで同じ船に乗り合わせたロシアの東シベリア総督とも会話を交え、ロシアが東シベリアや清国での日本の諜報

- 活動を警戒し、それに神経をとがらせていることを感じ取った(『亜欧日記』第二号、一八九五年十月十五日、九、一四―一五頁、同第三号、十月二十日、二〇―二二頁、同第五号、十月二十八日、三二頁)。
- (185) 『亜欧日記』第五号、一八九五年十月二十八日、三五頁。
- (186) 『亜欧日記』第七号、一八九五年十一月八日、五〇―五一頁。
- (187) 『亜欧日記』第八号、一八九五年十一月二十四日、六二頁、第九号、十一月二十五日、七七―七八頁、第十二号、十二月二十三日、一四〇頁。同第二十一号、一八九六年二月十五日、三七六―三七八頁、第三十二号、三月五日、三九二頁。
- (188) 『亜欧日記』第二十七号、一八九六年二月六日、二四一―二四二、二五〇―二五三、二五九―二六〇頁。
- (189) 同右、二四六―二四七頁。
- (190) 同右、二四三、二四五―二四六、二六四頁。
- (191) 『亜欧日記』第一八、一九号、一八九六年一月二十四、二十七日。
- (192) 『亜欧日記』第二〇号、一八九六年一月三十一日。
- (193) 『亜欧日記』第二二号、一八九六年三月五日、三九六頁。
- (194) 『亜欧日記』第二五号、一八九六年四月二十二日、四六五頁。
- (195) 『亜欧日記』第二六号、一八九六年五月十六日、四七七、四八一頁。
- (196) 同右、四八四―四九〇頁。
- (197) 以上チャマンの状況については『亜欧日記』第二十七号、一八九六年五月二十九日、五〇二―五〇六頁。
- (198) 同右、五〇六頁。
- (199) 同右、五〇八―五〇九頁。
- (200) 『亜欧日記』第二九号、一八九六年五月三十日、五三八、五四三―五四四頁。同第三〇号、一八九六年六月二日、五四七頁。
- (201) 『亜欧日記』第三〇号、一八九六年六月二日、五四八、五五〇、五六三―五六四頁。太田編『中央亜細亜より亜拉比亜へ福島將軍遺績続』一七五頁(『亜細亜略報』第三三号、一八九六年十一月二十五日)。
- (202) 『亜欧日記』第三〇号、一八九六年六月二日、五五八―五五九頁、同第三二号、七月十六日、五七一―五七三、五七七―五七七

- 八頁。
- (203) 『亜欧日記』第三二号、一八九六年七月十六日、五七五―五七六、五八二―五八四頁、同第三二号、七月十八日、五九四―五九五頁。
- (204) 『亜欧日記』第三三号、一八九六年七月二十二日、六一二頁。
- (205) 『亜欧日記』第三四号、一八九六年七月二十三日、六一〇頁。
- (206) 『亜欧日記』第三三三号、一八九六年七月二十二日、六〇一頁、同第三五号、七月二十四日、六二五―六二六頁。
- (207) 国王謁見については、太田編『中央亜細亜より亞拉比亞へ』七五―七八頁（『亜細亜略報』第一五号、一八九六年七月二十二日）。総理大臣との会見は、同右六七―七〇頁（『亜細亜略報』第一三三号、一八九六年七月十二日）。
- (208) 『亜欧日記』第三三三号、一八九六年七月二十二日、同第三四号、七月二十三日、同第三六号、七月二十七日。
- (209) 『亜欧日記』第三六号、一八九六年七月二十七日、六四五頁。
- (210) 『亜欧日記』第三四号、一八九六年七月二十三日、六一八―六一九頁。マストド・ミルザ親王は遊獵の際に受けた銃傷を英人医師に治してもらった経験から「自分の半身はイギリスにある」と語り、日本におもしろい遊獵はあるかと問うので、福島が「北方ニ熊アリ南方ニ野猪アリ」と答えると、親王は笑って「北方ノ熊獵ハ極メテ愉快ナルヘキモ、注意セサレハ危険ナルヘシ」と述べ、自身が親英反露であることを示唆した。
- (211) 『亜欧日記』第三三三号、一八九六年七月二十二日、六〇九頁。
- (212) 『亜欧日記』第三四号、一八九六年七月二十三日、六一九頁、同第三六号、七月二十七日、六四五頁。
- (213) 太田編『中央亜細亜より亞拉比亞へ』八〇、八五、九四頁（『亜細亜略報』第一六号、一八九六年七月三十一日、第一七号、八月十二日）。日本出發以来の日誌、『亜欧日記』第三一―三三六号、礼服などは英国館の主人ライトに預けたという。これらの機密文書はライトからイギリス公使館に渡されて盗読された可能性がある。また福島が携帯したという鞍袋とは、鞍囊（馬の鞍の左右に垂らす革製の袋）の類であろうか。
- (214) 同右、九五―一〇三頁（『亜細亜略報』第一七一―二〇号、一八九六年八月十二―二十三日）。
- (215) 同右、一〇三―一〇四頁（『亜細亜略報』第二〇号、一八九六年八月二十三日）。

- (216) 同右、一〇五―一〇六頁(『亜細亜略報』第二二号、一八九六年八月二十八日)。馬車の中から地勢を観察する作業は以後のルートでも続けられた。
- (217) 同右、一〇六頁。
- (218) 同右、一〇七―一〇八頁。
- (219) 同右、一〇九―一一四頁(『亜細亜略報』第二三号、一八九六年八月三十一日)。
- (220) 同右、一一二―一二五頁(『亜細亜略報』第二三号、一八九六年九月七日)。
- (221) 『亜細亜略報』ではプハラの「兵卒」を見たと言われているが、『中央亜細亜より亜拉比亜へ』では「兵営」を視たと記されている。「兵卒」と「兵営」では大きな違いがあるが、ここでは文脈からいって兵営の方が正しいように思われる。
- (222) 太田編『中央亜細亜より亜拉比亜へ』一五―一六頁(『亜細亜略報』第二三号、一八九六年九月七日)。
- (223) 同右、一六―一七頁(『亜細亜略報』第二四号、一八九六年九月十日)。チエルピッキー少将は福島が駐独武官の時、ドイツ領ポーランドのプレスラウ(現ヴロツワフ)で行われた独軍の大演習で知り合い、シベリア単騎横断旅行の際はノヴゴロドの連隊長で、福島が同地に着くと旅館にやって来て親しく閑談している(福島「単騎遠征」太田編『福島將軍遺績』所収、二二―二四頁)。
- (224) 同右、一八―二二頁(『亜細亜略報』第二四号、一八九六年九月十日、第二五号、九月十九日)。
- (225) 同右、二二―二五頁(『亜細亜略報』第二五号、一八九六年九月十九日)。
- (226) 同右、二五―二七頁。
- (227) 同右、二二―二四、二七頁(『亜細亜略報』第二六号、一八九六年九月二十日、第二七号、九月二十二日)。
- (228) 同右、二四頁(『亜細亜略報』第二七号、一八九六年九月二十二日)。
- (229) 同右、一三八頁。
- (230) 同右、一三九―一四〇頁(『亜細亜略報』第二八号、一八九六年十月六日)。
- (231) 『亜欧日記』第三六号、一八九六年七月二十七日、六四―一頁、太田編『中央亜細亜より亜拉比亜へ』七〇、一四二―一四三頁(『亜細亜略報』第一三号、一八九六年七月十二日、同第二九号、十月九日)。

- (232) 太田編『中央亜細亜より亜拉比亞へ』一四五、一六五頁(『亜細亜略報』第二九号、一八九六年十月九日、第三一号、十一月二十三日)。
- (233) 同右、一四三―一四四頁(『亜細亜略報』第二九号、一八九六年十月九日)。
- (234) 同右、一四五、一四八―一四九、一五九―一六〇頁(『亜細亜略報』第二九号、一八九六年十月九日、同第三〇号、十月十七日、同第三一号、十一月二十三日)。
- (235) 同右、二一六、二二〇―二二二頁(『亜細亜略報』第三五号、一八九六年十二月二十七日)。
- (236) 同右、二二九―二三〇頁(『亜細亜略報』第三七号、一八九六年十二月三十日)。
- (237) 同右、二五七―二五九頁(『亜細亜略報』第三八号、一八九六年十二月三十一日)。
- (238) 同右、一六頁(『亜細亜略報』第二四号、一八九六年九月十日)。
- (239) 同右、一五頁(『亜細亜略報』第二三号、一八九六年九月七日)。
- (240) 同右、一七頁(『亜細亜略報』第二四号、一八九六年九月十日)。
- (241) 『巴尔干半島日記 布尔牙利之部』I、十二月二十一日の条に別枠として記されたものである。
- (242) 田嶋信雄『日本陸軍の対ソ謀略―日独防共協定とユーラシア政策―』(吉川弘文館、二〇一七年)、四三―四四頁、拙稿「アフガニスタンをめぐる日本の諜報工作活動―一九三四―一九四五年を中心に―」『拓殖大学論集 政治・経済・法律研究』二二二卷一号、二〇一九年十月、八三頁を参照のこと。
- (243) 「防共回廊」構想については、関岡英之『帝国陸軍 知られざる地政学戦略―見果てぬ「防共回廊」―』(祥伝社新書、二〇一九年)を参照されたい。旧版『帝国陸軍 見果てぬ「防共回廊」―機密公電が明かす、戦前日本のユーラシア戦略―』(祥伝社、二〇一〇年)を改稿、加筆したものである。
- (244) 佐藤守男『情報戦争と参謀本部―日露戦争と辛亥革命―』(芙蓉書房出版、二〇一一年)の第三章「日本陸軍と日英軍事協商」。
- (245) 「単騎遠征報告総論 第一」一三頁。
- (246) 『亜欧日記』第三号、一八九五年十月二十日、二〇頁。

- (247) 『亜欧日記』第八号、一八九五年十一月二十四日、七〇頁。
(248) 『亜欧日記』第一六号、一八九六年一月二十一日、二三四頁。
(249) 『亜欧日記』第一七号、一八九六年二月六日、二五六―二五七頁。

主要参考文献

【主な一次史料】

■英領インド

- ① 福嶋安正、田内三吉『印度紀行』（一八八七年一月、陸軍文庫発行）
- ② 福島『印度形勢摘要』上（一八八六年十一月、拓殖大学文京図書館所蔵）
- ③ 福島自筆原稿「陸軍改正摘要」（国立国会図書館憲政資料室所蔵、福島安正関係文書九八）
- ④ 福島自筆原稿「隣邦兵備略第三版」（同右所蔵、福島安正関係文書五〇）
- ⑤ 福島「印度兵制一斑」『月曜会記事』第一七、一八号、一八八六年十一月、十二月印刷（JACAR〈アジア歴史資料センター〉Ref. C15120183900、C15120184300 合本月曜会記事第二卷明治一九〇二―防衛省防衛研究所）

■ベルリン、バルカン半島

- ⑥ 『視察・調査報告綴』（防衛省防衛研究所戦史研究センター史料室所蔵）
- ⑦ 福島『単騎遠征報告総論 第一―第四』（同右所蔵）
- ⑧ 福島浄写稿本『単騎遠征報告総論』上（⑦の第一―二に相当、天理大学附属天理図書館所蔵）
- ⑨ 福島浄写稿本『単騎遠征報告総論』中（⑦の第三―四に相当、同右所蔵）
- ⑩ 福島『巴尔干半嶋日記 布尔牙利 土耳其之部』（以下同右所蔵）
『巴尔干半嶋日記 布尔牙利之部』

『バル干半嶋日記 布尔牙利之部』（右書と同タイトルであるが内容は別）

『バル干半嶋日記 塞爾維 希臘之部』

『バル干半嶋日記 希臘蒙的尼羅之部』

『巴爾干巡回日誌』

『巴爾干半嶋巡回 決算報告扣』

- ⑪ 福島講演、白井喜代松速記「大陸旅行談」（衆議院速記課用箋、年月日記載なし、香川大学図書館神原文庫所蔵）
- ⑫ 森林太郎『鷗外全集 第三五卷 日記』（岩波書店、一九七五年一月）

■ シベリア単騎横断

⑬ 福島『単騎遠征報告 第一第二』（防衛省防衛研究所戦史研究センター史料室所蔵）

⑭ 福島浄写稿本『単騎遠征報告』第一—三（第一—二は⑬と同じ、第三は別物、天理大学附属天理図書館所蔵）

⑮ 福島浄写稿本『単騎遠征報告総論 殘篇』（⑭の第三に続くもの、同右所蔵）

⑯ 西村時彦（天囚）編『単騎遠征録』（金川書店、一八九四年六月）

⑰ 福島述、野中春洋編『伯林より東京へ 単騎遠征』（小西書店、一九一八年十二月）

⑱ 太田阿山編『福島將軍遺蹟』（東亜協会、一九四一年六月、大空社、一九九七年二月）

⑲ 南滿洲鉄道株式会社弘報課編『亜細亞横断記』（滿洲日日新聞社東京支社出版部、一九四二年五月）

■ ペルシヤ、中央アジア

⑳ 福島『亜欧日記』第一—三六号（宮内庁宮内公文書館所蔵）

㉑ 伊藤博文文書研究会監修、檜山幸夫総編集、柏木一朗編集・解題『伊藤博文文書 第九八卷 秘書類纂 兵政 四』（ゆまに書房、二〇一三年、『亜欧日記』第一—九号を収録）

㉒ 福島『亜細亞略報』第一—四〇号（宮内庁宮内公文書館所蔵、天理大学附属天理図書館にもあり、㉑とほぼ同内容）

②③ 福島「亜細亜旅行談」『地学雑誌』一〇集一〇九巻、一〇集一一一巻、一八九八年一月十五日、三月十五日（STAGEより閲覧、ダウロード可）

④ 太田阿山編『中央亜細亜より亜拉比亜へ 福島將軍遺績続』（東亜協会、一九四三年十二月、大空社、一九九七年二月）

⑤ 福島「波斯紀行」金子民雄訳『海外渡航記叢書3 シルクロード紀行I』『中亜細亜紀事』『波斯紀行』―（雄松堂出版、一九九〇年三月）所収（④の一部を現代語訳したもので、金子氏の解題が付されている）

■その他

②⑥ 福島「従明治十三年至同三十年十八年間跋涉略図」〔防衛省防衛研究所戦史研究センター史料室所蔵〕

②⑦ 福島「巴尔干旅行 単騎旅行 亜欧旅行 路線略図」〔同右所蔵〕

②⑧ 福島「慶應元年ヨリ明治四十年ニ至ル履歴」〔国立国会図書館憲政資料室所蔵、福島安正関係文書九二、拙稿「資料紹介 福島安正『慶應元年ヨリ明治四十年ニ至ル履歴』」拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究』第四四号、二〇二〇年十月で翻刻）

②⑨ 太田阿山編『福島將軍 大陸征旅詩集』（東亜協会、一九三九年九月）

【主な先行研究】

① 金子民雄「中央アジアに入った日本人」〔新人物往来社、一九七三年十一月、中公文庫、一九九二年五月）

② 島貫重節「福島安正と単騎シベリア横断」上下〔原書房、一九七九年十一月）

③ 清水瀧「島貫重節著『福島安正と単騎シベリア横断』所感」『軍事史学』一五巻四号、一九八〇年三月

④ 島貫重節『戦略・日露戦争』上〔原書房、一九八〇年十一月）

⑤ 坂井藤雄『シベリア横断・福島安正大將伝』（葦書房、一九九二年四月、小説）

⑥ 豊田穰「情報将校の先駆 福島安正―ユーラシア大陸単騎横断―」〔講談社、一九九三年六月、小説、カバー写真は誤って別人のものを使っている）

- ⑦ Ewa Palasz-Rutkowska, "Major Fukushima Yasunasa and His Influence on the Japanese Perception of Poland at the Turn of the Century," in *The Japanese and Europe: Images and Perceptions*, ed. Bert Edström (Japan Library [Richmond, Surrey: Curzon Press], 2000)
- ⑧ 篠原昌人「陸軍大将福島安正と情報戦略」(芙蓉書房出版、二〇〇二年十二月)
- ⑨ 原山焯「福島安正のシベリア単騎旅行に関する大衆メディアの諸相―絵図をめぐって―」(平成一三・一四年度科学研究費補助金特定領域(A)(2)「東アジアの出版文化」研究成果報告書、二〇〇三年三月)
- ⑩ 金子民雄「情報戦を視野に置いた困難な単独シベリア横断 福島安正」『別冊太陽 日本のこころ』第一二五号、二〇〇三年十月
- ⑪ 大場一石「単騎シベリア横断 福島安正中佐」『セキユリタリアン』第五四一号、二〇〇三年十二月
- ⑫ 大場一石「情報将校 福島安正の生涯」『セキユリタリアン』第五四三号、二〇〇四年二月十日
- ⑬ 原山焯「蒙古風俗―福島安正からの聞きによる―」『桃山学院大学総合研究所紀要』二九卷三号、二〇〇四年二月二十日
- ⑭ 大山格「近代情報戦の先駆者 福島安正伝」『歴史群像』一四卷一号、二〇〇五年二月
- ⑮ 小松久男「福島安正」小松久雄、梅村坦、宇山智彦、帯谷知可、堀川徹編『中央ユーラシアを知る事典』(平凡社、二〇〇五年四月)所収
- ⑯ 原山焯「『朝日新聞社資料』にみえる福島安正のシベリア単騎横断旅行」『市政研究』第一四八号、二〇〇五年七月
- ⑰ 原山焯「福島安正の言説―シベリア単騎横断旅行以後の大衆向け活動について―」『桃山学院大学総合研究所紀要』三二卷三号、二〇〇六年三月
- ⑱ 藤原正彦、水木楊、佐藤優「座談会 対ロシア情報戦略の虚々実々」『文藝春秋』二〇〇九年十二月臨時増刊号「坂の上の雲」と司馬遼太郎」
- ⑲ 鈴木康史「福島安正のシベリア単騎遠征に関する研究覚え書き―『事業』としての冒険・探検と『険を冒す』こと的位置―」『奈良女子大学文学部研究教育年報』第一一号、二〇一四年十二月
- ⑳ 関誠「日清開戦前夜における日本のインテリジェンス―明治前期の軍事情報活動と外交政策―」(ミネルヴァ書房、二〇一六年三

月)

- ⑮ Sven Saaler, "Fukushima Yasunasa's Travels in Central Asia and Siberia: Silk Road Romanticism, Military Reconnaissance, or Modern Exploration?" in *Japan on the Silk Road: Encounters and Perspectives of Politics and Culture in Eurasia*, ed. Selçuk Esenbel (Leiden and Boston: Brill, 2018)
- ⑯ Selçuk Esenbel, "Fukushima Yasunasa and Utsunomiya Tarō on the Edge of the Silk Road: Pan-Asian Visions and the Network of Military Intelligence from the Ottoman and Qajar Realms into Central Asia," *ibid.*
- ⑰ 三沢伸生「一九世紀末のイスタンブールにおける日本軍の情報活動―福島安正『亜欧日記』の史料的价值―」『東洋大学社会学部紀要』五五巻二号、二〇一八年三月
- ⑱ エヴァ・パワシユリルトコフスカ、アンジェイ・タデウシユ・ロメル共著、柴理子訳『増補改訂』日本・ポーランド関係史―一九〇四―一九四五―』(彩流社、二〇一九年十二月)

(原稿受付 二〇二二年二月八日)